

只見川流域築堤工事遺跡発掘調査報告 1

只見川流域築堤工事遺跡発掘調査報告 1

小和瀬遺跡

小和瀬遺跡

2022年

福島県教育委員会
公益財團法人福島県文化振興財団
福島県土木部

只見川流域築堤工事遺跡発掘調査報告 1

只見川流域
築堤工事遺跡
発掘調査報告 1

序 文

只見川は、福島県の奥会津に源流を発し、会津地方を北上して阿賀川に合流する河川で、古来より会津地方の生活を支えてきました。福島県土木部が実施している只見川流域築堤工事は、平成23年7月の新潟・福島豪雨を契機とし、洪水被害の軽減を目的としたものです。

福島県教育委員会では工事計画地内に所在する大沼郡三島町小和瀬遺跡について、埋蔵文化財の保存のための協議を行いましたが、現状での保存が困難であったため、記録保存のための発掘調査を実施することとしました。

本報告書は令和元(平成31)年度に実施した、発掘調査の調査結果をまとめたものです。小和瀬遺跡では、縄文時代晩期を中心に集落が形成され、土器・石器に加え土偶や独鉛石なども出土しており、さまざまな活動が行われていた様子が明らかとなりました。

この報告書が、県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習などの資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、御理解と御協力をいただいた福島県土木部会津若松建設事務所、三島町教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和4年3月

福島県教育委員会

教育長 鈴木淳一

あいさつ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託を受けて、県内における開発行為に先立ち、開発対象地域内に所在する埋蔵文化財の調査を実施しています。

只見川は尾瀬沼から源流を発し、阿賀川と合流する総延長145kmの奥会津を流れる河川です。平成23年7月の新潟・福島豪雨による氾濫では、流域地域は甚大な被害を受けました。こうした洪水を防止する目的で、只見川流域築堤工事が進められています。

本報告書は令和元年度に発掘調査を実施した大沼郡三島町に所在する小和瀬遺跡の調査成果をまとめたものです。

小和瀬遺跡は、東京国立博物館に寄託展示されている土偶が出土した遺跡として著名ですが、昭和28年に竣工した柳津ダムの建設で、水没してしまいました。しかし、小和瀬遺跡の隣接地が只見川流域築堤工事の対象地となったため、試掘・確認調査を実施したところ、遺物・遺構が確認され、小和瀬遺跡の範囲が拡大することとなりました。

小和瀬遺跡の発掘調査では、主に縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての遺物・遺構を確認しました。遺物からは、東北北部・北陸・中部地方や西日本などとの交流を示すものがあり、本遺跡が立地する只見川流域が多方面の地域とつながっていることがうかがわれます。

今後、これらの調査成果を郷土の歴史研究の基礎資料として、さらには地域社会を理解する資料として、生涯学習の場などで幅広く活用していただければ幸いです。

最後に、この調査に御協力いただきました関係諸機関ならびに地域住民の皆様に、深く感謝を申し上げますとともに、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和4年3月

公益財団法人 福島県文化振興財団

理事長 大沼博文

緒　　言

- 1 本書は、令和元年度に実施した只見川流域(小和瀬・麻生地区)築堤工事遺跡発掘調査報告書である。
- 2 本書には以下に記す遺跡の調査成果を収録した。
小和瀬遺跡　福島県大沼郡三島町大字桧原字下小和瀬　埋蔵文化財番号 44400004
- 3 本事業は、福島県教育委員会が福島県土木部と協定を締結して実施し、調査にかかる費用は福島県土木部が負担した。
- 4 福島県教育委員会は、本発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財団に委託して実施した。
- 5 公益財団法人福島県文化振興財団では、遺跡調査部の下記の職員を配置して調査及び報告書の作成にあたった。
専門文化財主査 吉野滋夫
- 6 本書の執筆は、担当職員が行った。
- 7 本書に掲載した自然科学分析は、次の機関に委託し、その結果を掲載している。
放射性炭素年代測定、炭素・窒素安定同位体比分析、顔料分析：パリノ・サーヴェイ株式会社
種実圧痕同定、付着物材質分析、底部敷物圧痕レプリカ作製：株式会社パレオ・ラボ
- 8 本書に収録した調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に際して、次の機関及び個人から協力・助言をいただいた。
三島町教育委員会　柳津町教育委員会　片山 長一郎

用 例

1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方 位 図中の方位は座標北を示す。方位記号の無いものは、図の真上を座標北とする。
- (2) 縮 尺 各挿図中に縮小率を示した。
- (3) ケ バ 遺構内の傾斜部は「 TT 」の記号で表現した。
- (4) 土 層 遺構外堆積土は大文字の L とローマ数字で、遺構内堆積土は小文字の ℓ と算用数字で表記した。
(例) 遺構外堆積土…L I・L II 遺構内堆積土…ℓ 1・ℓ 2
- (5) 標 高 挿図中に示した標高は、海拔高度を示す。
- (6) 土 色 土層注記に使用した土色は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄 1999)に基づいている。
- (7) 網 点 網点は焼土面を示す。

2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 縮 尺 各挿図中に縮小率を示した。
- (2) 遺 物 番 号 挿図ごとに通し番号を付し、本文中では下記のように省略した。
(例) 図1の2番の遺物…図1-2
遺物写真内で遺物に付した番号は、挿図中の遺物番号と一致する。
(例) 1-2…図1-2
- (3) 遺物計測値 () 内の数値は推定値、[] 内の数値は遺存値を示す。
少数第2位以下は四捨五入とした。

3 本書で使用した略号は、次のとおりである。

三島町…M S	小和瀬遺跡…K W Z	竪穴住居跡…S I	掘立柱建物跡…S B
土坑…S K	溝跡…S D	土器埋設遺構…S M	焼土遺構…S G
遺物包含層…S H	柱穴・小穴…P		

4 第3章で記載した市町村名は、令和3年11月のものである。

5 引用・参考文献は、執筆者の敬称を省略し、第3章末に収めた。

目 次

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節	調査事業の経緯	1
第2節	遺跡の位置と地理的環境	1
第3節	歴史的環境	2
第4節	調査経過	7
第5節	調査方法	12

第2章 遺構と遺物

第1節	基本層序と遺構の分布	14		
第2節	堅穴住居跡	17		
1号住居跡(17)				
第3節	掘立柱建物跡と小穴	23		
1号建物跡(23)	2号建物跡(23)	小穴(26)		
第4節	土 坑	27		
1号土坑(27)	2号土坑(27)	3号土坑(28)	4号土坑(28)	5号土坑(28)
6号土坑(30)	7号土坑(30)	8号土坑(33)		
第5節	その他の遺構	35		
1号土器埋設遺構(35)	2号土器埋設遺構(35)	焼土遺構(35)	1号溝跡(39)	
1号性格不明遺構(39)	2号性格不明遺構(39)			
第6節	遺物包含層と遺構外出土遺物	41		
遺物包含層(41)	遺構外出土遺物(125)			

第3章 ま と め

第1節	遺物について	136
第2節	遺構について	148

付章1 小和瀬遺跡出土遺物分析

第1節	放射性炭素年代測定	151
第2節	炭素・窒素安定同位体比分析	155
第3節	蛍光X線分析	160

付章2 小和瀬遺跡出土土器分析

第1節	レプリカ法による土器種実圧痕の同定	165
第2節	弥生土器付着物の材質分析	174
第3節	底部敷物圧痕のレプリカ作製および写真撮影	176

挿図・表・写真目次

[挿図]			
図1 小和瀬地区位置図	1	図31 遺物包含層出土土器(3).....	46
図2 只見川河川整備事業 (片門地区～只見地区位置図)	2	図32 遺物包含層出土土器(4).....	47
図3 地形分類図	3	図33 遺物包含層出土土器(5).....	48
図4 表層地質図	4	図34 遺物包含層出土土器(6).....	49
図5 周辺の遺跡	5	図35 遺物包含層出土土器(7).....	50
図6 三島町教育委員会収蔵 小和瀬遺跡表採遺物	9	図36 遺物包含層出土土器(8).....	51
図7 三島町教育委員会収蔵小和瀬遺跡表採遺物 『福島県発見石器時代土偶図版』 所収の土偶	10	図37 遺物包含層出土土器(9).....	52
図8 工事範囲図	11	図38 遺物包含層出土土器(10).....	54
図9 基本土層	15	図39 遺物包含層出土土器(11).....	55
図10 遺構配置図	16	図40 遺物包含層出土土器(12).....	57
図11 1号住居跡	18	図41 遺物包含層出土土器(13).....	58
図12 1号住居跡出土土器(1)	19	図42 遺物包含層出土土器(14).....	61
図13 1号住居跡出土土器(2)	20	図43 遺物包含層出土土器(15).....	62
図14 1号住居跡出土土器・石器	21	図44 遺物包含層出土土器(16).....	63
図15 1号住居跡出土石器・石製品	22	図45 遺物包含層出土土器(17).....	64
図16 1・2号建物跡	24	図46 遺物包含層出土土器(18).....	65
図17 小穴・出土土器	25	図47 遺物包含層出土土器(19).....	66
図18 小穴	26	図48 遺物包含層出土土器(20).....	68
図19 1～4号土坑	29	図49 遺物包含層出土土器(21).....	69
図20 5～8号土坑・土坑出土土器	31	図50 遺物包含層出土土器(22).....	70
図21 土坑出土土器(1)	32	図51 遺物包含層出土土器(23).....	72
図22 土坑出土土器(2)	33	図52 遺物包含層出土土器(24).....	73
図23 土坑出土石器	34	図53 遺物包含層出土土器(25).....	74
図24 1・2号土器埋設遺構・出土土器	36	図54 遺物包含層出土土器(26).....	75
図25 1～4号焼土遺構	37	図55 遺物包含層出土土器(27).....	76
図26 5～10号焼土遺構	38	図56 遺物包含層出土土器(28).....	78
図27 11・12号焼土遺構、1号溝跡・出土土器、 1・2号性格不明遺構	40	図57 遺物包含層出土土器(29).....	79
図28 グリッド出土繩文土器		図58 遺物包含層出土土器(30).....	80
弥生土器・石器出土点数	41	図59 遺物包含層出土土器(31).....	81
図29 遺物包含層出土土器(1)	43	図60 遺物包含層出土土器(32).....	82
図30 遺物包含層出土土器(2)	44	図61 遺物包含層出土土器(33).....	83
		図62 遺物包含層出土土器(34).....	84
		図63 遺物包含層出土土器(35).....	85
		図64 遺物包含層出土土器(36).....	89
		図65 遺物包含層出土土器(37).....	90
		図66 遺物包含層出土土器(38).....	91
		図67 遺物包含層出土土器(39).....	92

■68 遺物包含層出土土器(40)	93	■104 器形分類(1)	137
■69 遺物包含層出土土器(41)	94	■105 器形分類(2)	138
■70 遺物包含層出土土器(42)	95	■106 文様構成	139
■71 遺物包含層出土土器(43)	96	■107 大洞A式併行期の浮線文土器	140
■72 遺物包含層出土土器(44)	97	■108 大洞A'式併行期の浮線文土器	143
■73 遺物包含層出土土器(45)	98	■109 大洞A式～大洞A'式併行期の 浮線文以外の土器	144
■74 遺物包含層出土土器(46)	99		
■75 遺物包含層出土土器(47)	100	■110 暗年較正結果	154
■76 遺物包含層出土土器(48)	101	■111 測定結果と食材の比較	156
■77 遺物包含層出土土器(49)	103	■112 試料採取位置(1)	158
■78 遺物包含層出土土器(50)	104	■113 試料採取位置(2)	159
■79 遺物包含層出土土器(51)	106	■114 試料採取土器	159
■80 遺物包含層出土土器(52)	107	■115 蛍光X線分析箇所	163
■81 遺物包含層出土土製品	109	■116 試料採取土器(1)	168
■82 遺物包含層出土石器(1)	111	■117 試料採取土器(2)	169
■83 遺物包含層出土石器(2)	112	■118 小和瀬遺跡出土土器の圧痕レプリカの 走査型電子顕微鏡写真(1)	170
■84 遺物包含層出土石器(3)	113	■119 小和瀬遺跡出土土器の圧痕レプリカの 走査型電子顕微鏡写真(2)	171
■85 遺物包含層出土石器(4)	114	■120 小和瀬遺跡出土土器の圧痕レプリカの 走査型電子顕微鏡写真(3)	172
■86 遺物包含層出土石器(5)	115	■121 小和瀬遺跡出土土器の圧痕レプリカの 走査型電子顕微鏡写真(4)	173
■87 遺物包含層出土石器(6)	116	■122 土器付着物と付着物の 赤外吸収スペクトル図	175
■88 遺物包含層出土石器(7)	117	■123 試料採取土器	175
■89 遺物包含層出土石器(8)	118	■124 小和瀬遺跡出土土器と 圧痕レプリカの写真(1)	177
■90 遺物包含層出土石器(9)	119	■125 小和瀬遺跡出土土器と 圧痕レプリカの写真(2)	178
■91 遺物包含層出土石器(10)	120	■126 小和瀬遺跡出土土器と 圧痕レプリカの写真(3)	179
■92 遺物包含層出土石器(11)	121	■127 小和瀬遺跡出土土器と 圧痕レプリカの写真(4)	180
■93 遺物包含層出土石器(12)	122		
■94 遺物包含層出土石器(13)	123		
■95 遺物包含層出土石器・石製品	124		
■96 遺物包含層出土石製品	125		
■97 遺構外出土土器(1)	128		
■98 遺構外出土土器(2)	129		
■99 遺構外出土土器(3)	130		
■100 遺構外出土土器(4)	131		
■101 遺構外出土土器(5)	132		
■102 遺構外出土石器(1)	133		
■103 遺構外出土石器(2)	134		

[表]

表1	周辺の遺跡一覧	6	表7	螢光X線分析結果	161
表2	小穴一覧表	27	表8	小和瀬遺跡出土土器の圧痕同定結果	165
表3	器形分類表	136	表9	小和瀬遺跡出土土器の圧痕一覧	167
表4	放射性炭素年代測定結果(1)	153	表10	付着物の分析を行った土器とその詳細	174
表5	放射性炭素年代測定結果(2)	154	表11	生漆の赤外吸収位置とその強度	174
表6	安定同位体比分析結果	156	表12	底部敷物圧痕のレプリカ作製試料一覧	176

[写真]

1	調査前近景	183	22	遺物包含層出土土器(4)	198
2	調査区遠景	183	23	遺物包含層出土土器(5)	199
3	調査区遠景	184	24	遺物包含層出土土器(6)	200
4	調査区全景	184	25	遺物包含層出土土器(7)	201
5	調査区東部近景	185	26	遺物包含層出土土器(8)	202
6	基本土層、作業風景	185	27	遺物包含層出土土器(9)	203
7	1号住居跡	186	28	遺物包含層出土土器(10)	204
8	1号建物跡全景	187	29	遺物包含層出土土器(11)	205
9	1号建物跡細部	187	30	遺物包含層出土土器(12)	206
10	2号建物跡全景	188	31	遺物包含層出土土器(13)	207
11	2号建物跡細部	188	32	遺物包含層出土土器(14)	208
12	土坑	189	33	遺物包含層出土土器(15)	209
13	焼土遺構	190	34	遺物包含層出土土器(16)	210
14	土器埋設遺構、溝跡、性格不明遺構	191	35	遺物包含層出土土器(17)	211
15	小穴、遺物包含層	191	36	遺物包含層出土土器(18)	212
16	三島町教育委員会所蔵 小和瀬遺跡表採資料	192	37	遺物包含層出土土器(19)	213
17	1号住居跡出土土器・石器	193	38	遺物包含層出土土器(20)	213
18	土坑出土土器・石器、 土器埋設遺構出土土器	194	39	遺物包含層出土土器(21)	214
19	遺物包含層出土土器(1)	195	40	遺物包含層出土土器・土製品	215
20	遺物包含層出土土器(2)	196	41	遺物包含層出土石器(1)	216
21	遺物包含層出土土器(3)	197	42	遺物包含層出土石器(2)	216
			43	遺物包含層・遺構外出土石器・石製品	217
			44	遺構外出土土器	218

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査事業の経緯

只見川は延長145kmの阿賀川の支流で、尾瀬沼からの流出点が源流である。只見川では、梅雨前線や台風の接近による集中豪雨などに加え、その流域が豪雪地帯であるため春先の融雪期の出水が長期にわたり、多くの被害を流域町村に与えてきた。こうした度重なる洪水を防止するため平成21(2009)年に一級河川阿賀川水系只見川圏域河川整備計画が策定され、それに基づく河川工事が行われている。さらに近年では、平成23(2011)年7月の新潟・福島豪雨による只見川の氾濫により、流域地域は甚大な被害を受けた。この被害を受けて、整備計画は平成27(2015)年・平成30(2018)年に変更が行われている。

只見川では、阿賀川合流点から伊南川合流点までの80.5kmの区間が対象で、会津坂下町・柳津町・三島町・金山町・只見町の計24地区で、川幅拡幅のための掘削・築堤の新設・宅地の嵩上げなどを行い浸水被害の防止、軽減を図っている。河川工事にあたっては、自然環境の保全とともに地域と一体となった河川環境の整備を目指している。

なお、三島町小和瀬地区は阿賀川合流点から23.5kmの地点にあり、築堤・橋門などの新設を行う。

第2節 遺跡の位置と地理的環境

三島町は福島県西部の会津地方に属し、その西央部に位置する。三島町の大半が山地となっている。三島町北西部には、只見川が穿入蛇行しながら北流し、深い峡谷を形成している。

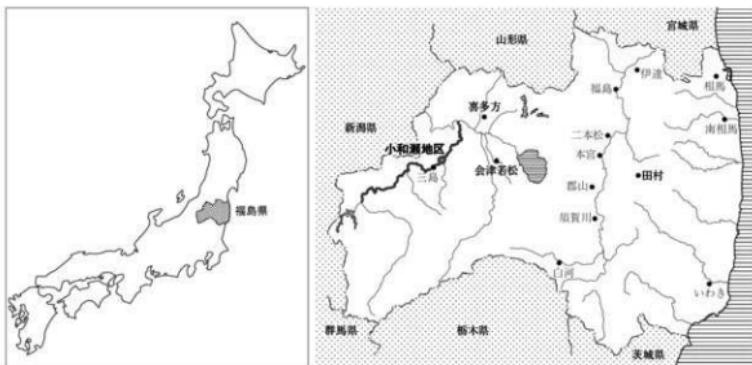


図1 小和瀬地区位置図



図2 只見川河川整備事業（片門地区～只見地区位置図）

只見川流域の上位段丘は、隣接する金山町にある沼沢カルデラ形成時の軽石質火山灰流堆積物によって構成され、峡谷ごとにこれらの堆積物は堰き止められ、階段状に段丘面を形成している。中位段丘は、上位段丘が浸食・開析されて形成されたものであり、下位段丘は上・中位段丘から洗い出された軽石質・砂層を含む砂礫層により構成されている。小和瀬遺跡は、下位段丘に立地している。

表層地質は、各種の固結堆積物や岩石が火山性堆積物と絡み合いながら分布している。図4の三島町東部の大登地区には、砂子原カルデラの堆積物である流紋岩や流紋岩火碎岩・礫・砂及び泥が分布している。三島町北東部の川井地区にはデイサイト・流紋岩火碎岩(一部溶結)・礫岩・砂岩及び泥岩が分布する。これらは後期中新世の藤岡層を構成している。さらに、流紋岩火山碎屑岩が広範囲に分布し、それと重複し流紋溶岩及び貫入岩が部分的に分布している。これらは、前期中新世の滻沢川層を構成しているものである。一方、デイサイトは断層に沿って分布し、中期中新世の二の沢層を構成している。

第3節 歴史的環境

三島町では、旧石器・古墳～奈良時代の遺跡は現時点において確認されていない。

縄文時代の遺跡は、中期中葉から晩期に限定されていることから、隣接する金山町にある沼沢カルデラ形成時の影響をうかがうことができる。

遺跡は只見川及び他の河川沿いの段丘に立地している。縄文時代中期～後期の佐渡畑遺跡(13)や

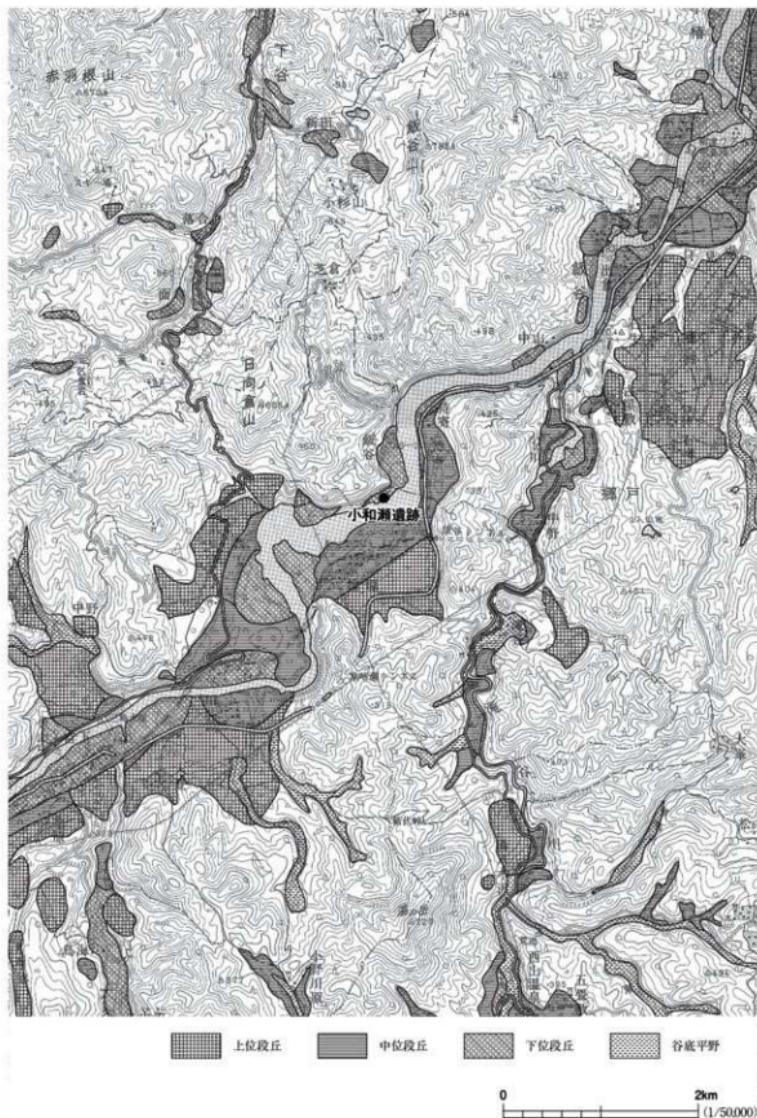


図3 地形分類図

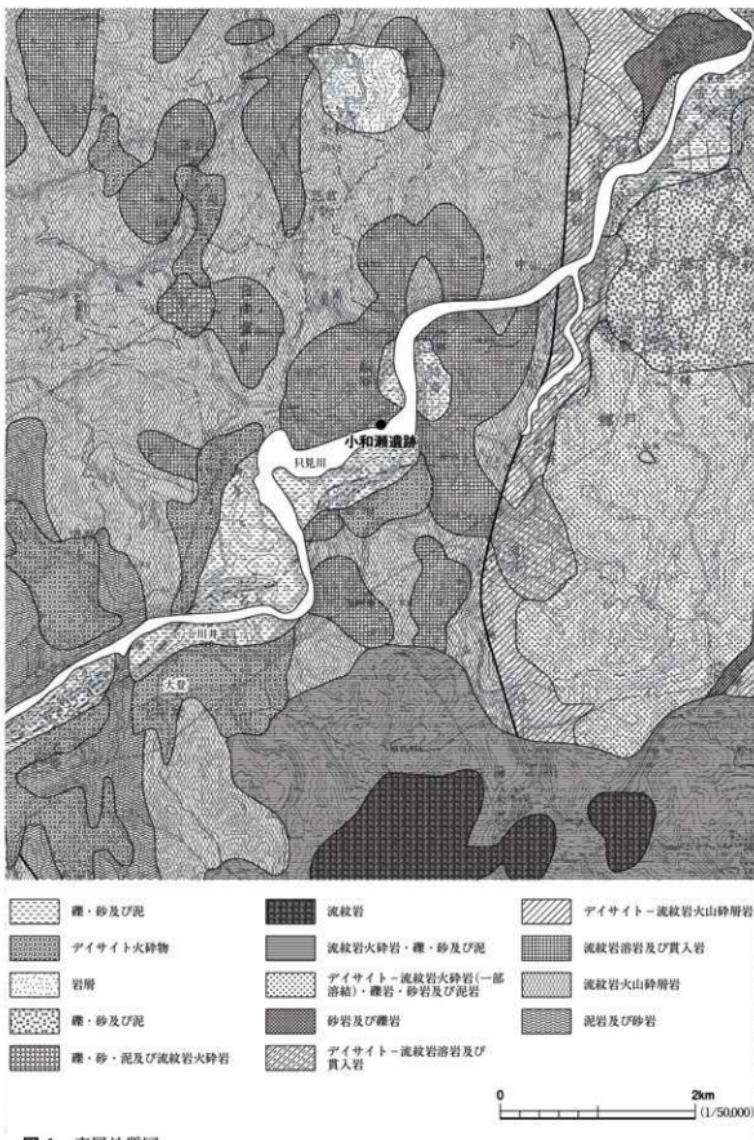


図4 表層地質図

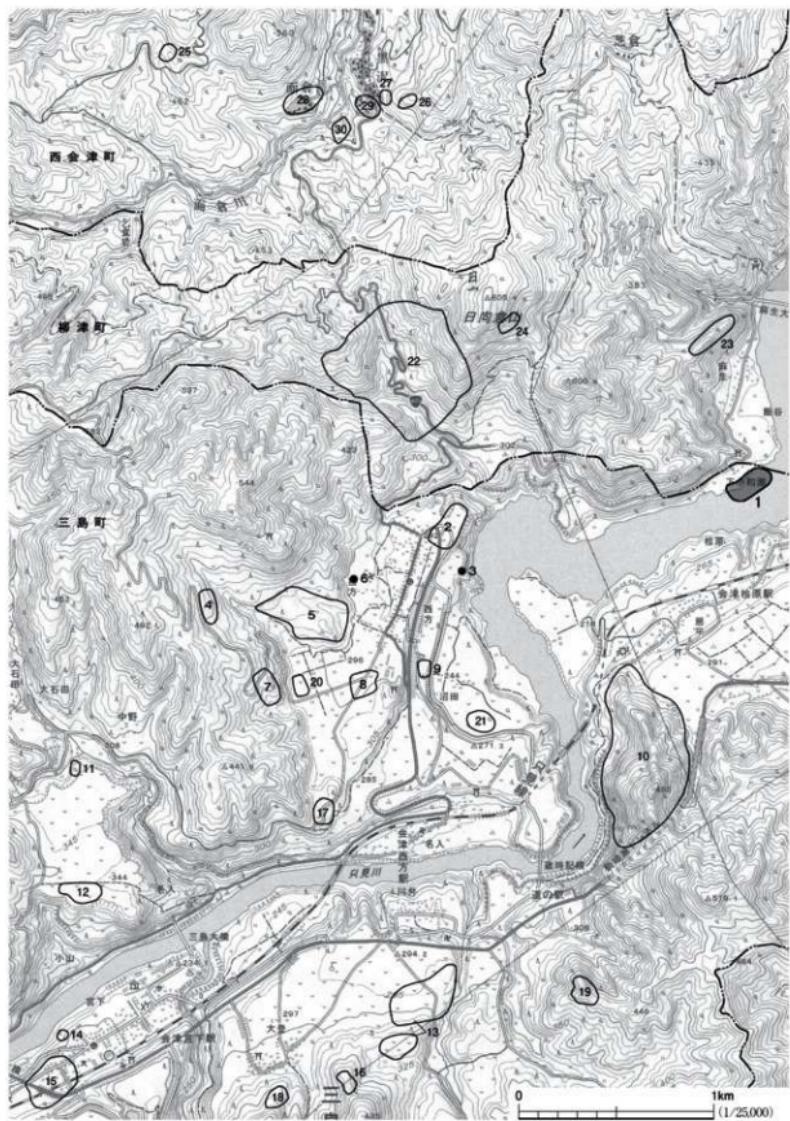


図5 周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	時代	種別
1	小和瀬遺跡	三島町大字桧原字小和瀬	縄文・弥生	集落跡
2	下館遺跡	三島町大字西方字館ノ内	中世	城館跡
3	沼田羽黒神社跡	三島町大字西方字沼田	中世	社寺跡
4	大林遺跡	三島町大字西方字大林	縄文	散布地
5	銭森遺跡	三島町大字西方字並松・南高倉	縄文・弥生	集落跡
6	飯盛山西照院跡	三島町大字西方字巣郷	中世	社寺跡
7	鳴ヶ城跡	三島町大字西方字車峰	中世	城館跡
8	福荷原遺跡	三島町大字西方字上原	縄文	散布地
9	山神社跡	三島町大字西方字沼田	中世	社寺跡
10	丸山城跡	三島町大字松原字上峰	中世	城館跡
11	鶴巻ノ船跡	三島町大字大石田字高尾原	中世	城館跡
12	飯岡遺跡	三島町大字名入字南飯岡	縄文	散布地
13	佐渡畠遺跡	三島町大字川井字下原・宮ノ上	縄文	散布地
14	宮下ノ横跡	三島町大字宮下字建掘	中世	城館跡
15	荒屋敷遺跡	三島町大字桑原字荒屋敷	縄文・弥生	集落跡
16	中平山館跡	三島町大字川井字平山	中世	城館跡
17	飯岡船跡	三島町大字名入字北飯岡	中世	城館跡
18	西海船跡	三島町大字大登字居平	中世	城館跡
19	川井船跡	三島町大字川井字船ヶ沢	中世	城館跡
20	元星敷遺跡	三島町大字西方字稻表	中世	城館跡
21	菅沼船跡	三島町大字西方字沼田	中世	城館跡
22	杉峯金山跡	柳津町大字飯谷字袖山	近代	その他
23	麻生館跡	柳津町大字飯谷字麻生居平	中世	城館跡
24	姥沢筑山	柳津町大字飯谷字日向倉山	近世	その他
25	雨沢遺跡	西会津町大字下谷字山口	縄文・弥生	散布地
26	常岩坊遺跡	西会津町大字下谷字常岩坊	縄文	散布地
27	寺平遺跡	西会津町大字下谷字寺平	縄文	散布地
28	面倉遺跡	西会津町大字下谷字面倉	縄文	散布地
29	今和泉遺跡	西会津町大字下谷字今和泉	縄文	散布地
30	黒沢館跡	西会津町大字下谷字館の越	中世	城館跡

入間方遺跡などでは、敷石住居が確認されている。縄文時代中期～晩期の銭森遺跡(5)や大石田居平遺跡では、竪穴住居跡や土器埋設遺構等が確認されている。縄文時代後期の福荷原遺跡(8)では、配石遺構等が確認されている。縄文時代後期～晩期の中際遺跡からは土笛・線刻櫛などが出土し、土笛については町の文化財として指定されている。縄文時代晩期の荒屋敷遺跡(15)からは、数多くの遺物が出土し、漆塗製品や織錦製品の一部は平成30年に国の重要文化財に指定されている。

弥生時代は荒屋敷遺跡(15)から弥生時代前期～中期中葉の遺物が出土しているが、そのなかでも遠賀川系土器の壺が著名である。銭森遺跡(5)からも弥生時代前期～中期前葉の遺物が出土している。

平安時代の遺跡は金岩山金秀院跡のみが、埋蔵文化財包蔵地台帳に登録されているが、その詳細

は不明である。大同2(802)年、徳一が大石田邑に御坂山大高寺を、入間方邑に横雲山高野寺をそれぞれ建立したとあるが、その所在地は不明である。

文治5(1189)年、奥州藤原氏は源頼朝軍により滅ぼし、会津地方は戦功のあった佐原氏(後の葦名氏)、河原田氏、長沼氏、山ノ内氏らによって分割統治される。中世の三島町は恵日寺に属する御坂山大高寺、葦名氏、山ノ内氏によって支配されていた。山ノ内氏は、天文12(1543)年に葦名氏の配下となり、鳴ヶ城(7)の築城・大高寺領の押領・岩谷城攻略など領土を拡大してゆく。

調査された中世の遺跡のうち下館遺跡(2)では、堀・土塁などが確認され、鳴ヶ城の出丸と考えられている。元屋敷遺跡(20)では、15~16世紀の舶載陶器などが出土していることから、山ノ内氏の居館と推定されている。そのほかの館跡・櫓跡などは、山ノ内氏の一族もしくは葦名氏の家臣、大高寺の有力門徒の城館と伝承されている。

豊臣秀吉の奥州仕置きにより山ノ内氏の所領は没収されてしまうが、滝谷に在住する山ノ内氏の一族は近世に郷頭を代々世襲し、その命脈をつなぐ。その後は、蒲生・上杉・蒲生・加藤・保科と領主が変遷するが、それ以後は天領として幕府直轄もしくは会津藩預かり支配へと変遷してゆく。

近代以降は、明治22(1889)年、町村制実施にともない、西川村、原谷村、三谷村、川西村が誕生するが、同年西川村、原谷村、三谷村は合併して西川村外組合村となる。大正6(1917)年に川西村は西方村と改名し、昭和17(1942)年、西川村外組合村は宮下村と改名する。昭和30(1955)年、町村合併促進法にもとづき宮下村と西方村が合併し三島村となり、昭和36(1961)年、町制が施行され現在の三島町が誕生した。

第4節 調査経過

小和瀬遺跡は古くから周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されているが、昭和28年に竣工した水力発電専用の柳津ダムによって、水没してしまった。その後昭和45(1970)年に、堰堤工事で只見川の水位が下がった際に、縄文時代晩期の浅鉢・深鉢・甕などが表採されている(古川1972)。また、昭和62(1987)年・平成23(2011)年・平成24(2012)年に、三島町教育委員会によって遺物が表採されている。このうち平成23年に表採された遺物については、新潟・福島豪雨により只見川が増水し、土砂とともに遺物が打ち寄せられたものとみられる。この三島町教育委員会が所蔵する遺物の一部については、許可を得て本書に掲載した。

図6-1~4は昭和62年に、図6-5~14、図7-1~2は平成23年に、図7-3は平成24年にそれぞれ表採された。図6-1~13に縄文土器、図6-14・図7に石製品を掲載した。

三島町教育委員会収蔵資料(図6・7、写真16)

本遺跡から表採された土偶(図7)は昭和2(1927)年発行の『福島県石器時代発見土偶図録』の巻頭に収録され、県内においても著名な土偶の1つでもある。この土偶は現在、東京国立博物館に寄託展示されている。

図6-1は半精製土器の深鉢、2~7は精製土器で、2・3・5~7が浅鉢、4が注口土器である。1~3の口唇部には沈線が巡り、突起が取り付く。2~4・6は陽刻的な雲形文が施され、6には刺突文が加わっている。1の胴部には、網目状撚糸文が施されている。器面には酸化鉄が付着する。2の器面は丁寧なミガキが施され、色調は黒褐色である。4の器形は体部中段が強く張り出し、体部上段は急な角度で内側に傾くものとみられる。注口は、根元から口先が上向きとなり、口先が肥厚している。注口の内径は9mmで、円形を示す。注口の外側は縱方向のミガキが施されている。文様は雲形文に加え、隆線にキザミや瘤などが付けられている。5・7の文様は磨消繩文により曲線文が施され、5にはメガネ状付帯文が施されているが、器面の摩滅が著しい。7の口縁部には突起が取り付けられる。8はミニチュア土器で、両端がフック状の文様を沈線で施している。9~13は口縁部で、9・10には隆帶による山形突起が取り付けられている。9は口唇部に円形の突起、平行沈線キザミも加わっている。器面には炭化物が付着している。11には突起が取り付き、文様は瘤と平行沈線が組み合わさる。12は隆起文を貼り付けて工字文を、13は浮線により流線工字文が施されている。

図6-14、図7-1は独結石で、ともに細かい敲打によって仕上げられ、中央の一対のリング状に発達した節がある。断面形は梢円形で、刃部は形成されていない。14は部分的な欠損があるものの、全体の形状が分かる資料で、両頭はやや弧状に反っている。1は大形で両頭の一端が欠損しているが、重量は1kgを超えている。節には研磨が加えられている。頭部の反りはみられず、直線的に至っている。

図7-2は石刀の完品である。一側縁が刃部で、内反りとなっている。背刃の部分には6条のキザミが施されている。頭部には両端に抉りがあり、柄状の形状を成形している。敲打のち丁寧な研磨により仕上げられ、斜め方向の研磨痕が明瞭である。図7-3は小形の石棒で、頭部は両端が成形されている。片面の大部分は剥離している。断面の形状から、石剣の可能性もある。

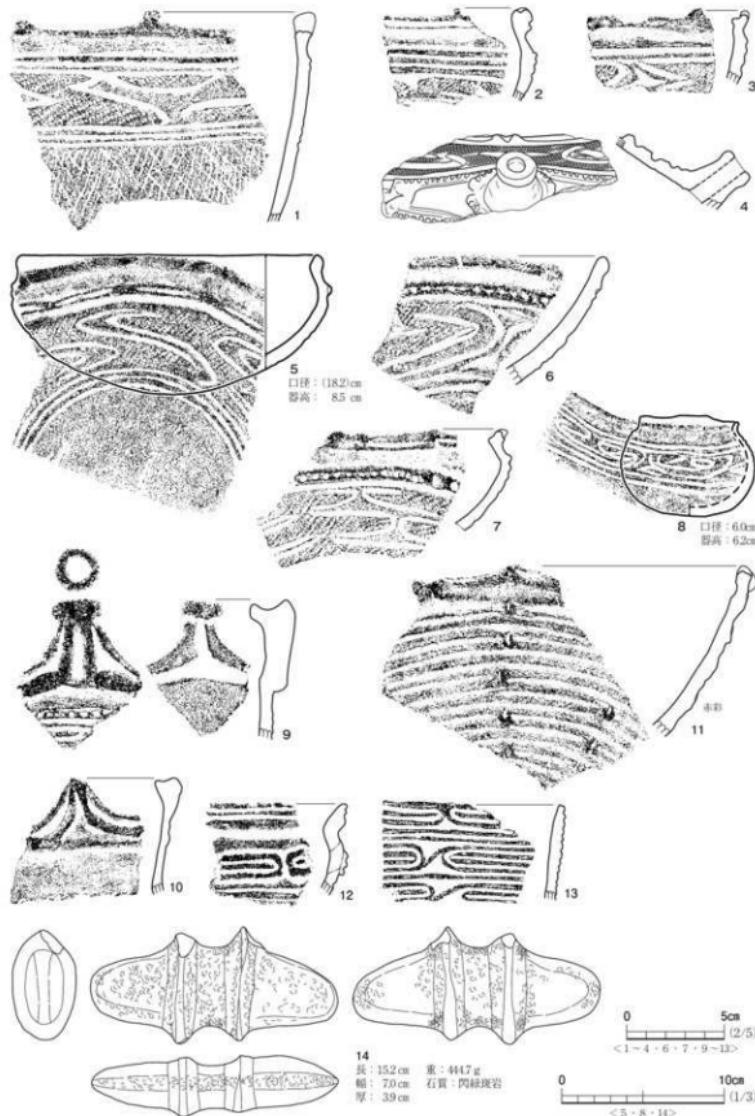
令和元年度の調査経過

只見川流域築堤工事事業に小和瀬遺跡の隣接地が対象となったため、平成29年に三島町教育委員会が試掘調査を実施し、3,000m²の要保存面積が確定した。

発掘調査に先立ち会津若松建設事務所・福島県教育庁文化財課・三島町教育委員会・(公財)福島県文化振興財団とで連絡調整会議を開催し、関係機関と協議を行った。そこで、発掘調査は調査区東部から進めて、調査が終了した箇所から引き渡すこととした。

発掘調査は3,000m²を対象面積とし、(公財)福島県文化振興財団の職員1名を配置し、4月15日から開始した。表土除去は会津若松建設事務所の調査協力を得た。

5月中旬には仮設トイレの設置を行った。この頃には表土除去が終了したため、作業員を雇用して遺構検出作業を開始した。遺構検出作業では、調査区東部から繩文時代晚期後葉～弥生時代中期中葉を主体とする遺物包含層を確認したが、この範囲が調査区を越えて広がっていることが判明した。この他に土坑・溝跡・焼土遺構なども確認した。調査区外に及ぶ遺物包含層については、福島



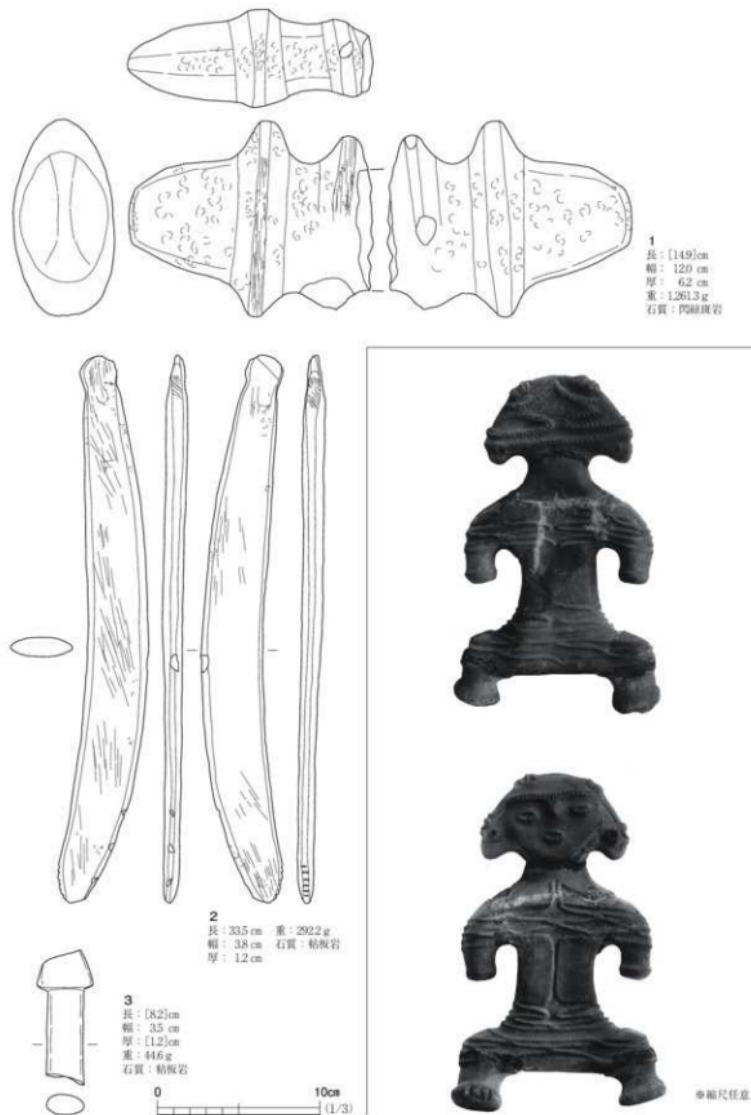


図7 三島町教育委員会収蔵 小和瀬遺跡表採遺物・「福島県発見石器時代土偶図版」所取の土偶



図8 工事範囲図

県教育庁文化財課の指示により、工事範囲まで面積を拡大して調査することとした。5月下旬には、遺物包含層の掘り込みを開始したが、遺物が数多く出土することが判明した。

6月になると遺物包含層の掘り込みと並行して、土坑・焼土遺構の精査・記録作業も行った。この頃になると作業員の出勤率が低下し、進捗状況も停滞気味となった。6月下旬には委託業者による測量基準点の打設を実施した。

7月には三島町と柳津町へ作業員募集をかけ、作業員の増員を図った。7月上旬にはダムの水位調整点検により、只見川の水位が上昇することになった。これにより、調査時の安全確保ができないため、調査は一時休止とした。この頃には、掘立柱建物跡・小穴などが検出され、精査・記録を行った。

8月2日には、調査区東端から西側20mの範囲を会津若松建設事務所に引き渡した。この頃には、竪穴住居跡・土坑・土器埋設遺構・小穴などを検出し、精査・記録を行った。なお、7月から作業員募集を行ったが、想定よりも応募者が集まらなかったため、再度柳津町に作業員募集をかけることにした。

9月6日には、8月2日に引渡した範囲から西側10mの範囲を会津若松建設事務所に引き渡した。9月中旬になると遺物包含層の掘り込みが終わり、焼土遺構・小穴などを検出し、精査・記録及び地形測量を行った。併せて、下層確認のためのレンチを設定し掘り込みを行った。

10月3日には、ラジコンヘリによる空中写真撮影を実施した。10月8日には、9月6日に引渡した範囲から西側10mの範囲を会津若松建設事務所に引渡した。10月12日には、令和元年台風第19号に伴う豪雨により、調査区が水没したため調査は一時休止したが、10月23日から再開した。10月31日までには、器材整備、器材撤収、仮設トイレの撤去などの現場撤収作業を行い、すべての調査を終了した。

11月5日には、8月2日・9月6日・10月8日に引渡した範囲の残りの調査区を会津若松建設事務所に引渡した。

第5節 調査方法

小和瀬遺跡の発掘調査では、遺構の位置や遺物出土箇所を明確にするため、1辺10mの方眼を調査区全域に設定した。この方眼をグリッドと呼称し、世界測地系による国土座標を基準とした。グリッドはX = 166,110、Y = -13,570を基点として、北から南へはアルファベットでA・B・C…、西から東へはアラビア数字で1・2・3…とした。これらを組み合わせてA 1・B 1・C 1…として各グリッドを表示した。

表土の除去はバックホー0.45m³で、土砂の運搬はクローラーダンプを用いた。遺構の精査にあたっては、遺構の特性に合わせて土層観察用の畔を設定し、堆積土の状況や遺物の出土状況に留意しながら実施した。

遺構の図化は遺構の規模に合わせて、断面図・平面図を縮尺1/10、1/20で作成し、報告書掲載時は縮尺1/20、1/40、1/60、1/100とした。調査区の遺構配置図は縮尺1/200で作成し、報告書掲載時は縮尺1/100とした。記録写真はデジタルカメラを使用した。

上記の記録・資料については整理作業を実施し、各種台帳を作成し閲覧可能な状態にした後、福島県文化財センター白河館で収蔵・管理する予定である。



調査区遠景
(南東から)



作業風景
(南西から)

第2章 遺構と遺物

第1節 基本層序と遺構の分布

今回の調査区からは竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡2棟、土坑8基、溝跡1条、焼土遺構12箇所、土器埋設遺構2基、性格不明遺構2基、小穴67基、遺物包含層1箇所を確認した。出土した遺物の大半は、縄文時代晚期後葉～末葉に比定できるものである。当該期の遺物は、縄文土器46,070点、石器2,521点、土偶2点、土偶以外の土製品5点、この他、弥生土器1,077点、須恵器1点、陶磁器3点、炭化物・ベンガラなどがある。

確認した主な時代は、縄文時代晚期後葉～弥生時代中期中葉である。今回の調査区は、小和瀬遺跡の北西部にあたる。ここでは、基本土層と遺構の分布について概略する。

【基本土層】

L I は、2層に細分した。L I a は現表土で、平成23(2011)年7月の新潟・福島豪雨に伴う只見川の氾濫により、堆積した砂層である。層厚は50～100cmで、只見川沿いの調査区南部で厚く、北部では確認できない。

L I b は洪水以前の表土で、灰黄褐色砂質土である。層厚は30～100cmで、調査区北東部で厚く、北西部で薄くなる。

L II についても2層に細分した。L II a は、調査区西部で確認した黒褐色土である。L II a 上面で1号溝跡を検出した。遺物を含むが、その量は少ない。層厚は5～30cmである。

L II b は、調査区東部で確認した褐灰色土である。遺物を含むが、その量はL II a よりも多い。層厚は20～35cmである。

L III は、調査区東部で確認した暗灰黄色砂質土である。L III のなかでも、遺物を多く含む層を遺物包含層とした(図9)。さらに、L III で3号土坑、1号焼土遺構、1・2号性格不明遺構を検出した。層厚は20～40cmである。なお、遺物包含層には縄文時代晚期後葉～弥生時代中期中葉の遺物が含まれていた。

L IV は、調査区全域に分布する黄褐色砂質土である。L IV 上面で大半の遺構を検出した。遺物はL III とL IV の層理面にのみ含まれ、層中に遺物は含まれていない。層厚は35cmほどである。

L V は、調査区のほぼ全域で確認した黒褐色砂質土である。層中に遺物は含まれていない。層厚は20cm程度である。

L VI は、調査区のほぼ全域で確認した黄褐色細砂である。層中に遺物は含まれていない。このL VI と疊層が低位段丘面の堆積物と推察している。

【遺構の分布】

図10に示す遺構の時期は、概ね縄文時代晚期後葉～弥生時代中期中葉にかけてのものと考えて

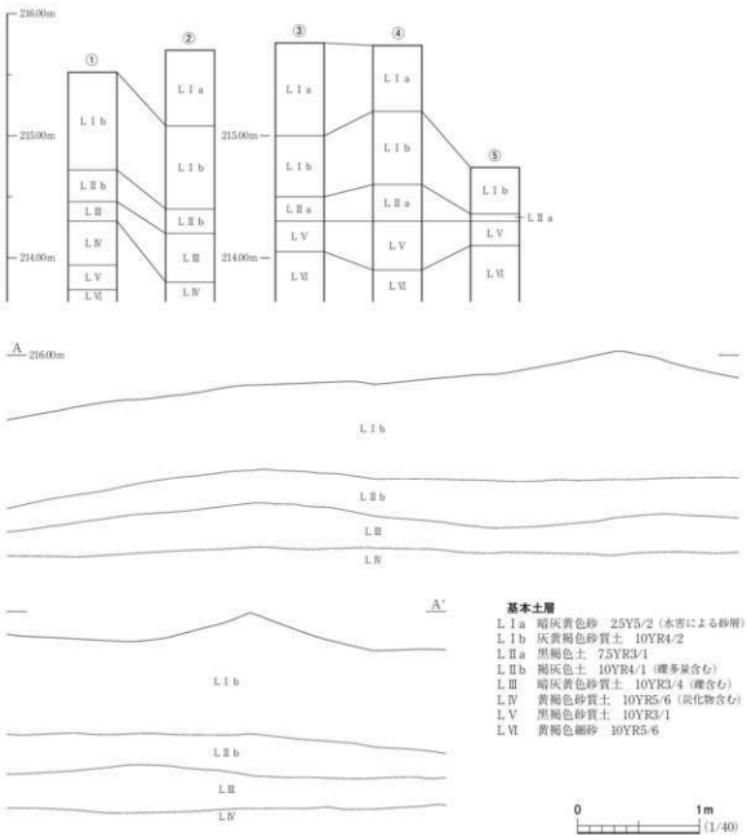


図9 基本土層

いる。遺構の多くは、調査区東部に分布する。そのなかで、堅穴住居跡は1軒、掘立柱建物跡は2棟であることから、集落跡としての構成が貧弱である。土坑については1・2号土坑と5・7号土坑が、それぞれ近接した位置にあるなどの共通点がみられる。焼土遺構は12基確認したが、その分布は概ねC8グリッドを含むその周辺である。

検出面は1号溝跡がL II a、3号土坑、1号焼土遺構、1・2号性格不明遺構などがL IIIで、それ以外はL IVである。

なお、L IIIに含まれている遺物と、L IV上面の検出遺構からの出土遺物との時期差は縄文時代晚期後葉～弥生時代中期中葉であるので、遺構の廃絶時期とL IIIの形成時期も同様の時期と考えている。

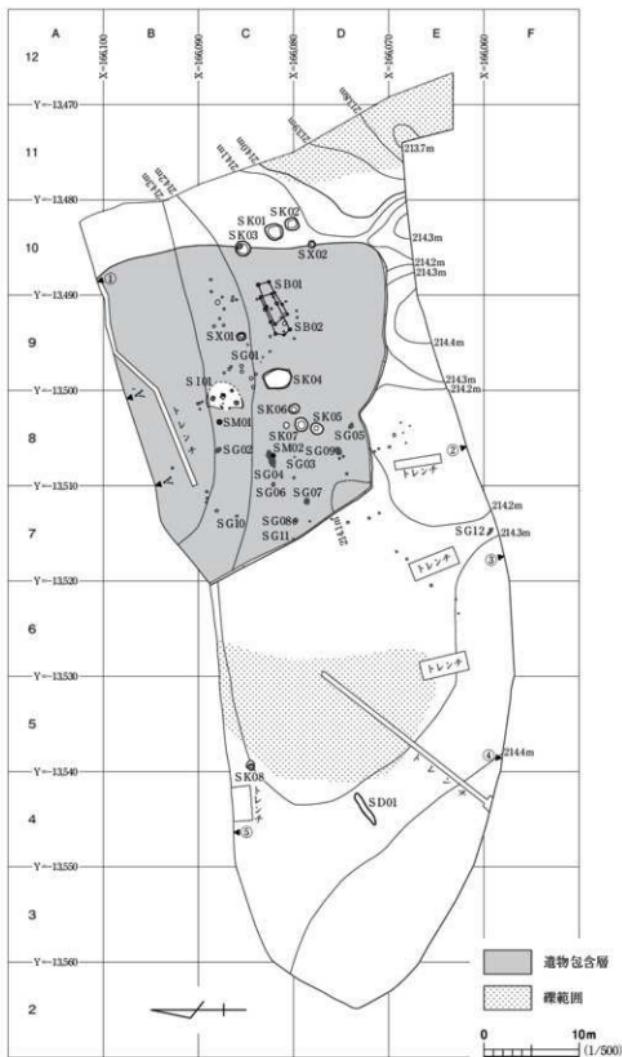


図10 遺構配置図

第2節 壇穴住居跡

1号住居跡 S I 01

遺構(図11、写真7)

本住居跡は調査区東部のC8グリッド、標高214.3mに位置する。検出層位はLIV上面である。本住居跡の西側には1号土器埋設遺構が、東側には小穴が分布している。本住居跡は、検出時には西半分が欠損し、床面の一部が露出している状態であった。遺存する規模は、南北が37mである。本住居跡の東西の規模を復元すると、1号土器埋設遺構が本住居跡と重複していた可能性がある。

堆積土は2層に区分した。各層とも炭化物を含む暗褐色土である。壁の立ち上がりは部分的にしか遺存していないが、高さは6cm程度である。

床面からは、炉・柱穴を確認した。炉の平面形は隅丸長方形で、その規模は長軸が90cm、短軸が60cmである。炉の側縁部には環が配置されているが、部分的に抜けている。炉の焼土化した厚さは8cm程度である。柱穴は3基確認した。その平面形は楕円形を基調とし、規模は長軸が30~48cm、深さは30~58cmである。

遺物(図12~15、写真17)

遺物は縄文土器・弥生土器・石器などが出土した。縄文土器では図12-1・3・5が鉢、図12-2・4・6~9・12・13が浅鉢、図12-10・11、図13、図14-1が深鉢である。

図12-2・4・6~9・12・13の器形は口縁部が内湾し、2・12・13は、口縁部が波状口縁をなしている。図12-1~6には浮線網状文が施され、図12-9・12・13には浮線により三角形文が施されている。なお、12・13では文様の幅が広い。

図12-10・11は波状口縁で、外反している。10・11ともに平行沈線文が施され、10の口唇部には、縄文が施されている。図13-1は口縁部が内湾する。文様は撚糸文を地文となし、沈線文の区画内に矢羽根状の沈線文が連続して描かれている。図13-2は口縁部が折り返され、外傾する。図13-3は口縁部が折り返され、内湾する。図13-2・3は、口縁部では横方向の条痕、体部では斜方向の条痕が施されている。図13-5、図14-1は口縁部が折り返され、頭部が無文で、体部上半に最大径を有するものである。それぞれに条痕が施されている。図13-5は口縁部が直立し、無文である。条痕の施文は頭部付近では横方向、それ以外では縦方向となっている。図14-1は口縁部が内傾している。条痕の施文は口縁部が横方向で、体部下端では縦方向、それ以外では斜め方向となっている。図13-6には条痕が斜め方向に施され、内面には焦げ面がみられる。図13-7は底部で外面に炭化物の付着がみられる。

弥生土器は、図14-2~4である。2の器形は判然としないが、沈線文と沈線文の区画内に連續刺突文が描かれている。3・4は浅鉢で同一個体の可能性がある。3・4は条痕を地文とし、沈線の区画内に2本線で三角文を描き、三角文の接点では貼瘤がみられる。

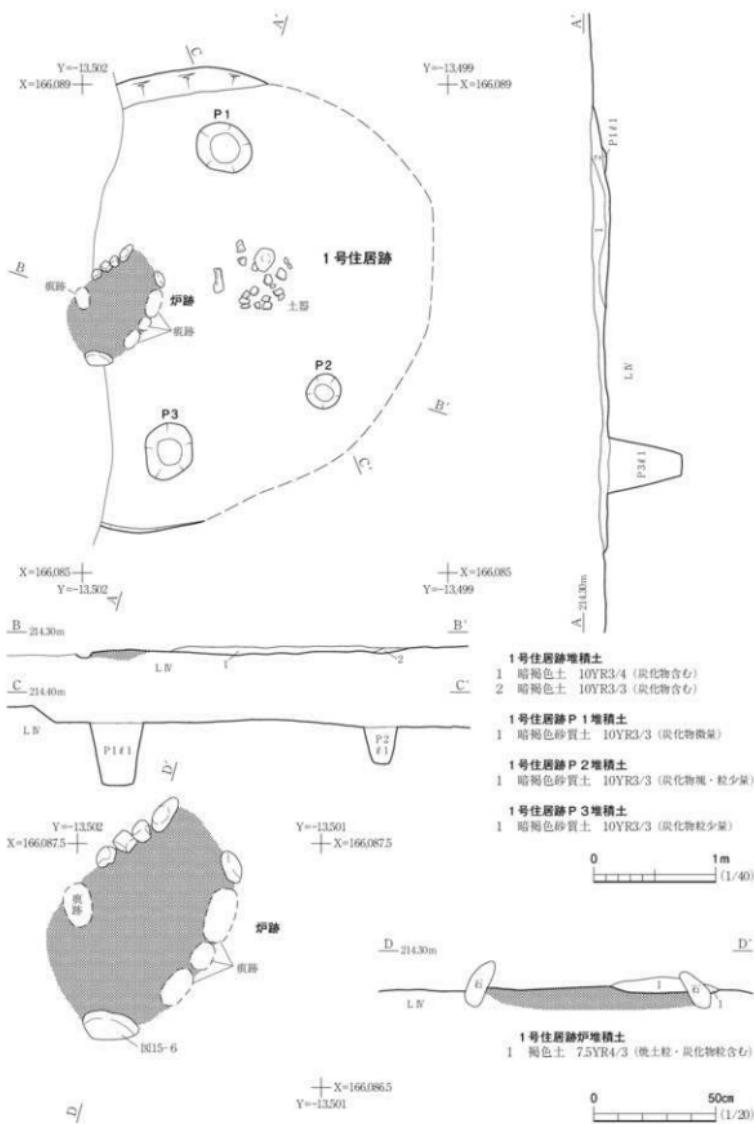


図11 1号住居跡

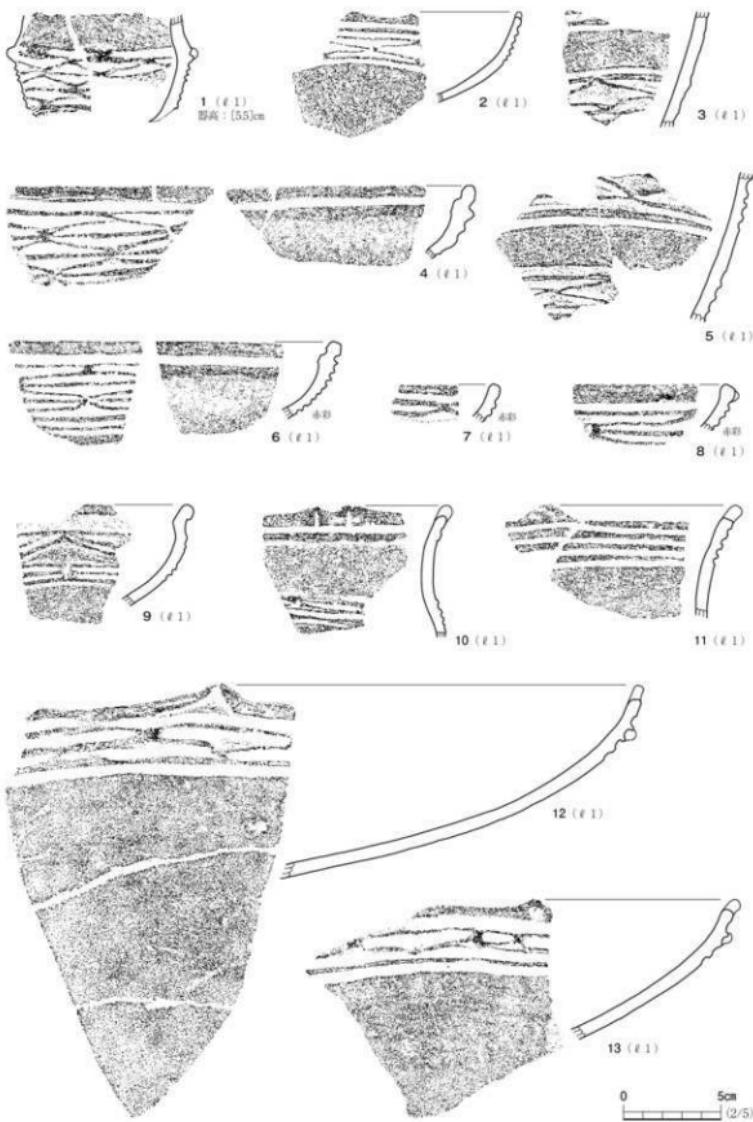


図12 1号住居跡出土土器（1）

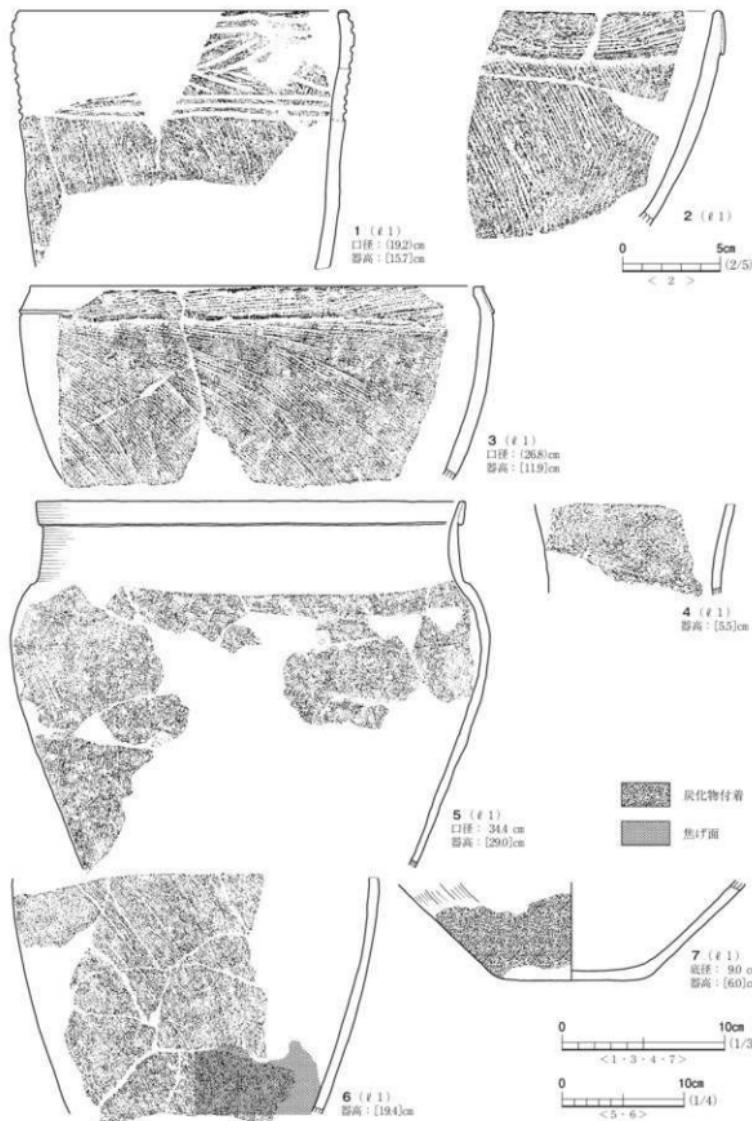


図13 1号住居跡出土土器（2）

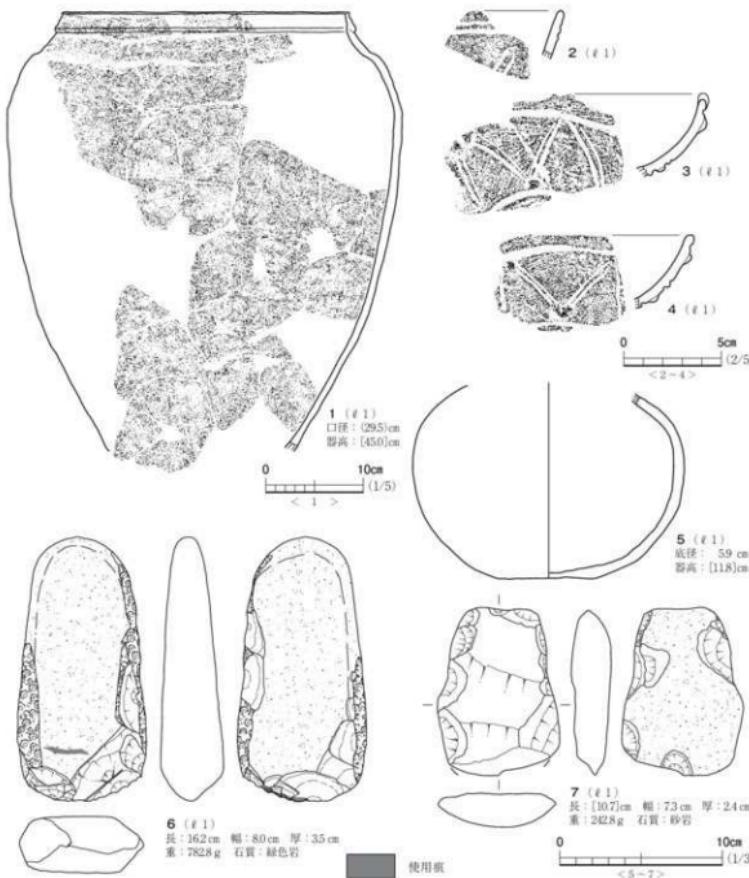


図14 1号住居跡出土土器・石器

図14-5は無文の壺の体部である。これらについては、縄文時代晩期末葉から弥生時代前期前葉としておきたい。

石器は、打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石・石鋸・加工蹠などが出土した。図14-6・7、図15-1は打製石斧で、7は刃部が欠損している。図15-2は磨製石斧である。図15-3が磨石、図15-4・5が敲石である。図15-6は炉の縁石であるが、側縁部を部分的に剥離や敲打を加えている。図15-7は石鋸と称される特異な石器であるが、鋸として使用された痕跡はない。

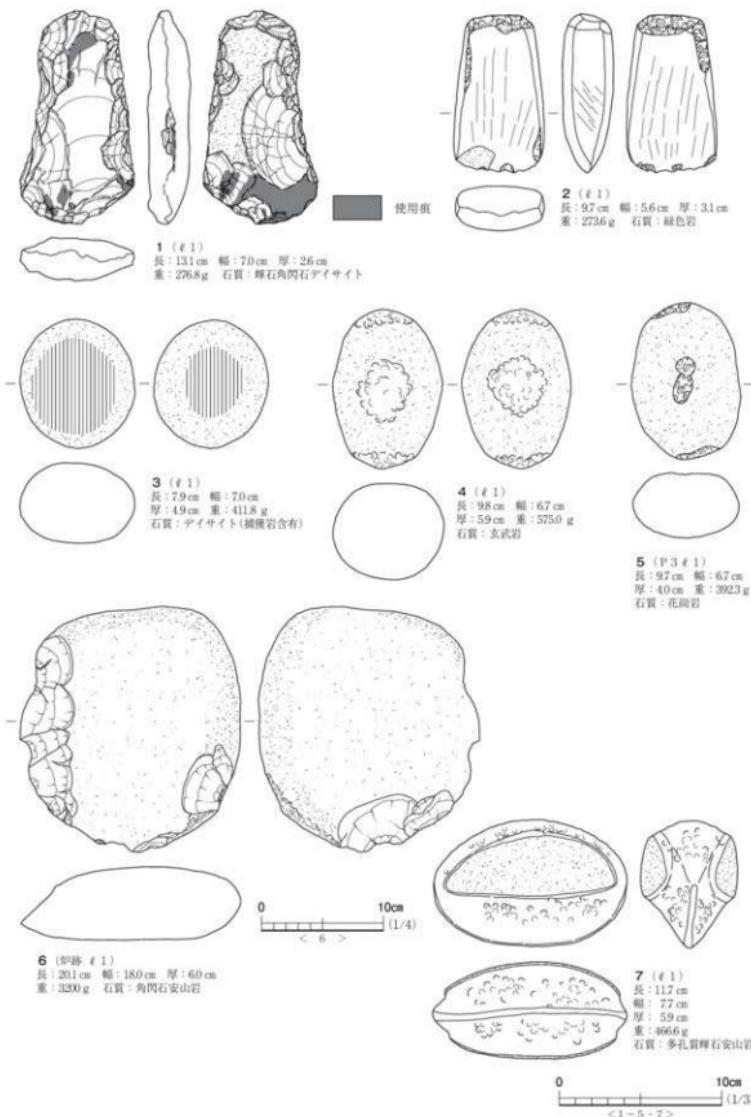


図15 1号住居跡出土石器・石製品

まとめ

本住居跡は調査区から検出した唯一のものであるが、遺存状態が悪いため全体の形状は明確ではない。1号土器埋設遺構と重複していた可能性はあるが、他の遺構との重複はみられない。

時期については、図12の鉢・浅鉢などから縄文時代晩期末葉と考えている。

第3節 掘立柱建物跡と小穴

1号建物跡 S B 01 (図16、写真8・9)

本建物跡は調査区東部のC 9グリッド、平坦面の標高214.1mに位置する。検出層位はL IV上面である。本建物跡は2号建物跡と重複しているが、柱穴同士での重複がないため、その新旧関係は不明である。本建物跡の長軸方向は北東から南西方向で、真北から東に63°傾いている。本建物跡の北側から西側にかけて小穴が分布している。本建物跡の構成は、長辺方向で東西2~3間、短辺方向で南北1間となり、平面形は不整長方形を呈している。本建物跡の規模は、長辺方向で3.9~4.5m、短辺方向で1.2~1.7mである。各柱穴間は南辺のP 1・2が1.1m、P 2・3が1.5m、P 3・4は1.3mである。これに対する北辺のP 5・6が2.5m、P 6・7は2.1mである。

柱穴の堆積土には炭化物が含まれ、その多くは単層である。いずれも基本土層L II b・IIIに類似する。柱穴の平面形は円形を基調とし、断面形はU字状を呈している。P 6には根固石とみられる円礫が敷かれていた。

本建物跡の時期は、柱穴から出土した遺物から縄文時代晩期末葉を考えている。

2号建物跡 S B 02 (図16、写真10・11)

本建物跡は調査区東部のC 9グリッドL IV上面で検出した。平坦面の標高214.1mに位置する。検出層位はL IV上面である。重複する遺構は1号建物跡であるが、新旧関係は柱穴同士の重複がないため、不明である。

本建物跡の長軸方向は北東から南西方向で、真北から東に65°傾いている。本建物跡の北側から西側にかけて小穴が分布している。本建物跡の構成は、長辺方向で東西2~3間、短辺方向で南北1~2間となり、平面形は西側の柱穴が張り出した長方形を呈している。本建物跡の規模は、長辺方向で4.2m、短辺方向で1.3~1.8mである。各柱穴間は南辺のP 1・2が3.1m、P 2・3は1.2mである。これに対する北辺の各柱穴間は1.4mとなっている。

柱穴の堆積土は基本土層L II b・IIIに類似し、大半のものは単層で炭化物が含まれていた。柱穴の平面形は円形と隅丸方形がみられ、断面形はU字状を呈している。P 1には根固石とみられる円礫が敷かれていた。

本建物跡の時期は、柱穴から出土した遺物から縄文時代晩期末葉を考えている。

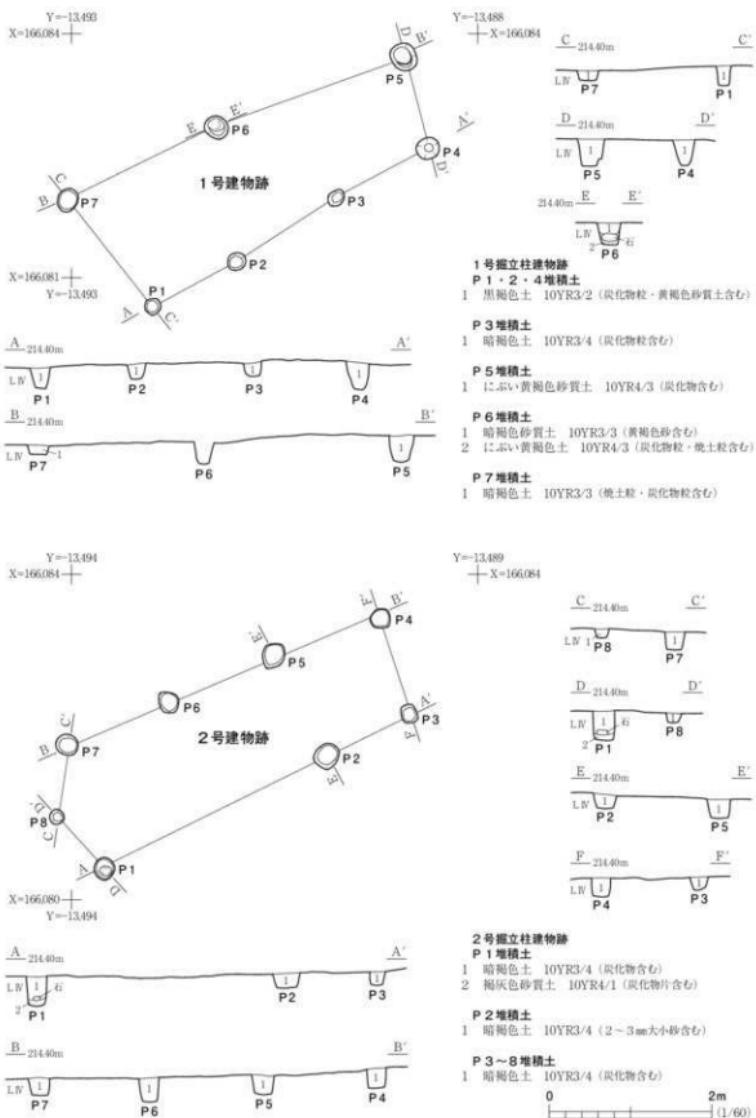


図16 1・2号建物跡

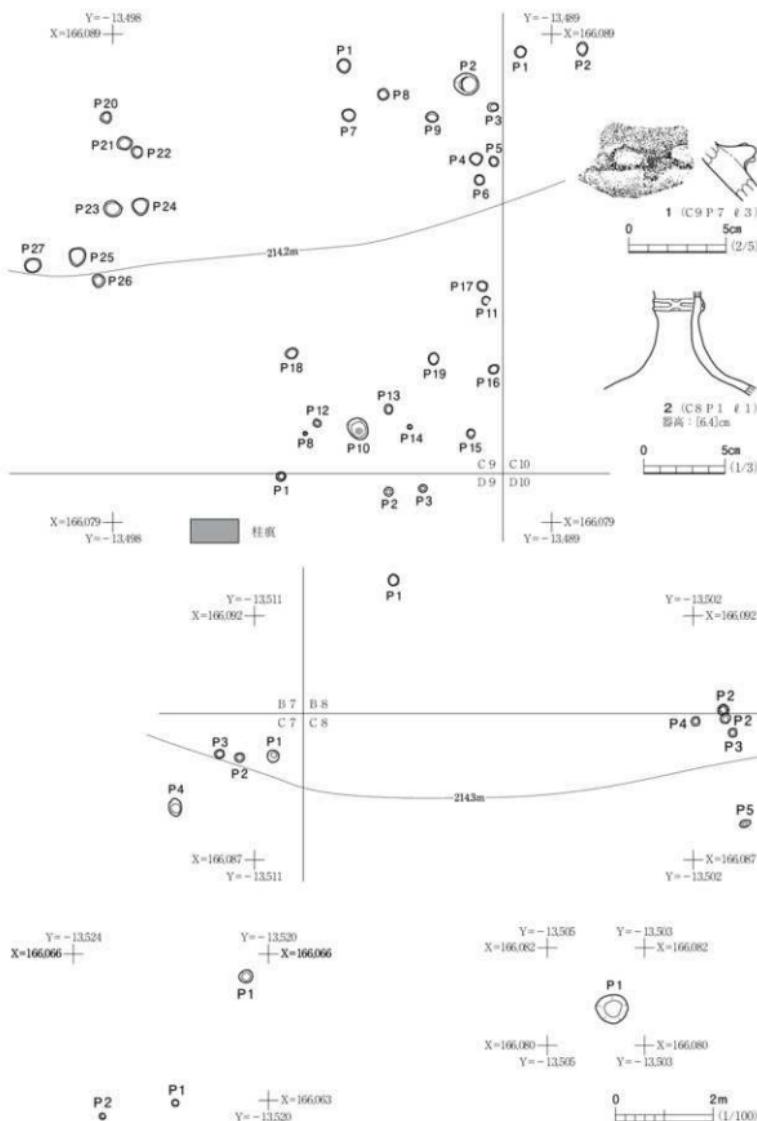


図17 小穴・出土土器

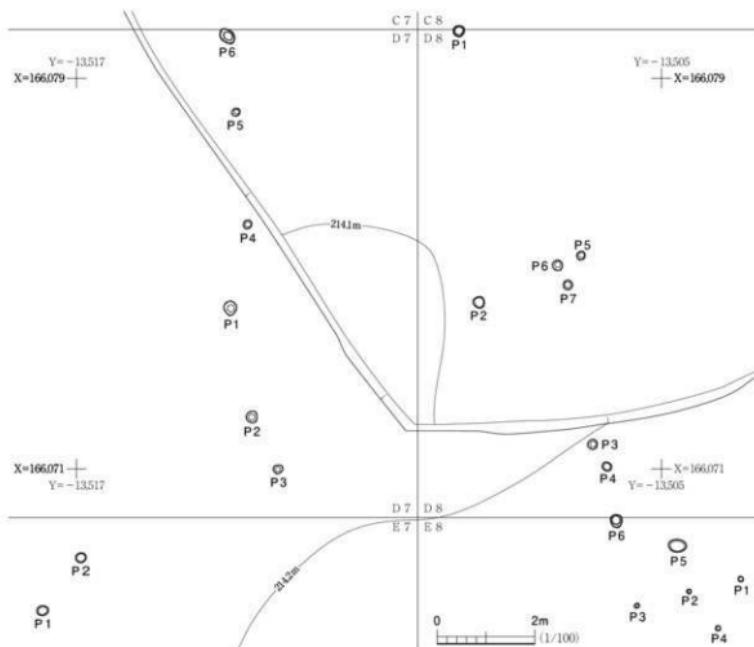


図18 小穴

小 穴 P (図17・18、表2、写真15)

小穴は67基を検出した。その分布は、調査区北東部から南央部にかけて散在しているが、C 9 グリッドにおいて多くみられる。検出層位はL III上面及びL IV上面である。

小穴はグリッド毎に番号を付け、表2に平面形、長軸、短軸、深さ、堆積土及び堆積土に含まれる含有物の所見をまとめた。

平面形は楕円形・円形・隅丸長方形・隅丸方形などがあるが、楕円形が最も多い。規模は長軸が11~67cm、短軸が8~60cm、深さは11~53cmである。堆積土は暗褐色土・黒褐色土・灰白色土・にぶい黄褐色土・褐色土などがあるが、暗褐色土が多い。小穴のなかで、柱痕がみられるのはC 9 グリッド P 10のみである。その柱痕の径は15cmである。遺物は31基の小穴から出土したが、細片のため図示できたのは、C 9 グリッド P 7とC 8 グリッド P 1から出土したものである。

図17-1の器形については不明であるが、縁帯に連続した指頭圧痕がみられる。図17-2は縁で口唇部と脣部が欠損している。口縁部には浮線楕円形文が施されている。

小穴が分布する区域には、住居跡・建物跡・土坑・焼土構造などが位置していることから、関連

表2 小穴一覧表

グリッド	No	平面形	長軸	短軸	深さ	堆積土	含有物
B8	1	円形	23	-	25	a	-
	2	椭円形	23	20	25	a	-
C7	1	円形	25	-	38	a	○
	2	椭円形	20	18	27	a	○
	3	椭円形	19	16	15	a	○
	4	椭円形	46	26	22	a	○
C8	1	椭円形	67	60	40	a · b	○
	2	椭円形	22	19	25	c	-
	3	円形	17	-	15	a	-
	4	円形	17	-	5	a	○
	5	椭円形	24	14	11	b	○
C9	1	円形	26	-	37	a	○
	2	椭円形	52	42	53	d	○
	3	椭円形	32	16	35	a	-
	4	椭円形	44	42	30	a	-
	5	円形	45	-	14	a	-
	6	円形	39	-	12	a	-
	7	椭円形	28	25	25	a	-
	8	円形	21	-	23	a	-
	9	椭円形	25	20	18	d	-
	10	椭丸長方形	45	38	30	d	-
	11	円形	18	-	28	a	-
	12	椭円形	17	14	43	a	○
	13	椭円形	20	16	12	a	-
	14	円形	10	-	12	d	-
	15	椭円形	20	17	17	a	-
	16	椭円形	22	18	14	a	-
	17	椭円形	22	20	28	a	-
	18	椭円形	26	21	10	a	-
	19	椭円形	25	20	20	a	-
	20	椭円形	24	22	12	a	-
	21	椭円形	31	26	29	a	○
	22	椭円形	24	22	18	a	-
	23	椭円形	38	34	26	a	○
	24	円形	34	-	28	a	○

グリッド	No	平面形	長軸	短軸	深さ	堆積土	含有物
C9	25	椭円形	37	34	29	e	○
	26	椭円形	26	24	24	a	-
C10	27	椭円形	33	27	24	a	-
	1	円形	22	-	32	a	○
D7	2	椭円形	27	21	12	a	-
	1	椭円形	27	25	24	d	○
D8	2	椭円形	24	22	41	a	○
	3	椭円形	20	16	16	a	○
	4	椭円形	19	17	12	a	-
	5	椭円形	18	16	28	b	○
	6	椭円形	26	22	22	a	○
	7	椭円形	23	-	25	a	-
	8	円形	24	-	20	a	-
D9	2	円形	20	-	36	b	-
	3	円形	19	-	37	b	-
	4	円形	20	-	32	a	○
E6	1	椭丸方形	24	-	35	a	-
	2	椭円形	20	-	29	d	○
	3	椭円形	18	16	17	a	-
E7	1	椭円形	19	17	19	e	○
	2	円形	18	-	11	a	-
	3	椭円形	18	16	17	a	-
E8	1	椭円形	23	-	28	a	-
	2	椭円形	13	12	35	a	-
	3	円形	14	-	28	a	-
	4	椭円形	24	20	45	a	-
	5	椭円形	21	19	25	a	-
	6	椭円形	28	24	30	a	○

【凡例】 長軸・短軸・深さの単位はcm。
堆積土・含有物で使用した略号は以下の通りである。
a 砂褐色
b 黒褐色
c 灰褐色
d に青褐色

するものと考えている。時期は出土遺物から縄文時代晩期末葉と考えている。

第4節 土坑

1号土坑 SK 01 (図19、写真12)

1号土坑は調査区東部のC 10グリッド、L IV上面で検出した。本土坑には南接して2号土坑が位置する。本土坑の平面形は不整椭円形を呈し、壁はやや外傾しながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。その規模は長軸が1.9m、短軸が1.7m、深さは0.4mである。堆積土は3層に区分し、L IV・VIに類似する。

遺物はℓ 1から縄文土器が出土したが、細片のため図示しなかった。本土坑の時期は、出土遺物から縄文時代晩期末葉と考えている。

2号土坑 SK 02 (図19、写真12)

2号土坑は調査区東部のC 10グリッド、L IV上面で検出した。本土坑に北接して1号土坑が位置する。本土坑の平面形は不整方形を呈し、壁は外傾しながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。その規模は1辺が1.3m、深さは0.2mである。堆積土は2層に区分したが、ℓ 1はL IVに類似する。本土坑の時期は、出土遺物がないため判断は困難であるが、近接する1号土坑と形状が類似することから、同時期と考え縄文時代晩期末葉としたい。

3号土坑 SK 03 (図19・20、写真12・18)

3号土坑は調査区東部のC 10グリッド、L IIIで検出した。本土坑の南側に1・2号土坑が位置する。本土坑の平面形は円形を呈し、壁は外傾気味に立ち上がる。底面は凹凸が著しく、不整方形の小穴がみられる。本土坑の規模は径が1.6m、深さは0.3mである。堆積土は2層に区分し、ℓ 1がL IVに、ℓ 2がL VIに類似する。

本土坑のℓ 1からは、弥生土器が出土した。そのなかで図20-1～3を図示したが、すべて弥生土器の深鉢である。1・2は口縁部で内外面ともにナデによって調整されている。2の口唇部は横方向に張り出されている。3は撫糸文が施された体部下端の破片である。

本土坑の時期は、出土遺物から弥生時代前期～中期前葉と考えている。

4号土坑 SK 04 (図19～21・23、写真12・18)

4号土坑は調査区東部のC 9グリッド、L IV上面で検出した。本土坑の東側には1・2号掘立柱建物跡が、西側には6号土坑が位置する。本土坑の平面形は不整長方形で、壁はやや直立気味に立ち上がり、底面は平坦である。その規模は長軸が3m、短軸が2.1m、深さは0.3mである。

堆積土は4層に区分し、各層とも炭化物が含まれている。ℓ 1～3の堆積状況からみて、これらの層は人為堆積の可能性が高い。ℓ 1はL IIIに、ℓ 2・3はL IVに、ℓ 4はL VIに類似する。

本土坑からは縄文土器・石器が出土した。他の土坑と比べて、遺物の出土量が多い。図20-4～7、図21-1は浅鉢で、図21-2～7・9は深鉢である。そのうち、図20-5～7、図21-1・4・7には赤彩されている。

図20-4～6・図21-1・2の浅鉢には、浮線文が描かれている。そのうち、図21-1は網状となるが、その他は三角形や菱形などを組み合わせた文様を施している。図20-7は沈線により変形工字文が施されている。図21-3・4・6には沈線文が描かれている。図21-7には口唇部に連続刺突文、胴部に沈線文が施されている。さらに、補修孔もみられる。図21-9には沈線による入組工字文に加え、矢羽根状沈線文・連続刺突文が描かれている。

図23-1は石鎌で有茎鎌である。図23-4・5は側縁部に調整刺離を加えている刺片である。本土坑の時期は、出土遺物から縄文時代晩期末葉と考えている。

5号土坑 SK 05 (図20・21、写真12・18)

5号土坑は調査区東部のD 8グリッド、L IV上面で検出した。本土坑と北接して7号土坑が位置する。本土坑の平面形は梢円形で、壁は外傾しながら立ち上がる。底面は平坦であるが、上端と比べて小さい。その規模は長軸が1.3m、短軸が1.1m、深さは0.3mである。堆積土は2層に区分し、各層とも炭化物が含まれている。

本土坑からは縄文土器が出土した。図21-11・12は深鉢の口縁部である。11の口唇部には縄文

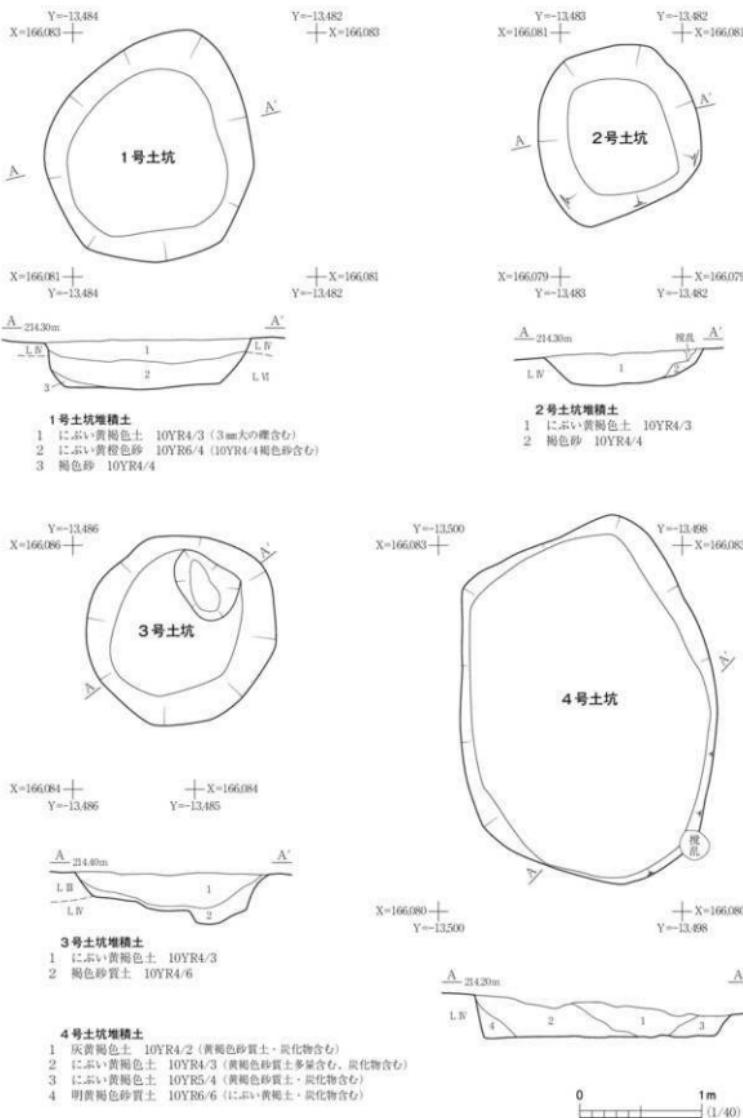


図19 1～4号土坑

が施され、沈線が内外面に巡っている。12は口唇部に沈線が巡り、連続刺突文・平行沈線文・入組沈線文が施されている。この土器のみが縄文時代晩期中葉のものである。

本土坑の時期は、出土遺物から判断して縄文時代晩期末葉と考えている。

6号土坑 SK 06 (図20~23、写真12・18)

6号土坑は調査区東部のC 8・D 8グリッド、L IV上面で検出した。本土坑の周辺には4・7号土坑が位置する。本土坑の平面形は橢円形で、壁は外傾気味に立ち上がり、底面は平坦である。その規模は長軸が1.1m、短軸が0.9m、深さは0.5mである。

堆積土は3層に区分し、各層とも炭化物が含まれている。そのなかでもℓ 3は、蝶や炭化物がブロック状に含まれていることから、人為堆積と考えている。

本土坑からは縄文土器・石器が出土した。図21-13は浅鉢、図21-14~17、図22-1・2は深鉢で、図21-14~16が口縁部、図21-17が底部、図22-1・2が口縁部から胴部の資料である。図21-13は波状口縁で、その突起部には刺突が施されている。13の文様は、浮線により三角形が上下に連結し展開している。図21-14・15は波状口縁で、平行沈線文が施されている。15の口唇部には縄文が施されている。図21-17の底部外面にはとびござ目編みの圧痕が部分的にみられる。図22-1の口縁部は折り返され、内湾気味に立ち上がっている。外面には条痕が施され、その方向は口縁部では横方向、胴部では綫方向である。図22-2の口縁部は外傾しながら立ち上がり、RL縄文を地文として平行沈線文を巡らせている。頭部は地文を磨り消し、無文としている。図23-2は石鎚で有茎鎚である。本土坑の時期は、出土遺物から縄文時代晩期末葉と考えている。

7号土坑 SK 07 (図20~23、写真12・18)

7号土坑は調査区東部のD 8グリッド、L IV上面で検出した。本土坑に南接して5号土坑が位置する。本土坑の平面形は隅丸方形で、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。その規模は長軸が1.4m、短軸が1.3m、深さは0.4mである。堆積土は3層に区分し、各層とも炭化物が含まれている。そのなかでも、ℓ 3にはベンガラが含まれていた。

本土坑からは縄文土器・石器が出土し、そのうち5点を図示した。図21-18は浅鉢、図21-19・20、図22-3は深鉢である。図21-18には浮線工字文が、図21-19・20には沈線文が施されている。図21-20には、沈線文に貼瘤による刻みが加えられている。図22-3の口縁部は折り返され、内湾気味立ち上がっている。外面の器面は摩減が著しいが、微妙に条痕がみられる。内面には赤彩がみられる。図22-9は底部で外面にはござ目編みの圧痕がみられるが、外面の周縁部は圧痕が磨り消されている。

図23-3は石鎚であるが、先端と茎が欠損している。石鎚の下端には、天然アスファルトとみられる付着物がみられる。図23-6は凹石で、両面とも凹みがみられる。

本土坑の時期は、出土遺物から縄文時代晩期末葉と考えている。

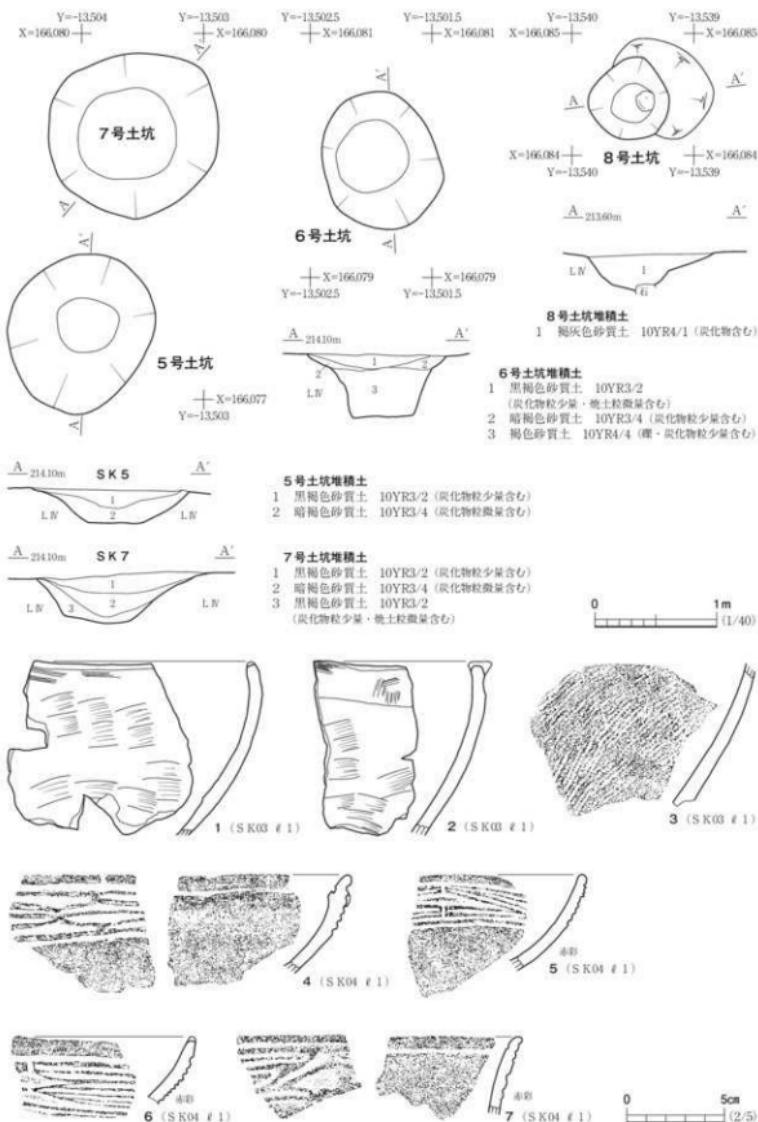


図20 5～8号土坑・土坑出土土器

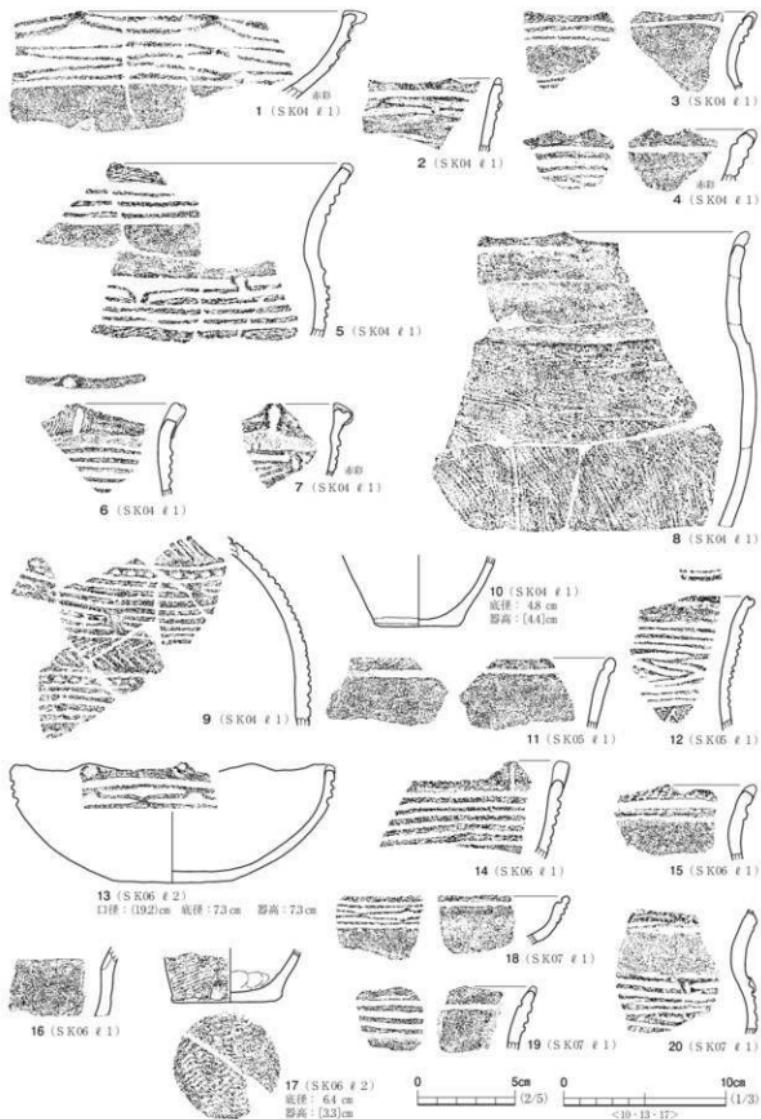


図21 土坑出土土器（1）

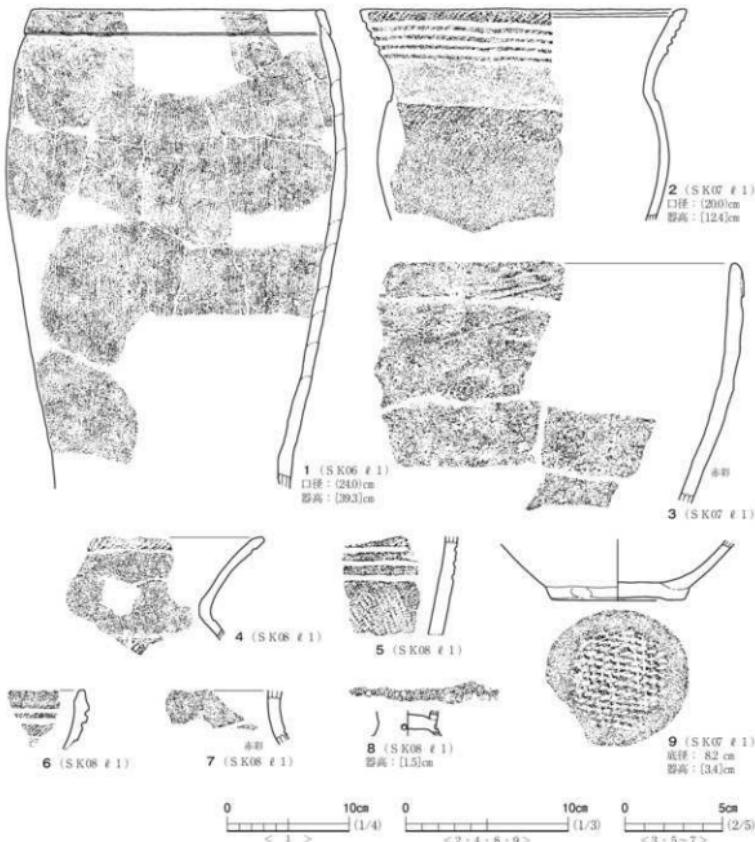


図22 土坑出土土器（2）

8号土坑 SK08 (図20・22・23、写真12)

8号土坑は調査区北西部C5グリッド、LIVで検出した。本土坑の周辺には遺構はなく、礫の範囲が途切れる場所に位置する。本土坑は二段構築で、その平面形は上段では隅丸長方形となり、下段は不整形である。本土坑の上段の壁は緩やかに、下段は外傾気味に立ち上がっている。底面は礫が露出し凹凸が著しい。その規模は長軸が1m、短軸が0.7m、深さは0.3mである。堆積土は1層で、炭化物を含む褐灰砂質土により埋没している。

本土坑からは弥生土器・剥片が出土した。図22-4～8は弥生土器で、4・5は深鉢、6は



図23 土坑出土石器

鉢、8は高杯である。7の器形は不明である。4の口縁部は「く」の字状に立ち上がり、口唇部と脣部にR L縄文が施されている。5は平行沈線文とL R縄文が施されている。6は磨消縄文が施され、太い沈線によって区画されている。7は赤彩され、一条の沈線がみられる。8には計5箇所の穿孔が1~2段にわたって施されている。図23-7は側縁部に調整剥離を加えている剥片である。

本土坑の時期は、出土土器の多くが弥生時代中期前葉となっているので同時期としたい。

第5節 その他の遺構

ここでは、土器埋設遺構、焼土遺構、溝跡、性格不明遺構をその他の遺構として報告する。

1号土器埋設遺構 SM01 (図24、写真14・18)

1号土器埋設遺構は、調査区東部のC8グリッド、LIV上面で検出した。本遺構の周辺には、1号住居跡があるが、本遺構と重複していた可能性がある。

埋設土器内の堆積土は2層に区分したが、骨片などは含まれていなかった。土器はほぼ正位置で埋設されていたが、胴部下端から底部が欠損している。

掘形の平面形は梢円形である。その規模は長軸が約50cm、短軸が約45cmで、検出面からの深さは30cmである。なお、掘形内堆積土の含有物について、蛍光X線分析測定を行ったところ、ベンガラとの結果であった。なお、ベンガラについては、現状では堆積土に混入した可能性が高い。

図24-1は埋設土器で深鉢である。口縁部から頭部は直立し、胴部上半では内湾気味に立ち上がりっている。口縁部には、折り返した際に付いた指頭圧痕がみられる。口縁部と胴部には条痕が施されているが、頭部は条痕を磨り消して無文となっている。内面の下半には炭化物が付着しているので、日常的に使用していたものを埋設土器に転用したと考えている。

時期については、埋設土器の特徴から縄文時代晩期末葉と考えている。

2号土器埋設遺構 SM02 (図24、写真14・18)

2号土器埋設遺構は、調査区東部のC8グリッド、LIV上面で検出した。重複する遺構は4号焼土遺構で、新旧関係は本遺構が新しい。

埋設土器内の堆積土は1層であるが、骨片などは含まれていなかった。土器はほぼ正位置で埋設されていたが、胴部上半部のみが遺存していた。

掘形の平面形は梢円形である。その規模は長軸42cm、短軸35cm、検出面からの深さは12cmである。本遺構の掘形は、1号土器埋設遺構のものと比べ省力化がみられる。

図24-2は埋設土器で深鉢である。胴部上半が強く内湾する器形が特徴的である。外面には条痕が施されている。時期については埋設土器の特徴から縄文時代晩期末葉と考えている。

焼土遺構 SG (図25～27、写真13)

焼土遺構は12箇所を検出した。本遺構の分布は、調査区中央部東寄りのC7グリッド及びC・D8グリッドに、大半のものが位置する。だが、12号焼土遺構のみが調査区南央部のF7グリッドに位置している。

検出面は、1号焼土遺構のみがLIIIで、それ以外の焼土遺構はすべてLIV上面である。他の遺構

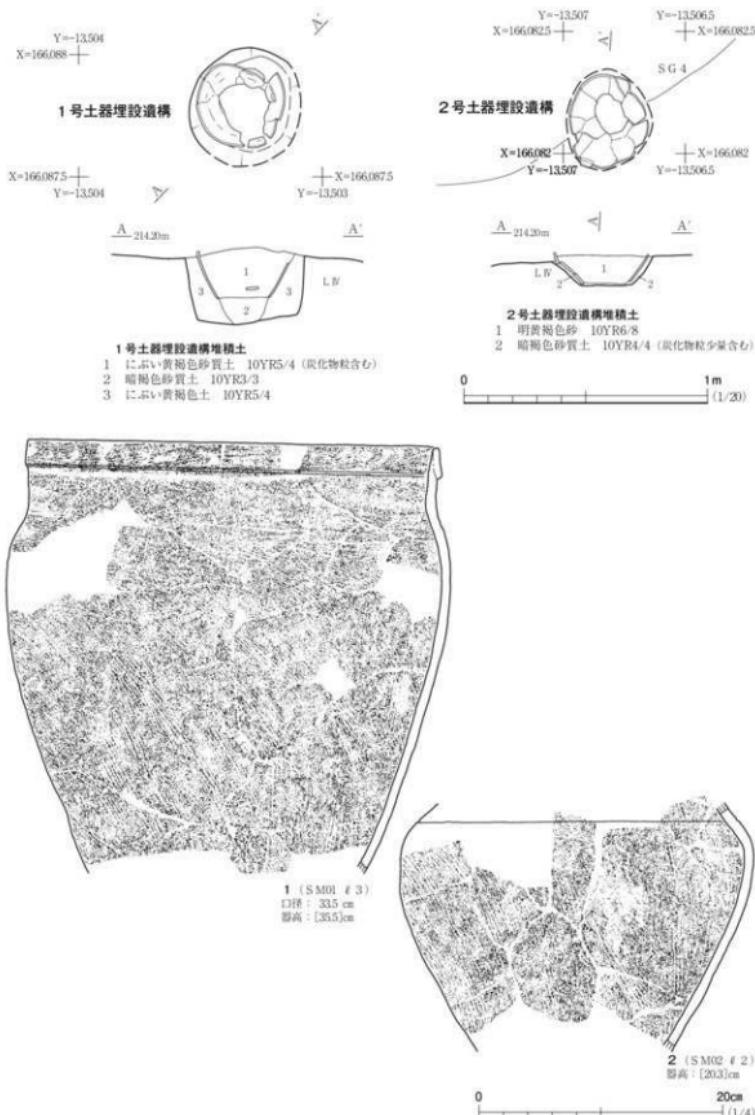


図24 1・2号土器埋設遺構・出土土器

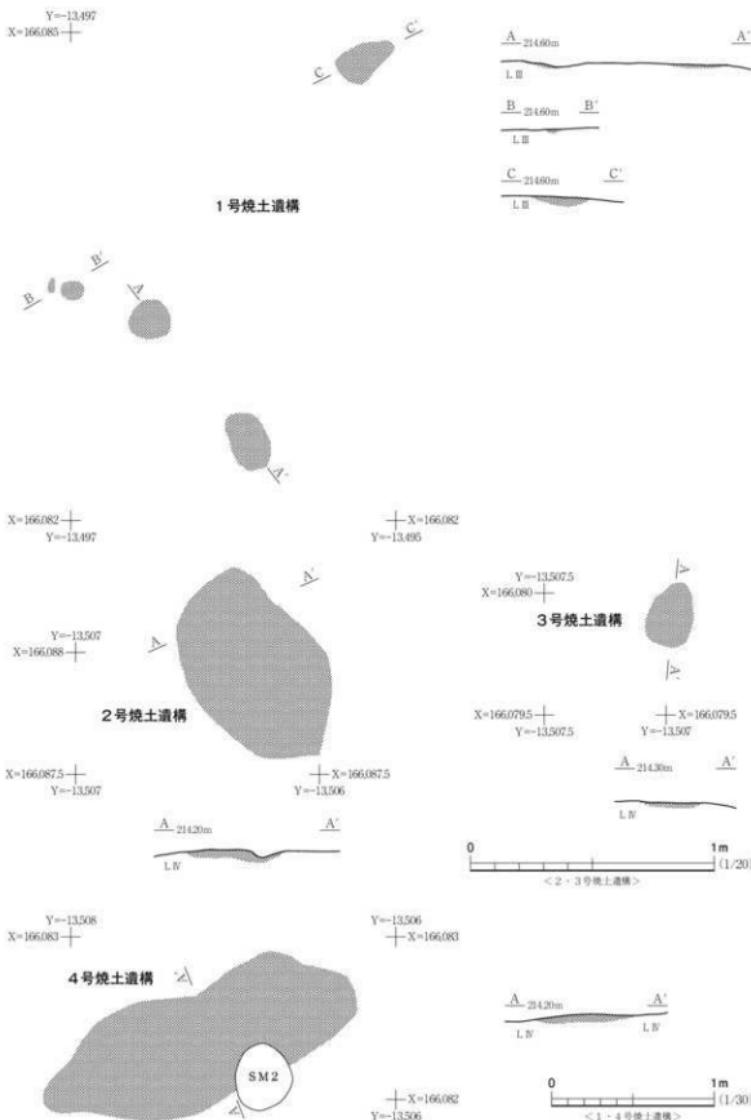


図25 1～4号焼土遺構

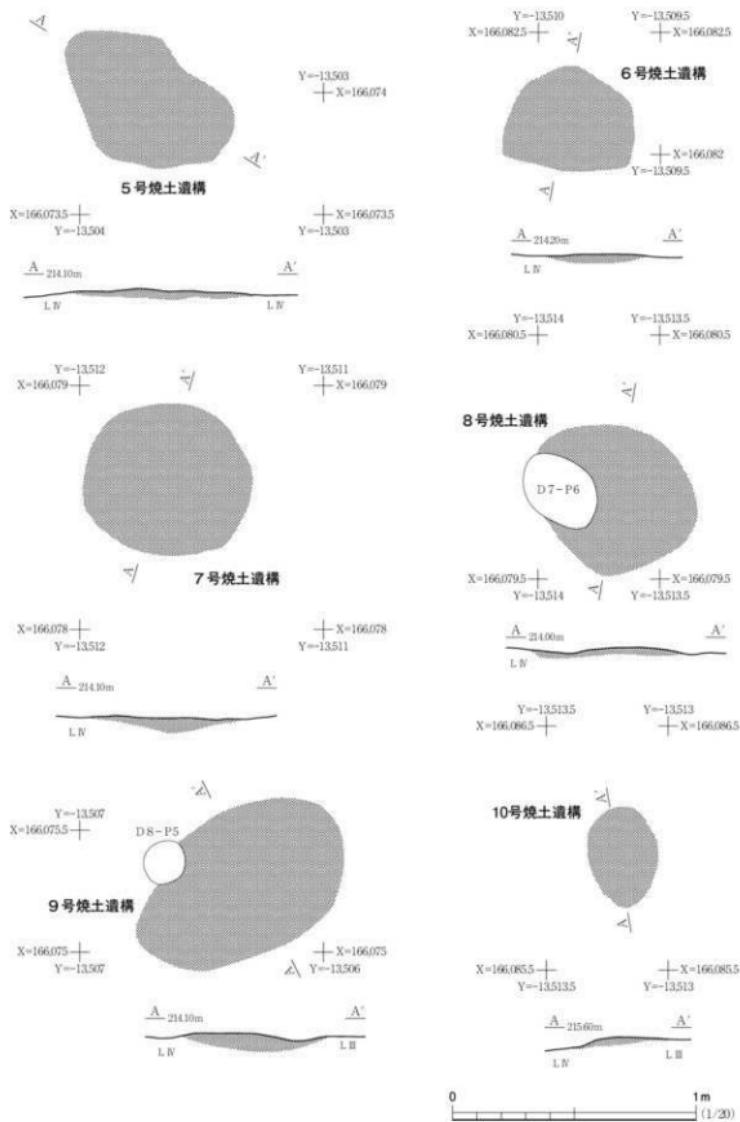


図26 5~10号焼土遺構

との重複は4号焼土遺構と2号土器埋設遺構、8・9号焼土遺構と小穴などでみられ、新旧関係はいずれも焼土遺構が古い。

1号焼土遺構は5箇所の焼土面を総称したものである。各焼土面の範囲は、不整方形状もしくは不整長方形状である。その最大長は4~38cmで、焼土面の厚さは2~6cmである。

2~12号焼土遺構の範囲をみてみると、円形状(7号焼土遺構)、楕円形状(3・9・10号焼土遺構)、不整方形状(6・8・11号焼土遺構)、不整長方形状(2・4・5・12号焼土遺構)となってい。る。2~12号焼土遺構の規模は、最大長で25~200cm、厚さは2~7cmであるが、規模の違いで2つに分けられる。それは、最大長が25~40cmの3・10・11号焼土遺構と最大長が54~200cmの2・4・9・12号焼土遺構である。

本遺構の時期は、2~12号焼土遺構では検出層位と他の遺構との重複関係から、縄文時代晚期後葉と考えている。1号焼土遺構では、検出面から弥生時代中期中葉と考えている。

1号溝跡 S D 01 (図27、写真14)

1号溝跡は、調査区西部D 4グリッドのL II aで検出した。周辺には遺構はなく、単独で位置している。規模は長さが380cm、幅は64cm、深さは4cmである。堆積土は1層のみである。

図27-1は弥生土器であるが、器形は不明である。文様は、沈線によって区画された磨消縄文が施されている。本溝跡の時期は、検出面と出土遺物から弥生時代中期前葉と考えている。

1号性格不明遺構 S X 01 (図27、写真14)

1号性格不明遺構は、調査区東部のC 9グリッドL IIIで検出した。周辺には1号焼土遺構がある。平面形は隅丸方形で、壁は下半部では直立気味に、上半部では外傾気味に立ち上がる。底面はやや凹凸がみられる。その規模は長軸が90cm、短軸が75cm、深さは36cmである。

堆積土は3層に区分した。そのなかでも ℓ 1の黄褐色粘土が堆積土の大半を占め、 ℓ 2・3においても黄褐色粘土が含まれていた。さらに、 ℓ 1には焼け縮まった焼土塊が多量に含まれていた。

本遺構については、堆積土に粘土と焼土が含まれている特徴があることから、性格不明遺構としたものである。時期は、検出面から弥生時代中期中葉と考えている。

2号性格不明遺構 S X 02 (図27、写真14)

2号性格不明遺構は、調査区東部D 10グリッドL IIIで検出した。平面形は不整楕円形で、壁は外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。その規模は長軸が74cm、短軸が68cm、深さは18cmである。堆積土は2層に区分した。各層には焼土が含まれ、 ℓ 2では焼土塊が多量に含まれていた。

本遺構については、堆積土に焼土が含まれているなどの特徴から、性格不明遺構としたものである。本遺構の時期については、検出面から弥生時代中期中葉と考えている。

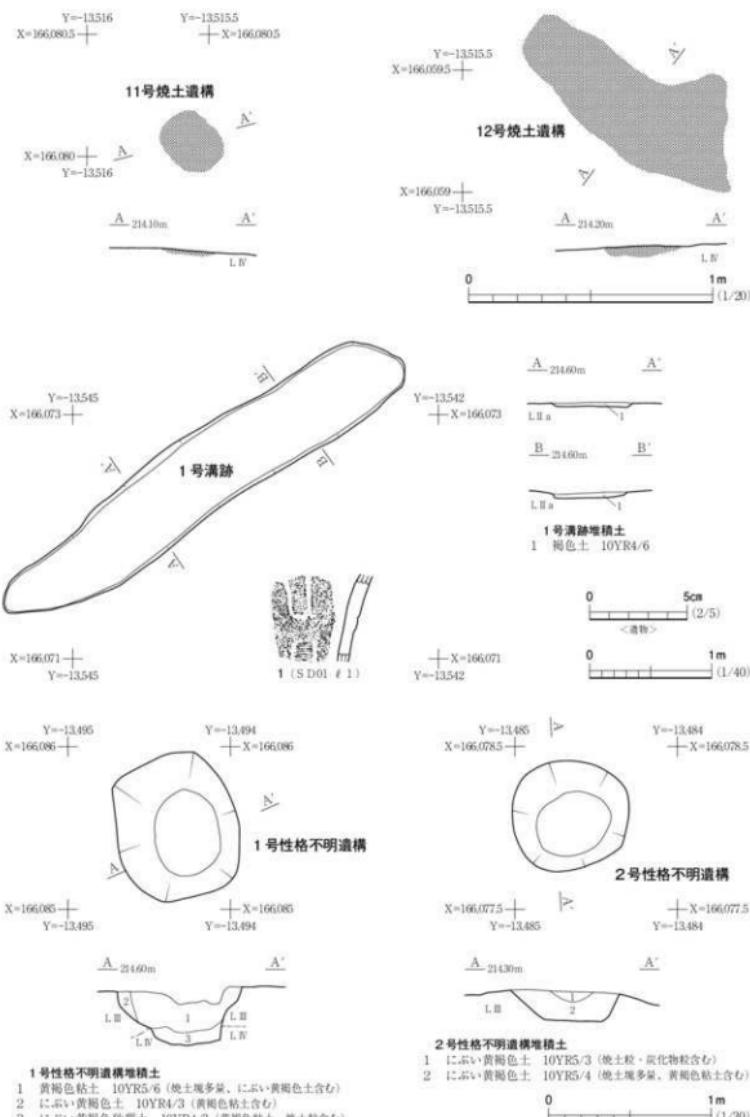


図27 11・12号焼土遺構、1号溝跡・出土土器、1・2号性格不明遺構

第6節 遺物包含層と遺構外出土遺物

遺物包含層（図9・10・28、写真6）

遺物包含層は調査区北東部で確認し、縄文時代晚期後葉から末葉を主体とするが、弥生時代前期から中期中葉にかけての遺物も含まれていた。遺物包含層の範囲は、図10で示したとおり東西34m、南北30mで、調査区北際にまで広がっていることから、遺物包含層の範囲は調査区外まで及んでいる。

調査区は只見川沿いの下位段丘に位置するが、調査区南東部では低地及び氾濫原とみられるような等高線の乱れがみうけられる。また、河川跡とみられる蝶の堆積範囲が、調査区南東部と西部にみられた。遺物包含層は、この河川跡に挟まれた場所にある。

遺物包含層を形成する堆積土は、本章第1節で記述したようにLⅢである。各グリッドの縄文土器・弥生土器・石器の出土点数を、図28に示した。各グリッドの出土傾向をみてみると、遺物包含層の東部にあたるB10・C10・D10・B9・C9グリッドでの出土点数が多い。

さらに、弥生土器が一定量、各グリッドから出土しているが、同一の層位から出土したもので、層位区分によって遺物が分けられるものではない。同一の層位に、時期の異なる遺物が含まれるのは、付近に流れる只見川の影響によるものと思われる。今回の調査区では、深いところでは1mを超える洪水砂によって覆われていたので、絶えず只見川から影響は受けているものとみられる。

なお、LⅣ出土の遺物についても参考例として図示した。

ここで図示した遺物は、土器については精製土器・半精製土器・粗製土器に区分し、各々識別で

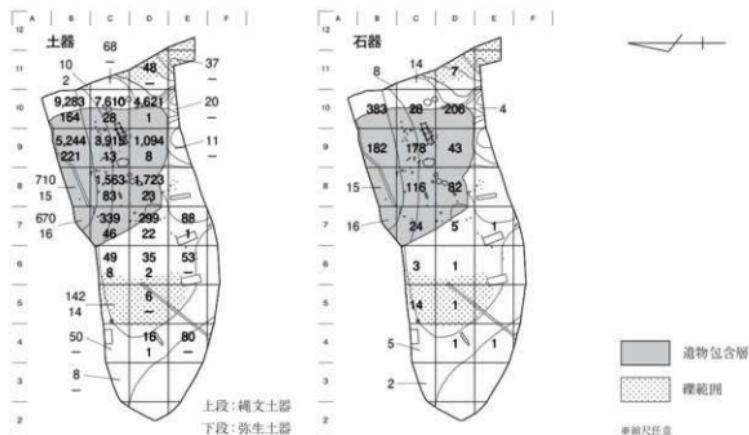


図28 グリッド出土縄文土器・弥生土器・石器出土点数

きた器形と、底部・ミニチュア土器とした。石器についても、器形ごとに区分した。土製品・石製品については区分せずに一括して記述した。さらに縄文土器は、精製土器・半精製土器・粗製土器についても区分して掲載した。

なお、精製土器・半精製土器・弥生土器の口縁部では、波状となるものがある。その突起部の形状が、単独の山型になるものと2つに連なる山型のものとがある。ここでは前者をA突起と、後者をB突起と称する。

1 器形を判別できた土器(図29~51、写真19~31)

(1) 縄文土器(図29~49、写真19~30)

① 精製土器(図29~41、写真19~27)

精製土器は地文がなく文様のみで構成される土器で、識別できた器形は、浅鉢・鉢・高杯・壺などである。器面の調整は、内外面ともに丁寧なミガキが施されている。資料のなかには、赤彩が施されていたものもある。特に浅鉢に関して赤彩が施されていたものが多い傾向がある。

a 浅 鉢(図29~36、図37~1、写真19~22) 浅鉢のなかで、その大きさを推定できた資料を図29~図37~1に示した。その器形の多くは底部が平底で、体部は直線的に開きながら立ち上がり、口縁部に至る。その他、図29~2、図34~2、図36~6のように丸みを帯びた器形のもの、図29~5~7の逆台形状のもの、図35~5・図36~3の皿状のものなどもある。

一方、体部下半から底部にかけて遺存していない資料も加えて、口径に着目してみると、最大のものは図36~1で、口径が42cmである。一方、最小のものは、図34~4の口径が復元値で10.6cmである。他の資料では、口径が20~25cmのものと、15cm前後のものとに分かれている。

さらに、口縁部の立ち上がりをみてみると、以下のような。

内湾するもの(図29~2、図30~1、図31~2・4、図34~2・3・5、図35~4、図36~6)、直線状に開くもの(図29~5~8、図32~3・4・6、図33~1・2、図34~1・7・9・10、図35~3・5、図36~3、図37~1)、外反するもの(図29~4、図32~1、図33~3・4、図34~8、図35~6)、直立するもの(図29~1、図31~1・3、図32~2、図32~5・7、図34~4~6、図36~1・4)、外傾するもの(図29~3、図30~2~4、図35~1・2、図36~2・5)などがある。

なお、底部外面には、図29~3、図30~4、図32~2、図35~1、図36~2・5にとびござ目編みの圧痕、図29~2に樹網代編みの圧痕、図34~2に木目ござ目編みの圧痕、図30~2に重複した状態の木葉痕がみられる。

浅鉢の文様は、浮線文が大半を占めているが、図34~4・10のように平行沈線文が巡っているものもある。さらに、図36~4、図37~1のように無文のものもある。

図29~1~7、図30~2・4は浮線網状文が1段施されている。その文様構成は、図29~1~7では三角形文を上下互い違いに、図29~5・6では三角形文と横長の楕円形文を上下互い違いに、図30~2では三角形文と菱形文を上下互い違いに組み合わせている。図29~3・5・6、図

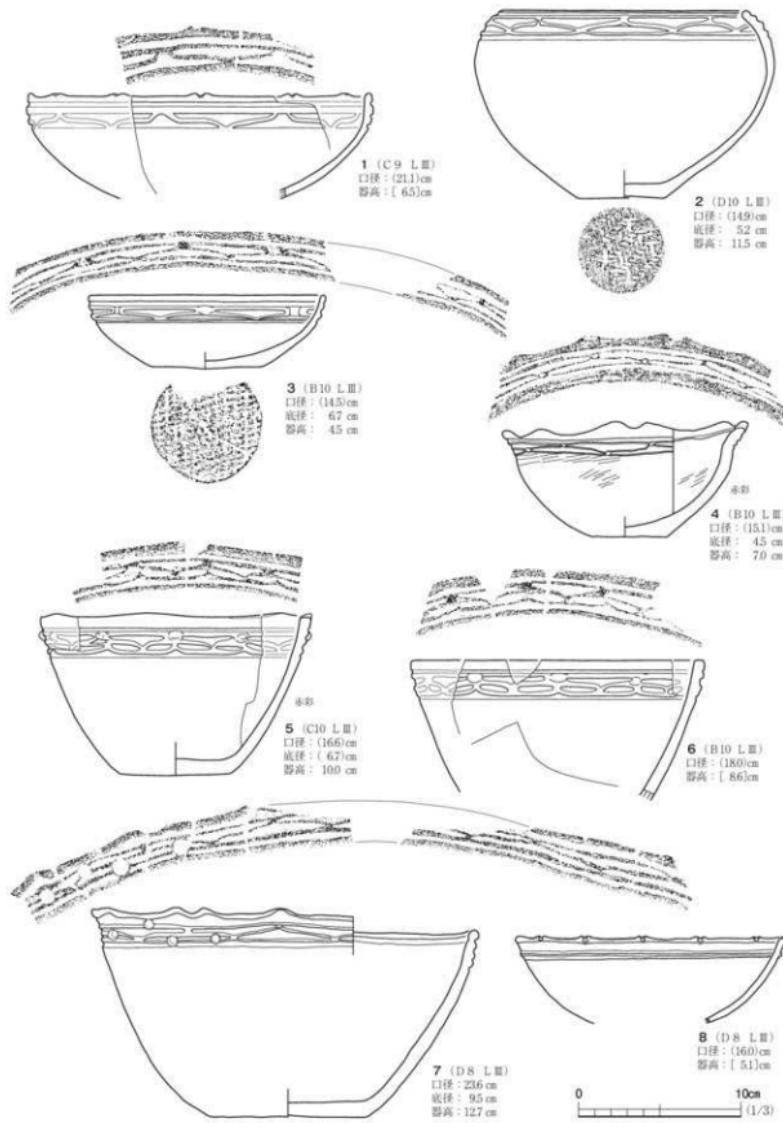


図29 遺物包含層出土土器（1）

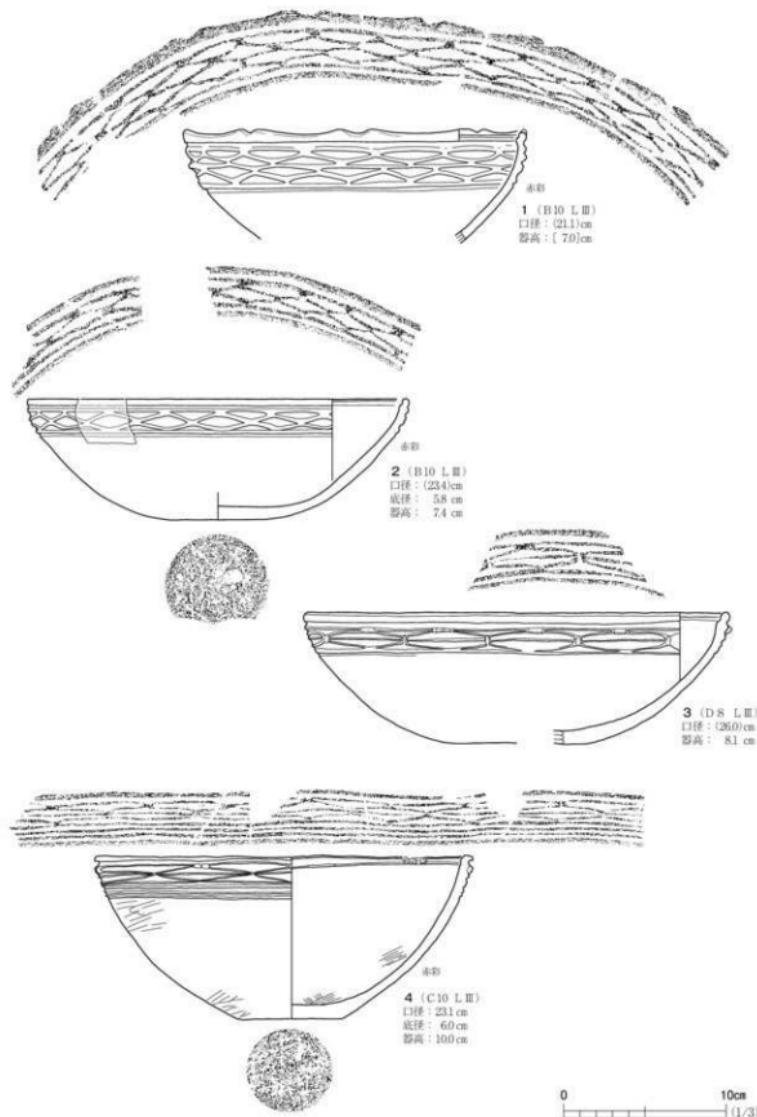


図30 遺物包含層出土土器（2）

30-3・4、図31-1~3、図32-1・2・4の文様上部の連結部には突起がみられるが、図29-3・図30-4の連結部には突起と刺みが交互に、図29-4の連結部には、円形の刺突が施されている。図29-1・4・7は波状口縁で、1の突起部には円形の刺突が施されている。7には2対の補修孔がみられる。図29-4、図30の口縁部内面には、沈線が1条施されている。図29-8は浮線直線文が1条施されている。

図30-1は、三角形文を上下互い違いに組み合わせた浮線網状文を、2段重ねて配置している。図30-3には、菱形の浮線枠状文が、1単位ごとに刺みが入って施されている。図30-4は内外面ともに赤彩が施されている。図30-4、図32-2、図36-5の口縁部内面には、人為的に打ち欠いたとみられる敲打痕がみられる。

図31-1~3には、三角形文を上下互い違いに組み合わせた浮線網状文を1・2では3段、3では4段重ねて配置している。1・2は法量が異なるものの、ほぼ同じ文様構成となっている。図31-3は口縁部の一部が欠損しているが、ほぼ完品の資料である。図31-4では、三角形文と横長の楕円形文を上下互い違いに組み合わせた浮線網状文が、5段重ねて配置されている。その文様の中程の連結部に2個1組の突起がみられ、横方向の刺みが施されている。なお、図31-4、図32-1・3の外面には炭化物がタール状に付着している。

図32-1・4・5は浮線網状文が施されている。1・4の文様は共通するもので、三角形文を上下互い違いに組み合わせた浮線網状文を2段重ねて配置しているが、その間に横長の楕円形文をさらに加えている。5は波状口縁であるが波状の幅が狭い。三角形文を上下に組み合わせた浮線網状文を2段重ねて配置している。さらに、口唇部には縦・横方向に刺みを入れている。図32-2・3・6は「|」状文を上下に配置した浮線網状文が施され、2では三角形文を加えている。図32-7には横長の浮線楕円形文が2重に施されている。

図33-1・2には浮線レンズ状文が施され、浮線が3重になっている。なお、施文によって器面を削った箇所が、三角形文となっている。図33-3・4の文様は三角形文・菱形文・横長の楕円形文を上下互い違いに配置した浮線網状文となっている。そのなかでも、横長の楕円形文は多重となっている。

図34-1・3は横長の浮線菱形文が不規則に配置されている。図34-2は浮線による「Z」字状文を連ねて菱形文を描き出している。図34-5は浮線を斜行させて三角形文を描き出している。図34-7、図35-3、図36-3には浮線楕円形文が施されている。図34-8には沈線と縦方向の刺みが施されている。図34-6・9には浮線直線文が施され、6は1条、9は2条となっている。9は波状口縁である。

図35-1は2段に配置した匹字文が施され、匹字文との連結部では突起がみられる。図35-2は横長の浮線楕円形文が施されているが、遺存状態が悪いため文様構成は不明である。図35-4は、2条の浮線直線文と匹字文を施している。図35-5は、横長の楕円形文を2段に重ねて配置している。図35-6は、上下互い違いに組み合わせた三角形文と2条の直線文によって浮線網状

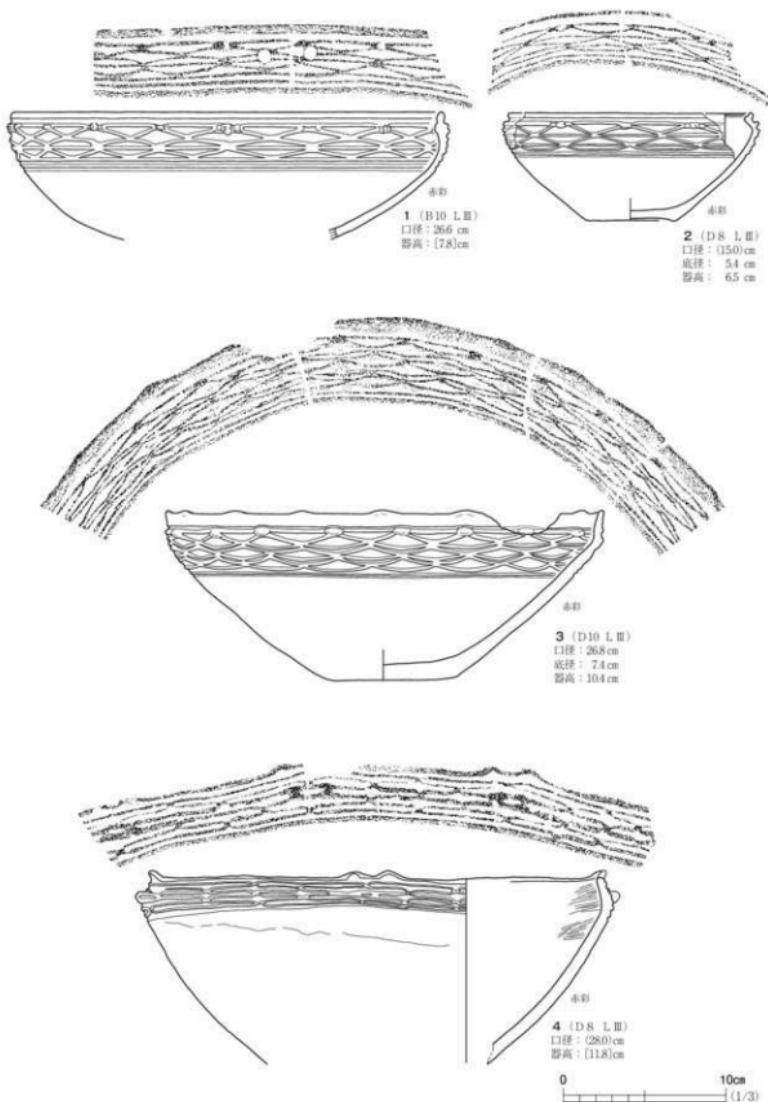


図31 遺物包含層出土土器（3）

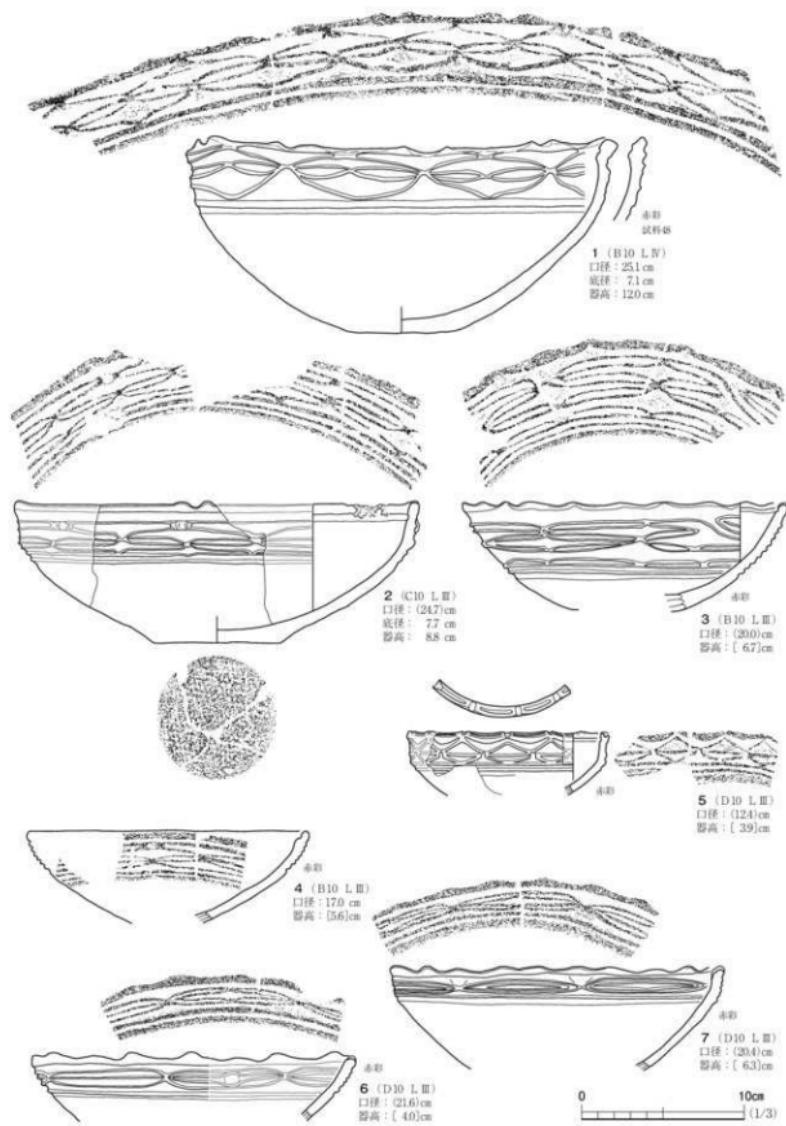


図32 遺物包含層出土土器 (4)

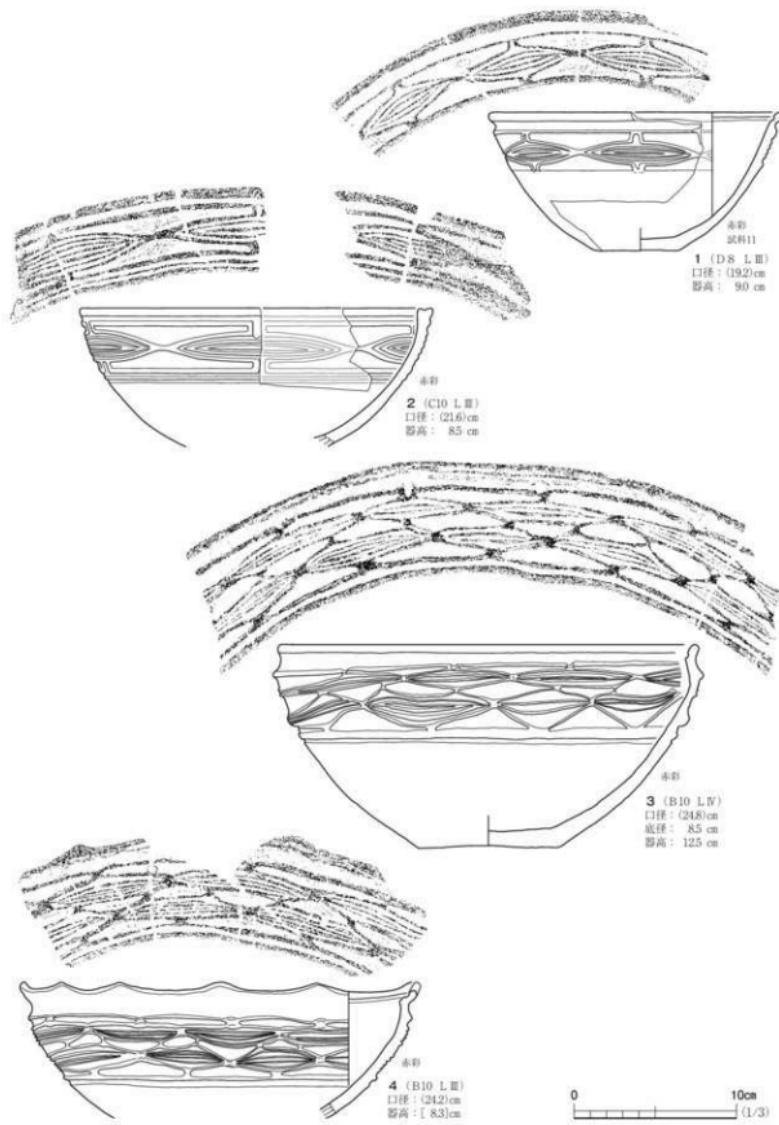


図33 遺物包含層出土土器 (5)

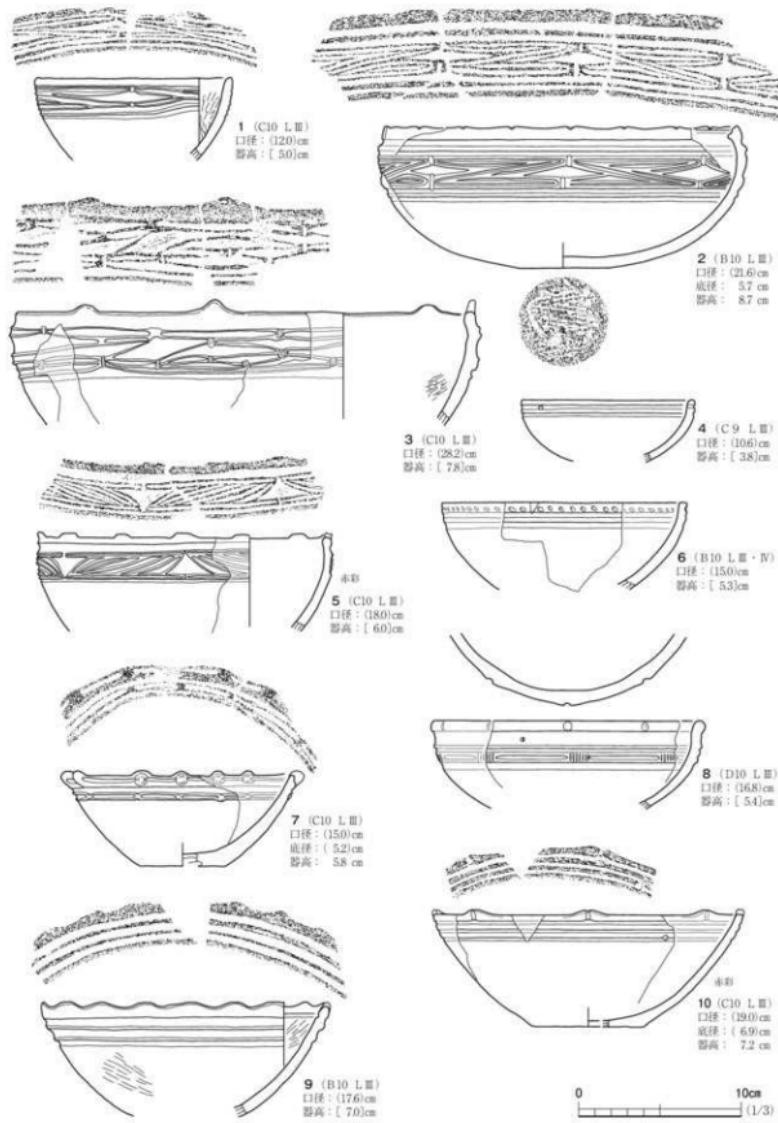


図34 遺物包含層出土土器（6）

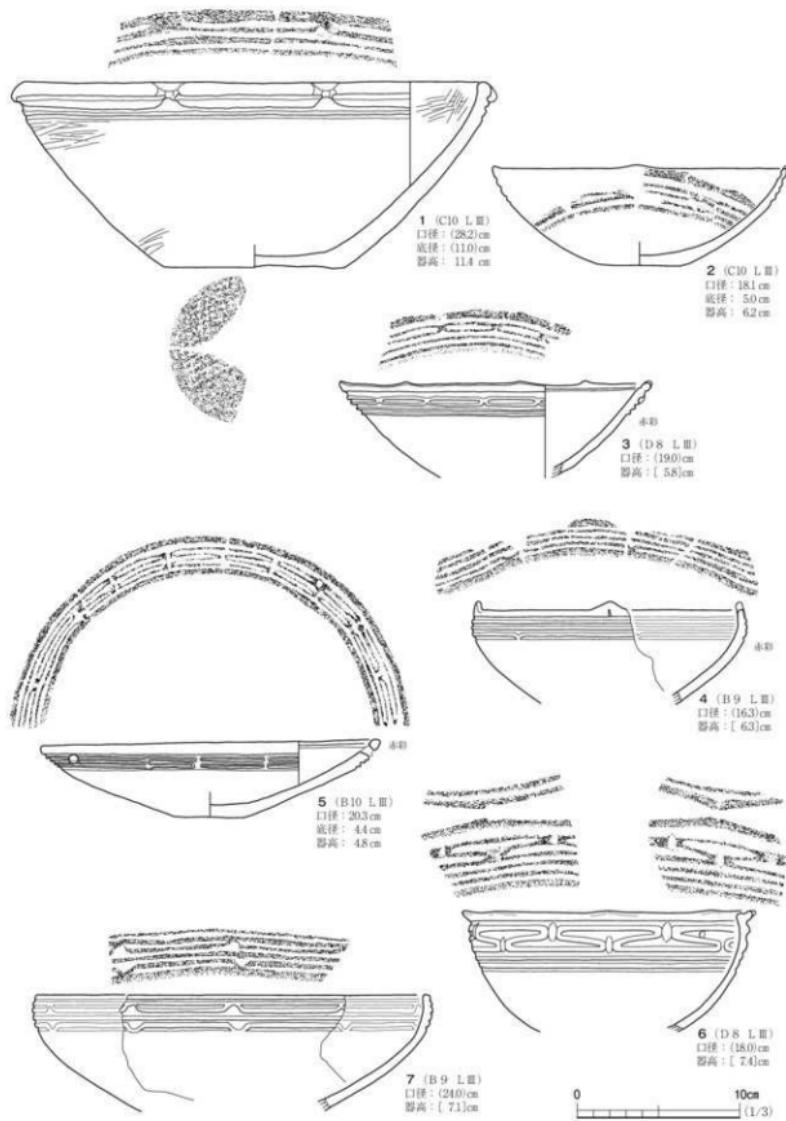


図35 遺物包含層出土土器 (7)

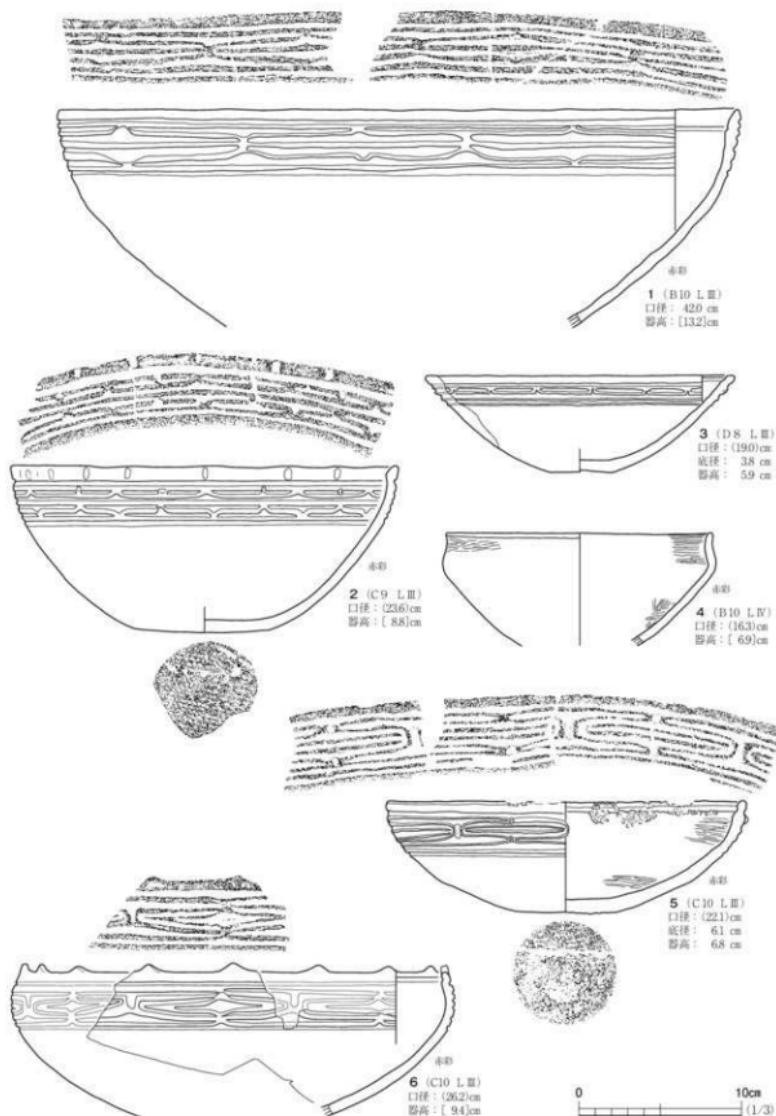


図36 遺物包含層出土土器（8）

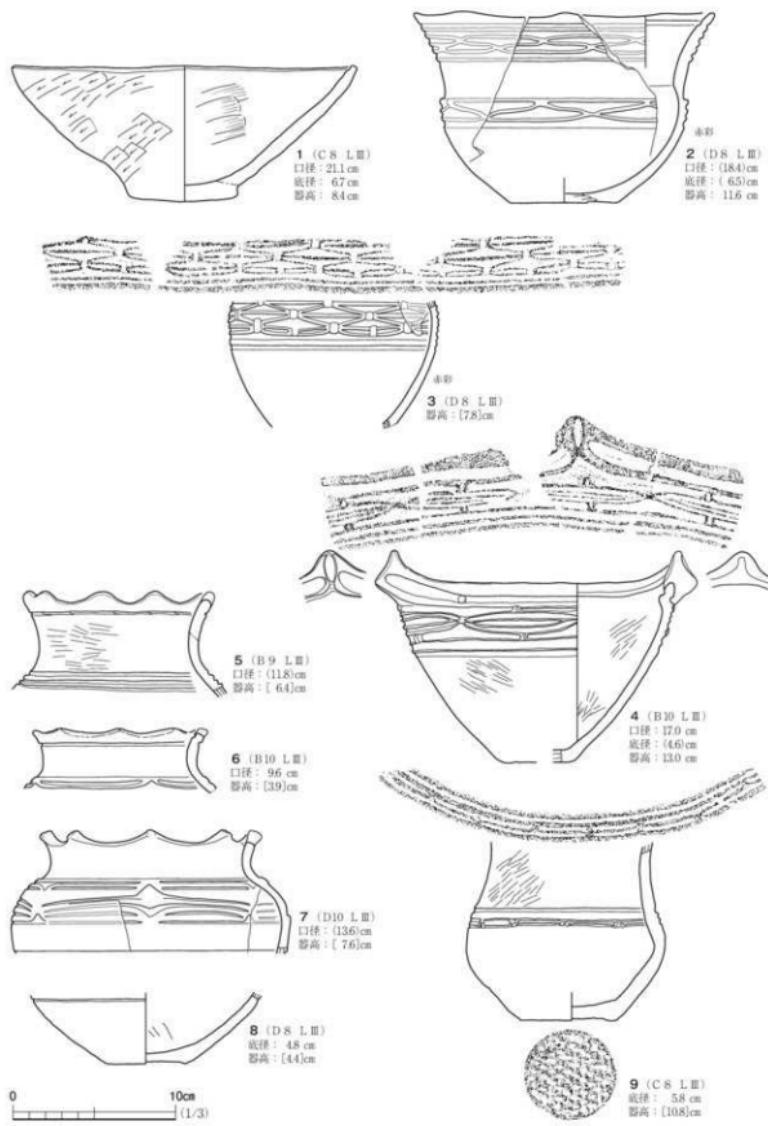


図37 遺物包含層出土土器 (9)

文を構成している。図35-7は匹字文を2段配置している。

図36-1・2には浮線網状文が施され、1は「|」状文を上下に配置している。図36-4、図37-1は無文である。図36-4は、外面に赤彩が施されている。器形は体部下半から直線的に大きく開きながら立ち上がり、頭部で「く」字状に屈曲し、口縁部で直立する。図37-1の器形は、底部から口縁部に向かって、直線的に開きながら立ち上がる。図36-5・6には浮線枠状文を連ねて変形工字文を描出し、6の浮線枠状文には菱形文がみられる。

b 鉢(図37-2～9、図38-1～10、写真23・24) 図37-2の器形は、底部から体部にかけて内済し、口縁部で外傾しながら立ち上がる。口縁部と体部には三角形文を上下互い違いに組み合わせた浮線網状文が施されている。図37-3は体部のみの資料で、上半部に1と同様な浮線網状文を2段、さらに浮線長方形文を配置している。図37-2・3には赤彩が施されていた。図37-4の器形は、底部から直線状に開く。口縁部には山型の突起が付き、幅の広い沈線文と楕円形文が陰刻されている。文様は浮線レンズ状文が施され、浮線が2重となっている。楕円形文と浮線直線文との連結部では貼瘤があり、縱方向の刻みが入る。図37-5～7は口縁部の資料で、いずれも波状口縁である。5は口縁部に1条の沈線文、頭部に平行沈線文が施されている。6・7は匹字文が施されているが、7では2段配置している。図37-8は底部から体部下半の資料である。図37-9は口縁部が欠損している。器形は体部下半に最大径を有するものである。文様は浮線直線文と匹字文が施されている。匹字文を描出するために、刺突が加えられている。底部外面にはとびござ目編みの圧痕がみられる。

図38-1～7・9は口縁部の資料で、1～3・5・6・9は波状口縁である。文様は1～3・9に浮線直線文が1条施されている。1の器形は瓢形で、3の口縁部突起には、横方向の刻みが入る。5には浮線長方形文が施されている。6の口縁の突起部には円形の刺突が施され、7の口縁部内面には沈線が1条巡っている。図38-8は体部下半の資料で、平行沈線文が3条巡っている。図38-10は無文で、体部上半が強く屈曲する特徴的な器形である。内外面ともに器面の磨滅が著しい。

c 高 杯(図38-11～13、図39、写真24) 図38-11は杯部が欠損している資料である。脚部には、三角形文を上下互い違いに組み合わせた浮線網状文が、3段にわたって配置されている。赤彩が施されているが、破断面にも顔料が付着していた。図38-12・13、図39-1・2は、杯部の資料で脚部は欠損している。12には、横長の浮線楕円形文を2段に配置し、連結部には押引文が施されている。13は波状口縁で、突起部は台形状となっている。文様は浮線長方形文が施されている。1は波状口縁であるが、突起部が欠損している。文様は匹字文を上下に配したなかに変形工字文を配置している。2は直線状に開く器形で、大型の突起部が付く波状口縁となっている。突起部の先端は、沈線で区画したボタン状となっている。文様は、破片資料のため全体の構成が不明であるが、変形工字文とみられる。口縁部内面には突起部の縁辺に沿って沈線が、さらに口唇部にも沈線が施されている。

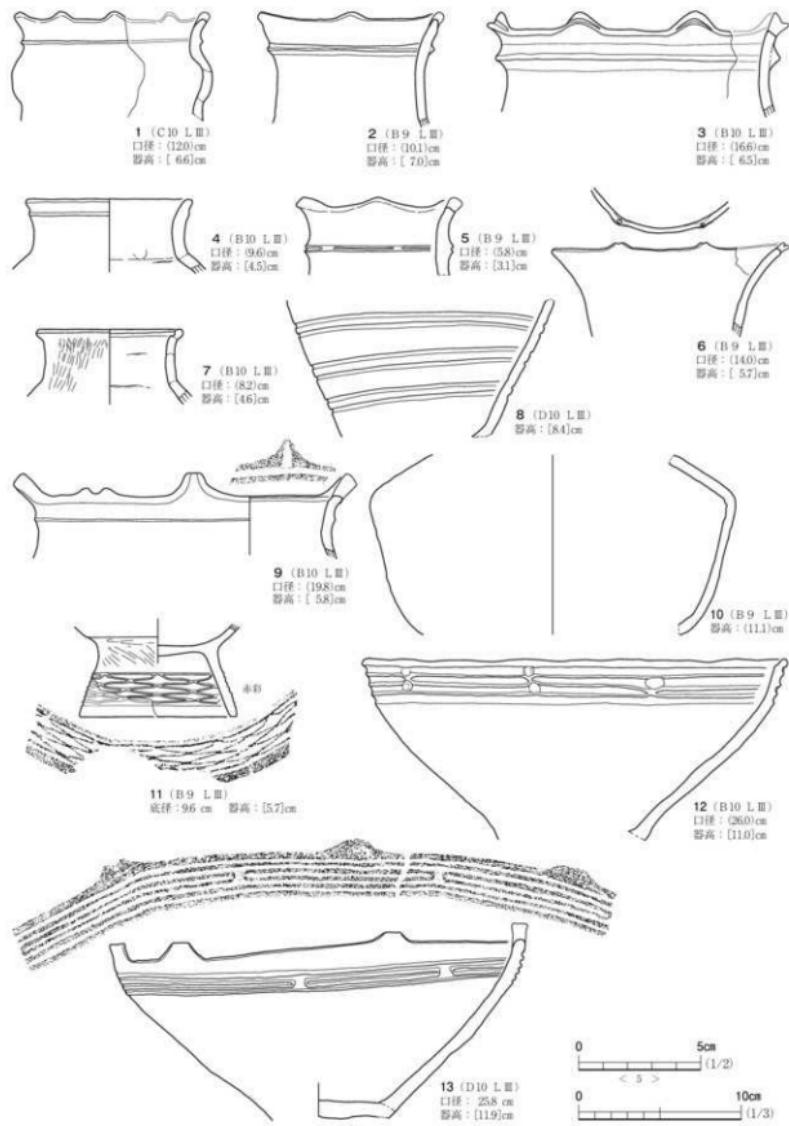


図38 遺物包含層出土土器 (10)

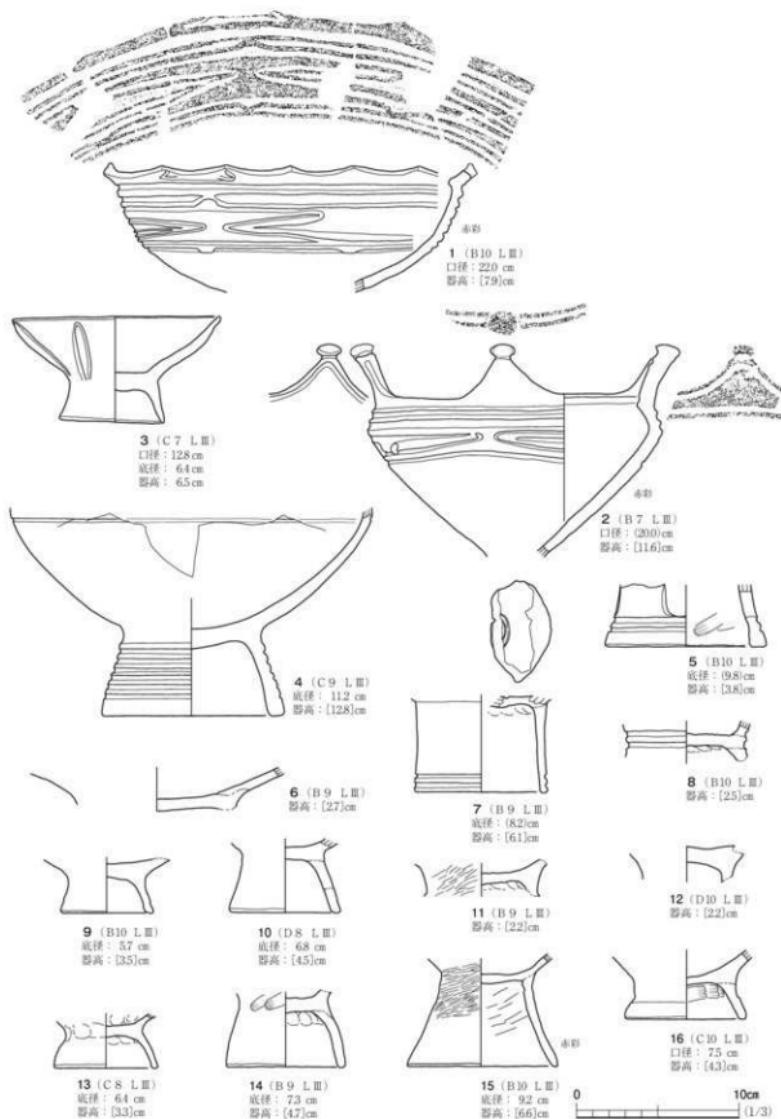


図39 遺物包含層出土土器 (11)

図39-3の杯部には、沈線による継長の楕円形文が一定の間隔で施されている。図39-4・5・7・8には平行沈線文が施され、4では3条、5・7・8では1条となっている。4の杯部は口縁部が欠損しているため、全体の器形は不明であるが、沈線文が1条巡っている。図39-6は杯部の下端部で、図39-8・11・12は杯部と脚部の境目の資料である。図39-5・7・9・10・13～16は脚部の資料である。各器形は、5・9・10・15では緩やかに「ハ」の字状に開き、7は直立気味、13・14はやや内湾し、16はやや屈曲しながら底部に至る。5には透孔がみられるが、その形状は不明である。現状で2箇所確認できる。7には杯部の底部内面が遺存しているが、沈線によって文様が施されている。15には赤彩が施されているが、それは全面に及んでいる。

d 壺(図40・41、写真24～27) 図40-1は波状口縁で、口縁部は直立気味に立ち上がるが、口唇部でやや外傾する。口縁部には平行沈線文が2条、さらに口唇部に継方向の刻みが施されている。図40-2の口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲しながら立ち上がる。頸部には匹字文が施されている。図40-3の口縁部は強く外反しながら立ち上がり、頸部はほぼ水平である。口縁部には平行沈線文が1条施され、口唇部には幅の広い沈線と横長の楕円形状の突起部がみられる。頸部には浮線長方形文と匹字文が施されている。浮線長方形文の連結部では突起がみられ、突起には継方向の刻みが入る。図40-4は口縁部の立ち上がりが短い。口縁部・口唇部には沈線文が1条施されているが、途中で途切れる。

図40-5は口縁部から体部上半の資料である。波状口縁となる口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がり、体部中程に最大径を有する。口縁部の突起は、推定すると8単位となり、突起との間には沈線が施されている。沈線は口縁部内面にも施されている。口縁部の下端には、横長の浮線楕円形文と抉りを組み合わせた突帶が巡っている。頸部には沈線の区画内に入組工字文が施されている。図40-6は頸部から体部上半部にかけての資料である。文様は、沈線により渦文が施されている。その文様構成を復元すると、1つの渦文は2つに連結しているので、2つで1単位となっている。それが3単位配置されていたようである。さらに、渦文ではその中心が突出し、円形の刺突が付されているものとされていないものが連結している。

図41-1は壺で、唯一口縁部から底部にかけて復元できたものである。器形は、口縁部から頸部は「ハ」の字状に開き、体部は球状となっている。口縁部には匹字文が、口唇部には沈線文が1条施されている。体部上端には工字文が施され、その文様の構成は沈線文の区画内に連続刺突三角文と直線文が配置されている。図41-2・6・8・9は頸部から体部上半の資料で、器形は球形で、頸部に匹字文を施している。6は頸部に平行沈線文が施され、8・9は無文である。図41-3～5は口縁部の資料である。3は口縁部外面に匹字文を、内面に沈線文が施されている。4は無文で、5は沈線の区画内に継方向の連続した刻みを施している。

② 半精製土器(図42～47、写真26～29)

半精製土器とは、地文と文様とで構成される土器である。識別できた器形は、浅鉢・鉢・高杯・壺・深鉢などである。器面調整は、無文帯ではミガキが施されている。

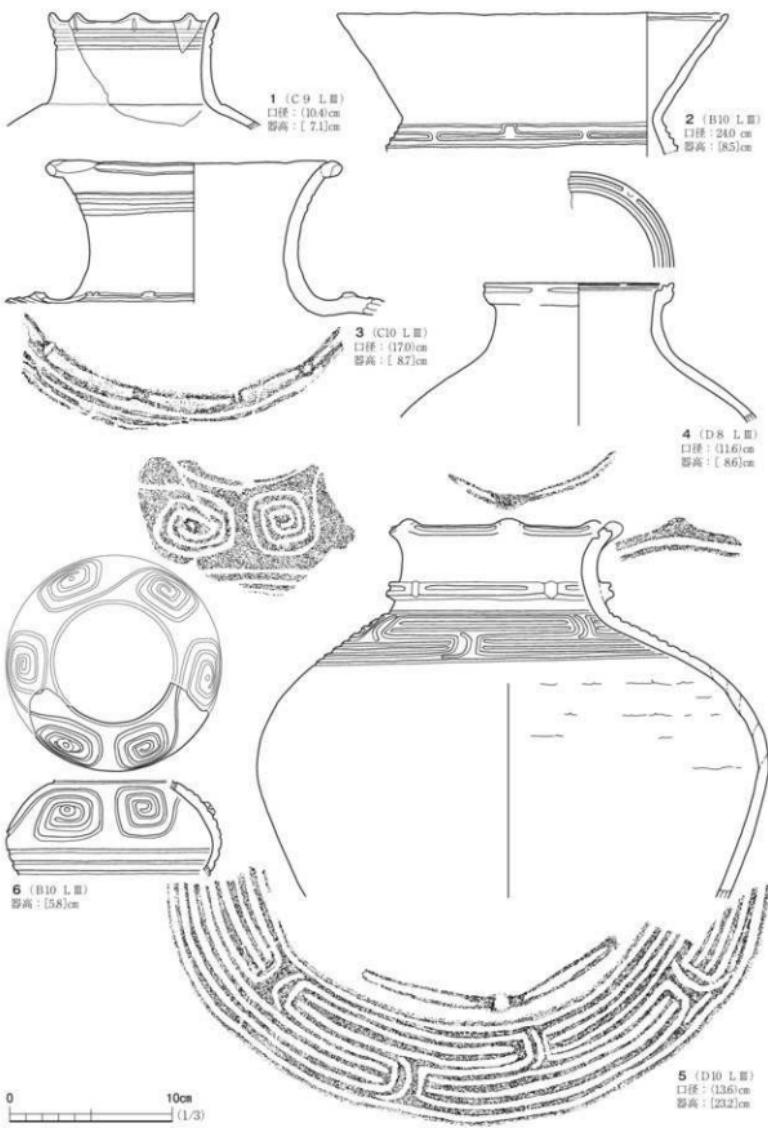


図40 遺物包含層出土土器 (12)

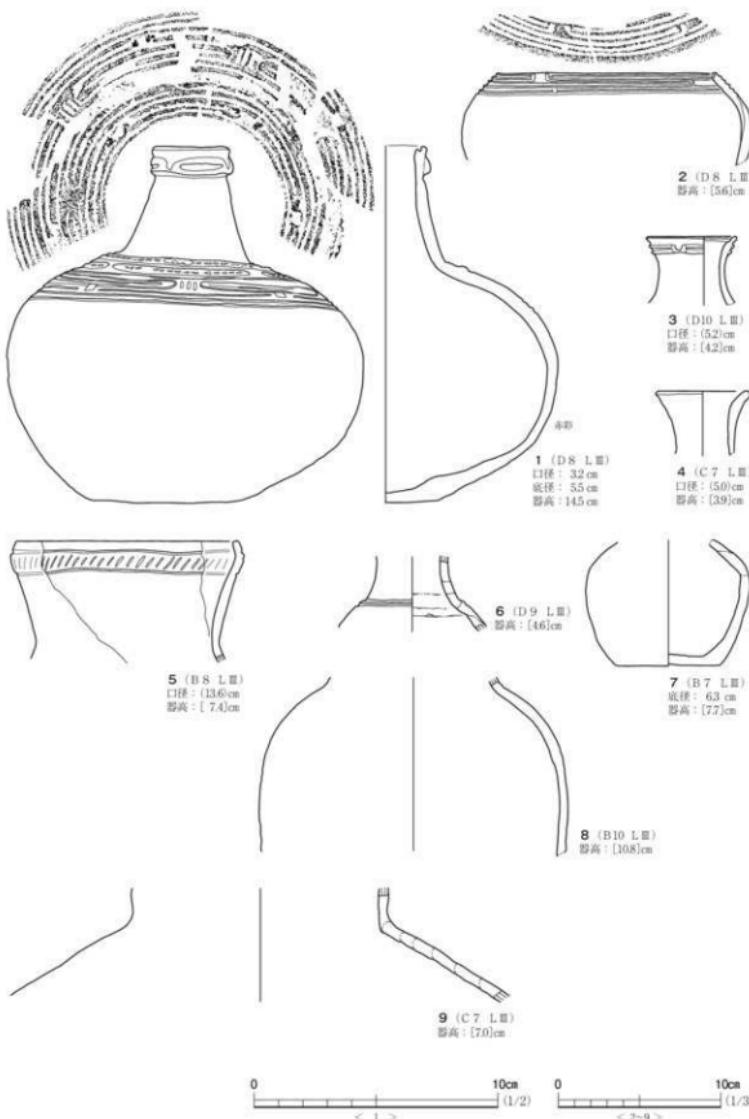


図41 遺物包含層出土土器 (13)

半精製土器では付着物がみられるものが多いことから、図42-2・4、図44-6、図46-6などの付着物について、放射性炭素年代測定を実施した。その結果は、図42-2は $2,445 \pm 25$ BP、図42-4は $2,500 \pm 20$ BP、図44-6は $2,430 \pm 20$ BP、図46-6は $2,440 \pm 20$ BPであった。

a 浅鉢(図42-1・2、写真26) 図42-1・2は、いずれも底部が欠損している。1の器形は体部下半から緩やかに内湾し、体部上半で直立気味となり、口縁部で外反する。口縁部外面には沈線文が2条、内面には沈線文が1条、体部にはLR繩文が施されている。2は大型品であり、その器形は、体部上半から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。文様は口縁部に匹字文を、口唇部に沈線文、体部に撫糸文が施されている。匹字文は2段に配置し、匹字文を描出すために器面が深く削られている。

b 鉢(図42-3～6・図43-1～9、写真26) 図42-3はA突起とB突起を有する波状口縁で、体部は直線的に開き、口縁部で外反する。文様は、頸部では幅の広い沈線文が、口唇部には撫糸文が施されている。体部では、撫糸文を地文とし沈線による鋸歯文が施されている。図42-5は口縁部が外傾し、底部から体部上半に向かって直線的に開き、体部上半に最大径を有するものである。この器形は、図42-4・6、図43-1・2とはほぼ共通する。その文様構成は、口縁部に浮線網状文が、体部上半にはRL繩文を地文として多条の平行沈線文が、体部下半と口唇部ではRL繩文が施されている。さらに、口縁部内面に沈線文が1条施されている。この文様構成は、図42-4・6とはほぼ共通する。図42-4は法量が小さなことで、口唇部にRL繩文が、体部上半では繩文を地文として多条の平行沈線文を施している。図42-6は波状口縁で、規模の大きなA突起とやや小振りのB突起を有する。A突起の内外面には、二等辺三角形状の陰刻が施されている。文様は、頸部に横長の浮線梢円形文とA突起・B突起が施されている。

図43-1・2の体部上半には匹字文が、体部下半では1がLR繩文、2ではRL繩文が施されている。匹字文は1では2段に、2は1段の配置となっている。図43-3は、体部上半から口縁部にかけて外傾しながら立ち上がる。口縁部は波状口縁で、文様は横長の浮線梢円形文と浮線直線文が1条、内面には沈線が1条施されている。なお、浮線梢円形文同士の連結部では突起がみられる。体部では、オオバコなどの撫繩文が施されている。底部外面には、とびござ目編みの圧痕がみられる。さらに赤彩が内外面に施されているが、7も同様である。図43-4～9の器形は体部下半が球形で、4はLR繩文、5・6・7・9は撫糸文、8はRL繩文が施されている。図43-4～6の頸部には、沈線が施されている。

c 高杯(図43-10～14、写真27) 10の杯部は歪んだ器形となり、杯部と脚部の下端にはRL繩文が施されている。11～13は杯部の下端と脚部の、14は脚部の資料である。11の杯部にはRL繩文が、脚部には円形の透孔が穿たれている。杯部と脚部に12はLR繩文が、13は撫糸文が施されている。14は杯部と脚部の境に平行沈線文が、脚部には撫糸文を地文として、匹字文が施されている。

d 壺(図43-15・16、写真27) 15はほぼ完形品で、その器形は、球形をなす体部から口縁部に向かって直立気味に立ち上がり、口縁部で外反する。文様は体部上端に匹字文が2段に、体部中程から下端には撚糸文が施されている。16は波状口縁で、口縁部に隆線が波状に施されている。頸部にはR L 縄文が施されている。

e 深 鉢(図43-17、図44~47、写真27~29) 図43-17は波状口縁で、大小のA突起がみられる。大きなA突起には、内外面ともに三角形状の陰刻が施されている。口縁部内面には沈線が1条施されている。文様は撚糸文が地文で、口縁部と頸部に浮線網状文が施されている。なお、口縁部と頸部の間は撚糸文を磨り消している。

図44-1は波状口縁で、A突起とB突起がみられ、橋状把手が付く。文様はR L 縄文が地文で、浮線網状文が施されている。さらに、口縁部内面に沈線が1条、A突起内面に刻みが施されている。図44-2・3は波状口縁で、B突起がみられる。2の器形は体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がる。文様は口縁部に浮線網状文、体部に条痕が施されている。なお、口縁部内面に沈線が1条施されている。3の器形は、体部は外傾気味に、口縁部は外反しながら立ち上がる。文様は、撚糸文を地文として口縁部には浮線網状文が、体部上半には多条の平行沈線文が施されている。なお、浮線網状文と平行沈線文の間は、撚糸文を磨り消している。図44-4・図45-2は口唇部が欠損している。器形は、体部下端から体部上半にかけて直線的に開き、口縁部で内湾する。図44-5の文様は、撚糸文を地文として浮線網状文と多条の平行沈線文が施されている。図44-5の器形は、体部が球形をなし、頸部から口縁部にかけては外反しながら立ち上がる。口縁部は波状口縁で、A突起とB突起がみられる。文様は口唇部にR L 縄文が、口縁部に多条の平行沈線文が施され、頸部に浮線網状文とその連結部に刻みを有する突起が、体部上半には条痕を地文とし、鋸歯状沈線文と刺突文が組み合わさせて施されている。図44-6、図45-1の文様は、頸部に浮線網状文が、体部に条痕が施されている。図45-1の口縁部には沈線が1条施されている。

図45-1・3・5・6は波状口縁で、1にはB突起が、5にはA突起とB突起がみられる。図45-1、図46-6の器形は、体部では直線的に開きながら立ち上がり、頸部で内湾し、口縁部で外反する。図45-3の口縁部は、「く」の字状に屈曲しながら立ち上がる。文様はR L 縄文を地文とし、匹字文が施されている。図45-5、図46-7の器形は、体部が球形をなし、口縁部が外傾気味に立ち上がる。図45-5の文様は条痕を地文とし、口縁部では沈線が1条施され、頸部が匹字文と鋸歯状沈線文を施してしている。図45-6、図46-1、図47-6の器形は、体部は直線的に開きながら立ち上がり、口縁部で外傾する。図45-6の文様は、口縁部に横長の浮線梢円形文が、体部には条痕が施されている。体部の条痕は、体部上端で横方向に体部中程で縦方向に施されている。このような施文は、図46-5・6においてもみられる。図45-2の文様は、撚糸文を地文とし、匹字文が施されている。図45-4の器形は、体部では直立気味に立ち上がり、口縁部で内湾する。文様は口縁部に横長の浮線梢円形文と体部上半に地文(器面の磨滅により原体不明)と多条の平行沈線文が施されている。

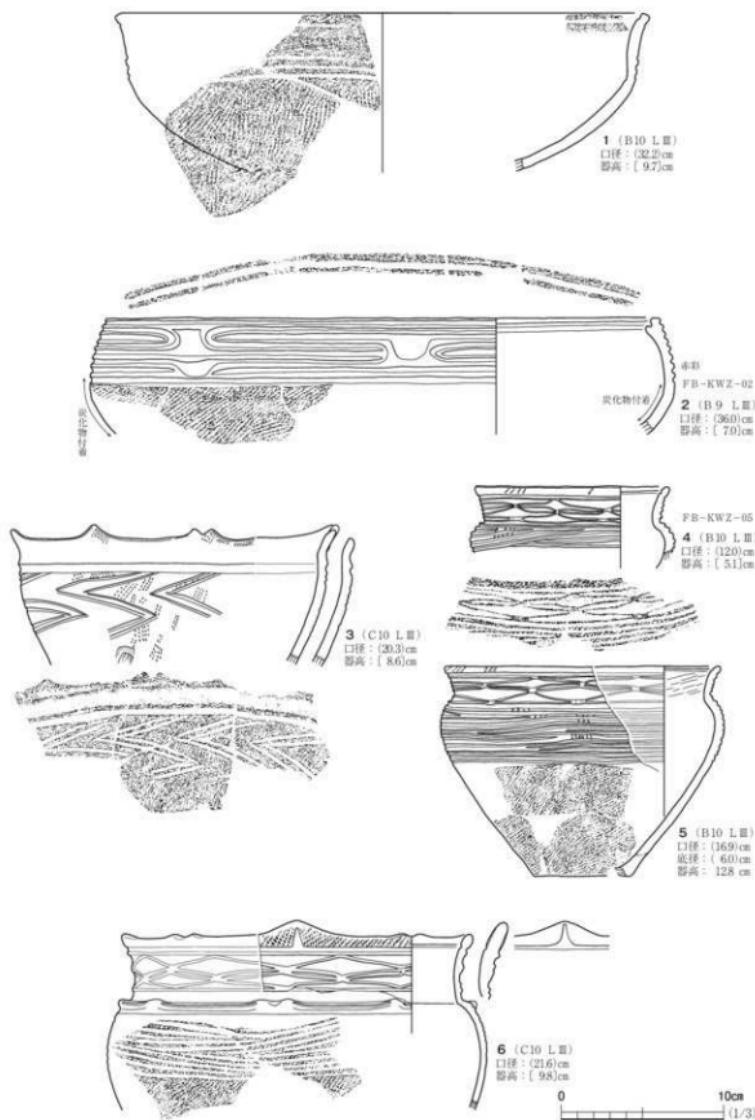


図42 遺物包含層出土土器 (14)

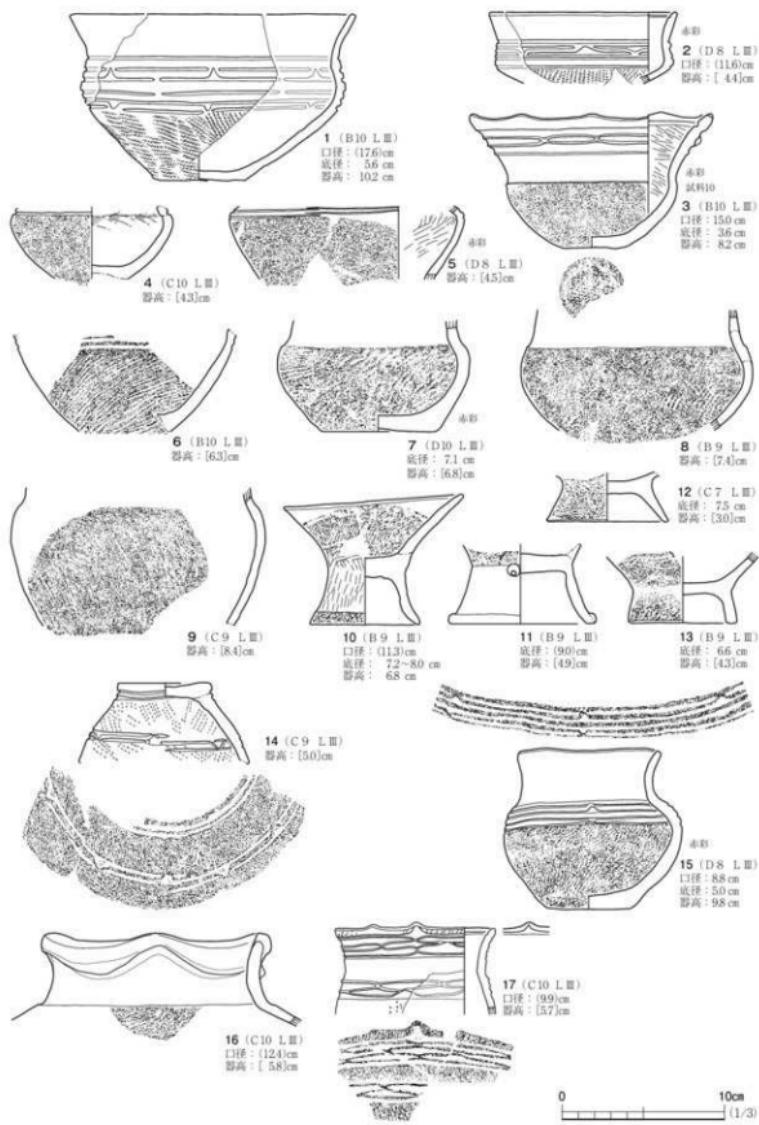


図43 遺物包含層出土土器 (15)

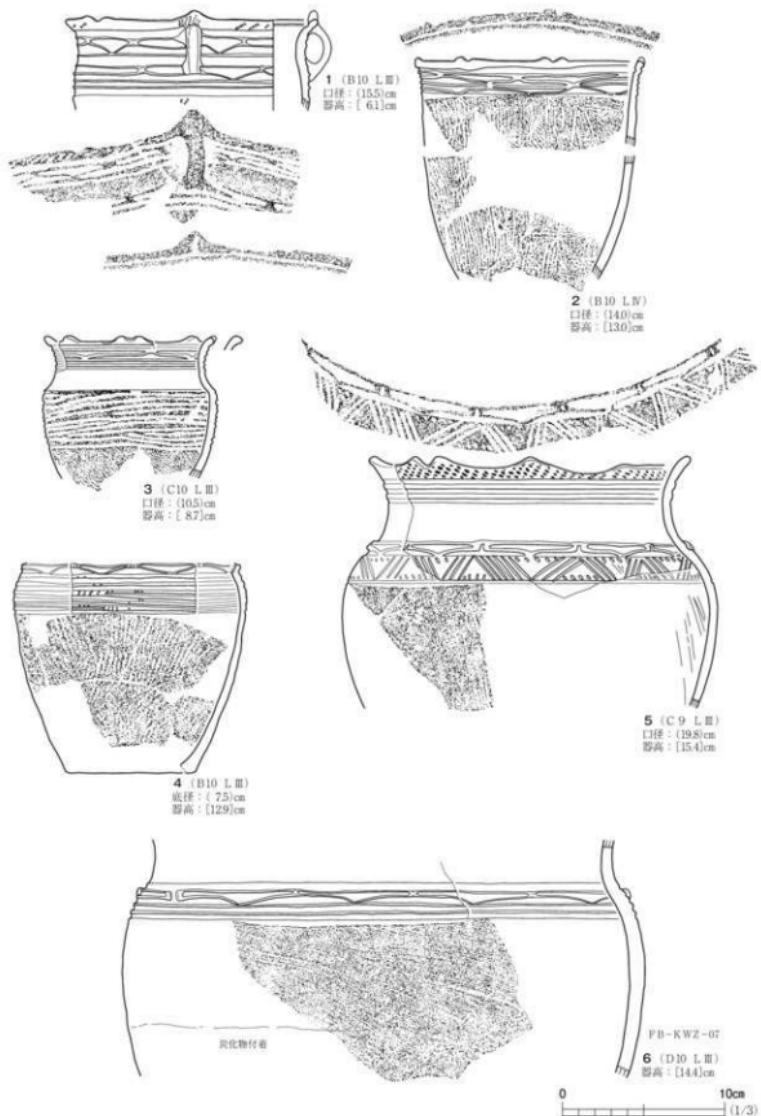


図44 遺物包含層出土土器 (16)

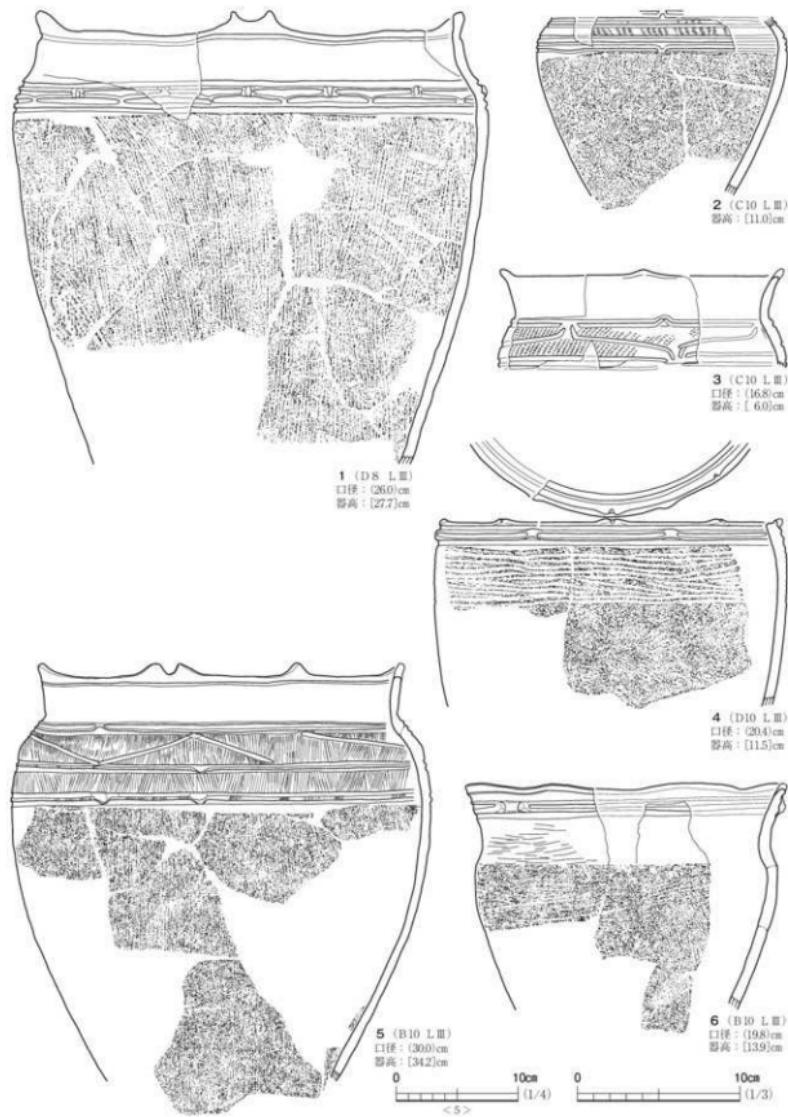


図45 遺物包含層出土土器 (17)

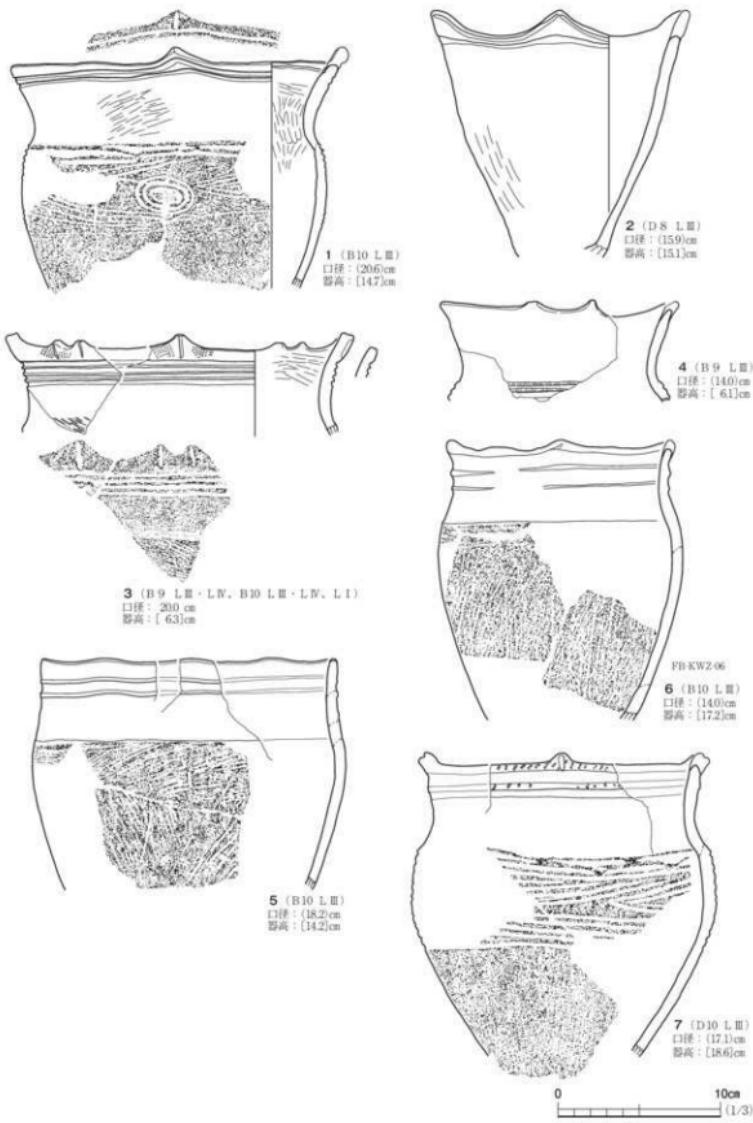


図46 遺物包含層出土土器 (18)

図46-1～7は波状口縁である。そのなかでも1・7にA突起が、3にA突起とB突起がみられる。1の文様は口縁部に平行沈線が施され、頸部から体部上半にかけて地文(器面の磨滅のため原体不明)と沈線による格円形文や錯歯文などが施されている。さらに、口縁部内面に沈線が1条、突起に刻みが施されている。2は口縁部に沈線文が1条施されている。3の文様は口縁部の突起に刻みと口唇部にRL繩文が施され、口縁部には平行沈線文が3条、体部上半に条痕が施されている。4は頸部に条痕を地文とし平行沈線文が施されている。5・6はとともに口縁部に浮線直線文を2条施している。

図47-1・2・6は波状口縁である。そのなかでも1・2ではA突起とB突起が、6ではA突起がみられる。1・2の器形は体部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がる。1の文様は口縁部に平行沈線文が、体部に撲糸文が施されている。2の文様は体部中程に撲糸文が、口唇部から体部上半にかけてLR繩文が地文として施される。口縁部外面では矢羽根状沈線文が、内面では沈線が

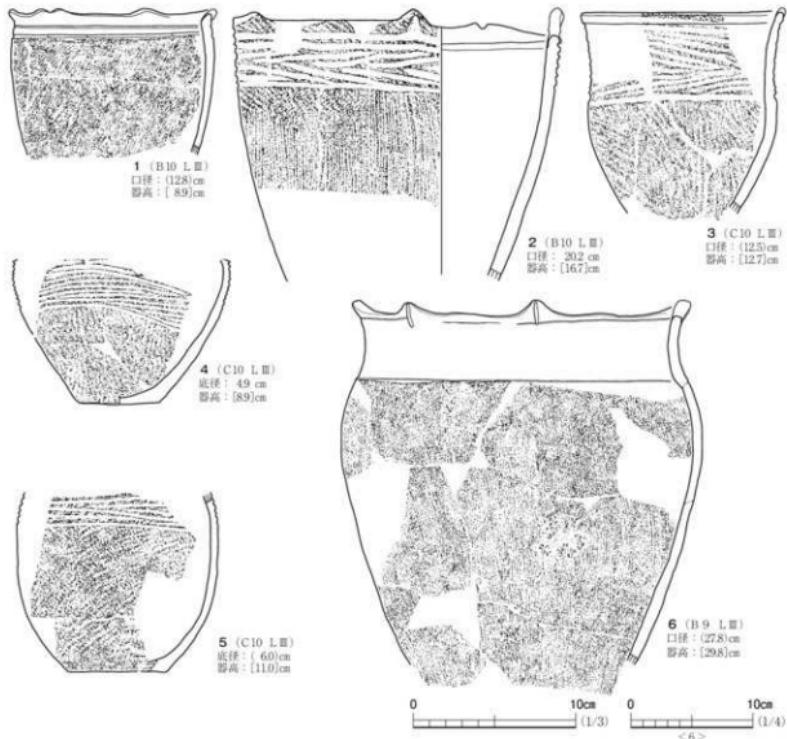


図47 遺物包含層出土土器 (19)

1条施されている。図47-3～5の器形は、体部が球形をなすもので、3は体部から口縁部に向かって外傾しながら立ち上がる。3～5の文様は、3では口縁部が矢羽根状沈線文、体部に条痕が施される。4・5の地文は4がLR繩文で、5がRL繩文となり、体部上半に多条の平行沈線文が施される。

(3) 粗製土器(図48・49、写真29・30)

粗製土器は地文のみで構成される土器で、器形が識別できたものは深鉢のみである。図48-1～4の器形は口縁部が折り返され、内湾する。文様は1・2が条痕を施され、3・4は無文となっている。図48-5は口縁部が折り返され、外傾気味に立ち上がる。文様は、口縁部のみに条痕が施されるが、図48-6も同様である。図48-6・7、図49-1・2の器形は口縁部が折り返され、口縁部から頸部にかけて直立気味に立ち上がる。図48-6の口縁部は、他のものと比べ厚い。図48-7、図49-1・2は口縁部と体部に条痕が施されるが、頸部が無文となっている。

図49-4の器形は、体部下半から口縁部に向かって、直線的に開きながら立ち上がる。頸部には沈線が1条施され、口縁部と体部には細密な条痕が施されている。図49-5の器形は、底部から体部上端にかけて、直線的に開きながら立ち上がり、体部上端では湾曲し、口縁部は外傾する。口縁部は段差がみられ、体部には条痕が施されている。底部外面には、とびござ目編みの圧痕がみられる。図49-6～8は底部から体部下半の資料である。文様は6がRL繩文、8はLR繩文、7は無文である。

(2) 弥生土器(図50・51、写真30・31)

弥生土器で識別できた器形は、鉢・高杯・蓋・壺などである。以下、器形ごとに記述してゆく。

a 鉢(図50-1・2、写真30) 1・2ともに波状口縁で、1はA突起とB突起が、2はA突起がみられる。1・2の器形は、底部から直線的に開きながら立ち上がるが、2では口縁部でやや直立する。1の文様は口縁部に沈線が、体部上半に変形工字文が、体部下半にLR繩文が施されている。2の文様は多条の沈線で三角形文が施されている。

b 高 杯(図50-3～12、写真30) 3は杯部の資料で、器形は直線的に開きながら立ち上がる。文様は、外面に平行沈線文と変形工字文が、口縁部内面に沈線文が1条施されている。4～10は杯部と脚部の資料である。4は透孔が1箇所確認できるが、現状ではその形状は不明である。4～7の文様は、4ではLR繩文を地文とし、沈線文が施されている。5では沈線の区画内に撚糸文を地文とし沈線文が施されている。6では沈線文と刺突文が、7では杯部に撚糸文が、杯部と脚部の境目に連続刺突文が施されている。8の脚部は、脚のような形状を復元したものである。文様は変形工字文と連続刺突文が施されている。9・10は棒状の脚部で、9には平行沈線文が施されている。11・12は脚部の下端で、内外面に赤彩が施されている。

c 蓋(図51-1～7、写真31) 1・2はつまみ部の資料で、1の文様はRL繩文が施されている。2には突起が4箇所あり、突起の間に横長の楕円形沈線文が、さらに突起の下に刺突が施されている。3は蓋全体の形状が分かる資料で、器形はドーム状をなしている。なお、6も同様な器



図48 遺物包含層出土土器 (20)



図49 遺物包含層出土土器 (21)

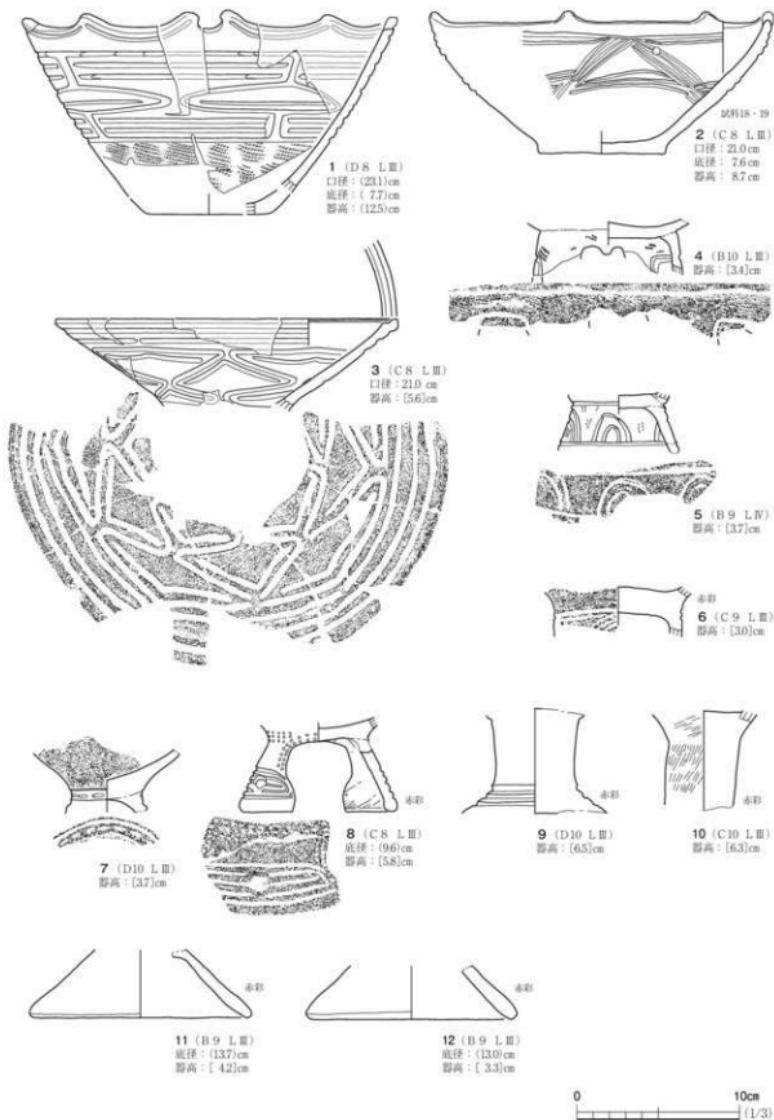


図50 遺物包含層出土土器 (22)

形である。文様は側面部では四字文が、天井部では平行沈線文によりユニオンジャック状文が施されている。4・5・7はつまみ部が欠損し、側面部のみの資料である。5の側面部の下端では三角形状のスリットが入っている。4には平行沈線文とRL繩文が施されている。5～7では磨消繩文が施され、5・6は幅の広い沈線で、7は幅の狭い沈線で区画されている。

d 壺(図51-8・9、写真31) 8は口縁部の資料である。文様は口唇部に刻みが施され、さらに口縁部から頸部にかけては、矢羽根状の平行沈線文が施されているが、さらに文様の間を磨り消して無文帯としている。9の器形は体部が球形をなし、頸部から口縁部に向かって直立し口縁部で外反する。文様は口縁部では多条の平行沈線文が、頸部から体部上半にかけては多条の平行沈線文と三角形文が施されている。この資料は、器面の磨減が著しい。

(3) 時期不明の土器(図52～55、写真31～33)

ここでは器形が不明な底部資料及びミニチュア土器を一括した。

① 底 部(図52～54、図55-1～6、写真31・32)

図52-14、図53-9～11については、底部外面の圧痕レプリカを作製した(付章2第3節参照)。図52-1～4・7は沈線文が施されている。図52-5・6には撚糸文が施され、5には沈線が6の底部には2条の沈線が施されている。

図52-8～17、図53、図54-1～3は底部外面にみられる編組製品の圧痕を図示した。図52-8～17、図53-1～8・11・14はとびござ目編みの圧痕である。推定した編み方は、図52-8～17、図53-2～4・6・8は1本越え2本潜り1本送り、図53-1・5・7？は1本越え3本潜り1本送りである。図53-12はござ目編みで、推定した編み方は1本越え1本潜り1本送りである。

図53-9・13は木目ござ目編みの圧痕、図53-10は連続樹網代編みととびござ目編みの圧痕で、編組技法を変えた編組製品の圧痕である。さらに、とびござ目編み部分の編み目が、外側に向かって狭くなることから、籠の破片を使用していた可能性がある。図53-14、図55-5では、とびござ目編みの圧痕を磨り消している。

図54-1・2は網代編みの圧痕で、推定した編み方は1では2本越え2本潜り1本送り、2は3本越え3本潜り1本送り、3は不規則な網代編みであるが樹網代編みの可能性が高い。なお、図52-17、図53-5、図54-1・8、図55-2の内面には焦げ面がみられる。

図54-5～7は木葉痕、図54-8～11、図55-1～4・6は笹葉敷である。

② ミニチュア土器(図55-7～27、写真33)

7は口縁部が欠損する資料で、器形は体部が球形をなす。体部上半には多条の平行沈線文が施されている。8・9は小皿状の器形である。8は手捏ねで作られ、9は底部の木葉痕の上にRL繩文を施している。10は波状口縁で、条痕が施されている。補修孔が2箇所みられる。11は丸底の底部で、外面には楕円形の窪みがみられる。12・13・15～18は高杯で、12・13は杯部と脚部との境の資料で、15～18は脚部の資料である。18にはRL繩文が施されている。14・19・22～26は底部資料である。14・25の底部外面には笹葉敷とみられる圧痕がある。24・26はRL繩文が、25は撚

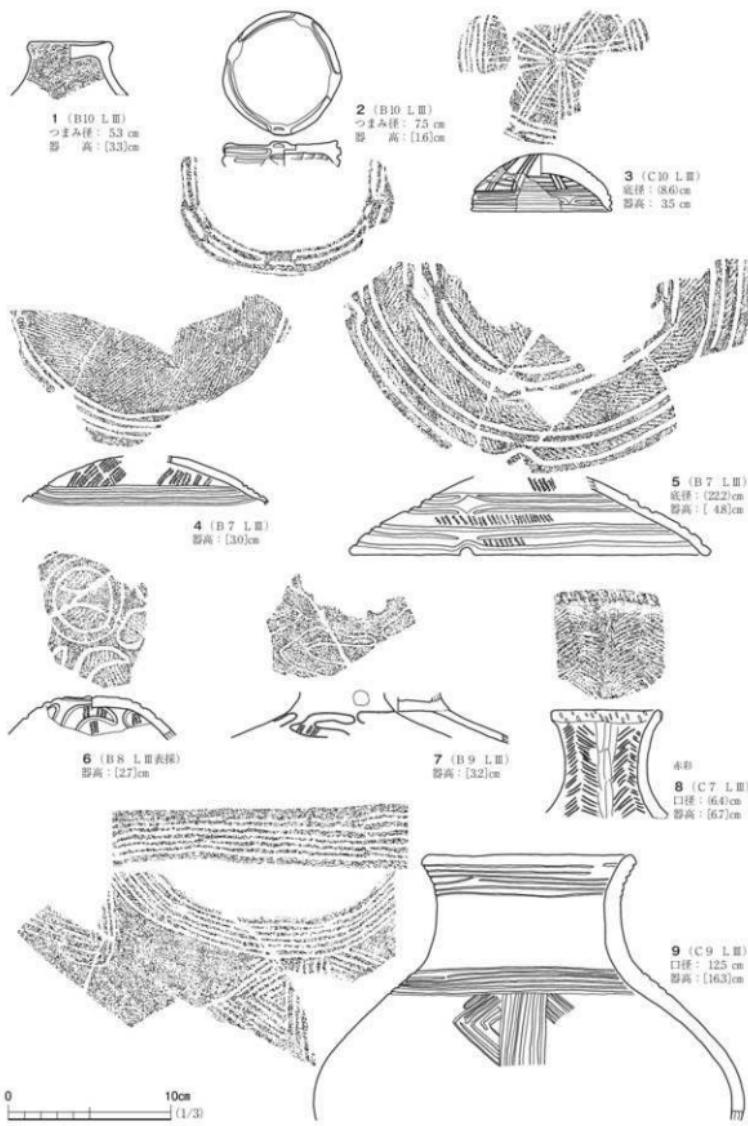


図51 遺物包含層出土土器 (23)

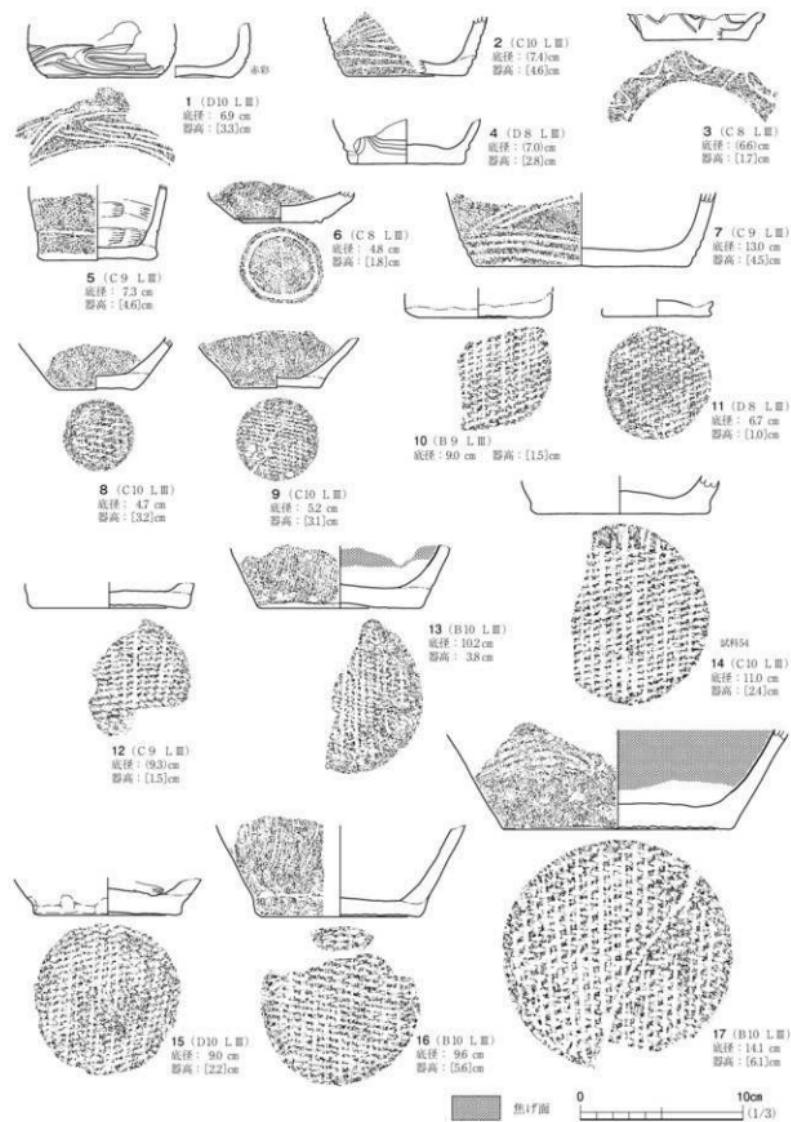


図52 遺物包含層出土土器 (24)

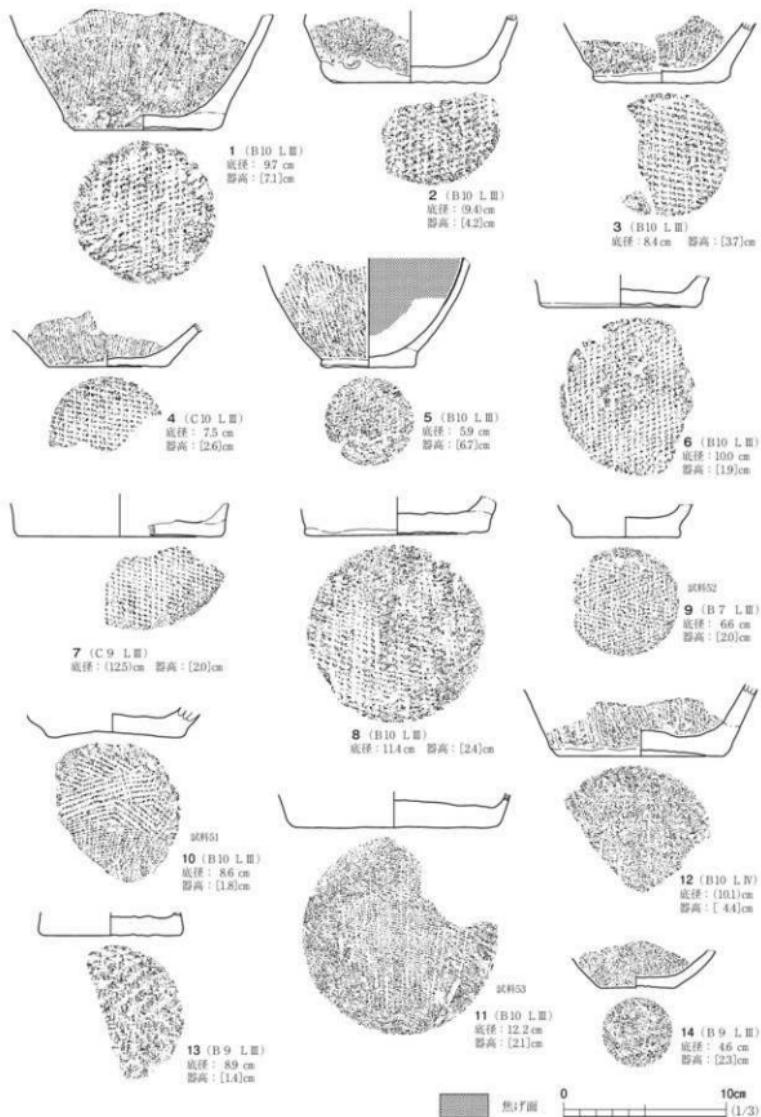


図53 遺物包含層出土土器 (25)

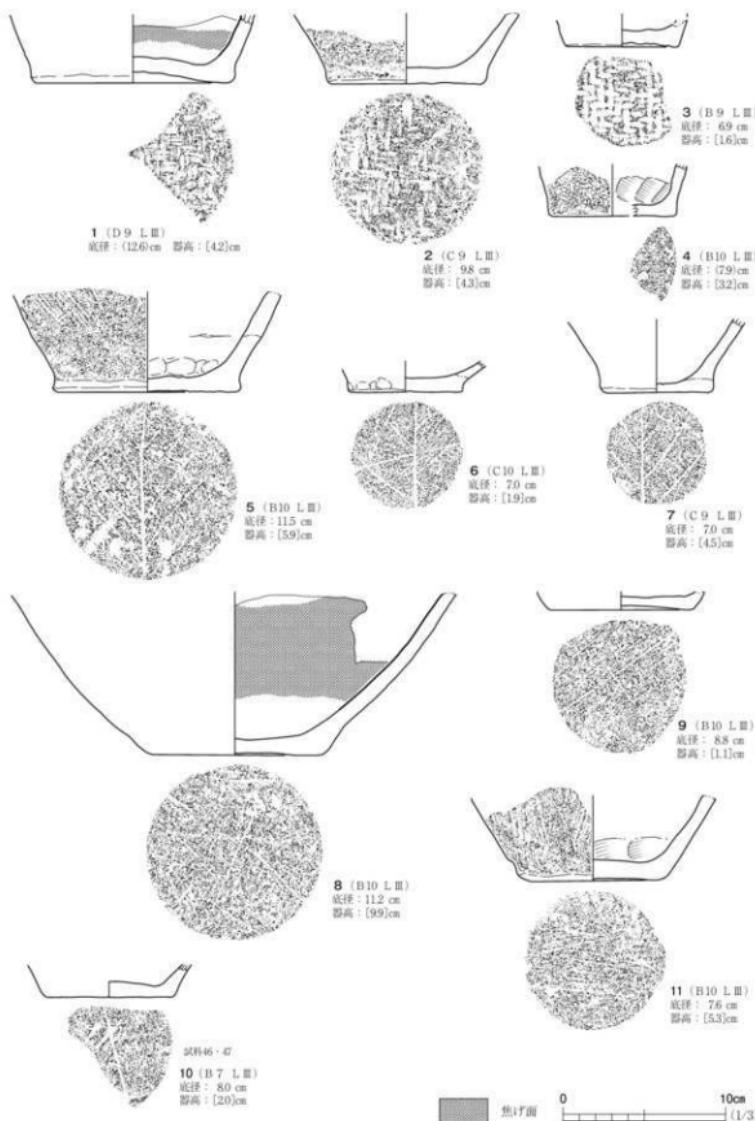


図54 遺物包含層出土土器 (26)

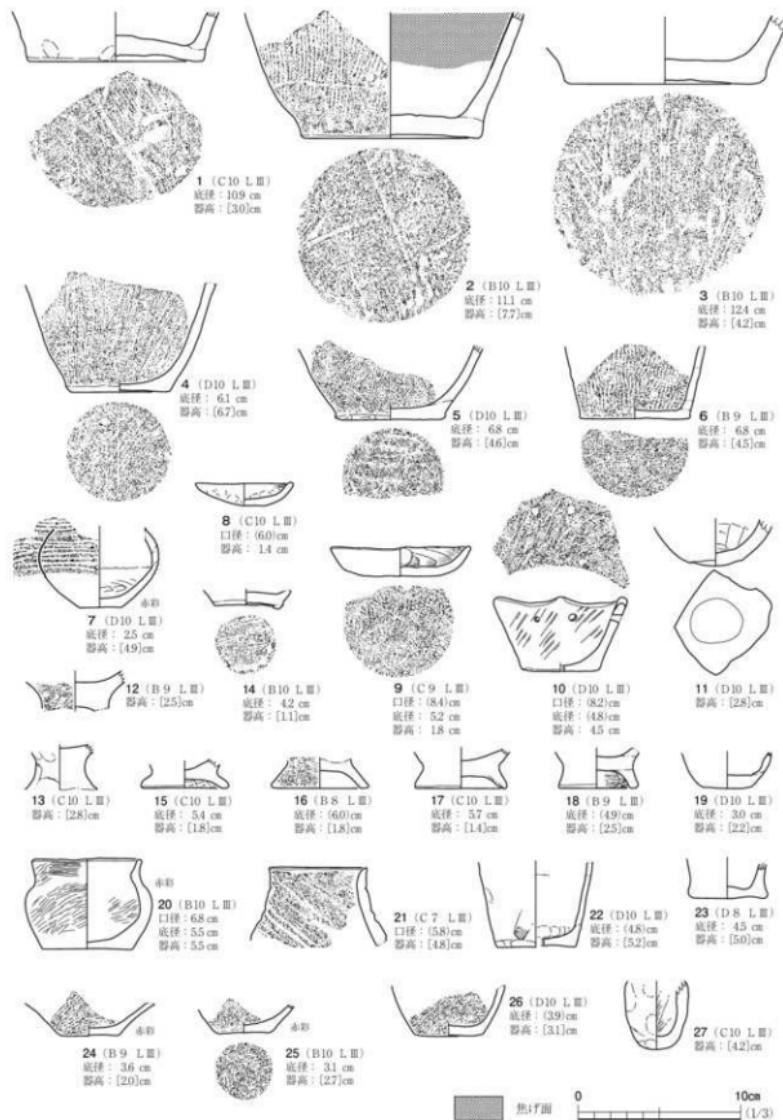


図55 遺物包含層出土土器 (27)

糸文が施されている。20の器形は、体部が球形をなし口縁部は外傾気味に立ち上がる。内外面ともにミガキ調整が施されている。なお、口縁部内面に赤彩がみられる。27は8と同様に手捏ねで作られている。

2 破片土器(図56~80、写真33~40)

ここでは破片土器について、記述をしてゆく。破片土器についても、精製土器・半精製土器・粗製土器・弥生土器に区分した。

(1) 繩文土器

① 精製土器(図56~64、図65~1~14、写真33~35)

図56~62、図63~1~3、図65~10~12は浅鉢である。図56~57、図60~1は浮線網状文が施されたものである。図56~1~3・5・6・8・9、図57~2~4~6~8~12の口縁部内面には、沈線が1条施されている。さらに、図56~12、図57~4~7の口唇部にも沈線が施されている。図57~8、図58~10~11~14~18は波状口縁である。

図58~1~7~9~14~16~17は平行沈線文が施され、図58~8~15~18は匹字文が施されている。図58~4は口縁部に突起がみられる。図58~13は内外面に赤彩が施されている。図58~18には匹字文に加えて、連続刺突文が施され、口縁部の突起に刻みが施されている。図58~3~7~11~14の口縁部には刻みが施されている。

図59~1~2~4~6~7~10~11~13~14には浮線枠線文が施されている。図59~2~4~6~7~11~13~15の口縁部内面には、沈線が1条施されている。図59~4~7~12~14は波状口縁で、12~14の突起部には刻みと刺突文が施されている。

図60~3~4~14~18には浮線レンズ状文が施されている。図60~2~10~11~13には変形匹字文と思われる文様が、図60~5~6~8~9~12は匹字文が上下2段に施されている。図60~7~19、図62~2~4~6~9~11は図34~2に、図60~20~21は図34~5のような文様構成となる。図60~9~10~20には口縁部内面に沈線が1条、図60~7~14の口唇部に沈線が施されている。図60~4~5~17~19は波状口縁である。

図61~1~4~13~16~17、図62~1~3~12には匹字文が、図61~2~3、図62~13~16、図63~1~3には変形工字文が施されている。図61~14~15には浮線楕円形文が施され、14は細長く、15は2条となっている。図61~1~2~5~11~12の口縁部内面には沈線が1条施され、図61~3の口唇部には沈線が施されている。図61~10~12~16は波状口縁であり、12の突起部には刻みが施されている。

図62~5~7~8は入組工字文が施されている。図63~6は無文である。図63~2~3には変形工字文と匹字文が施され、図62~1~7~9の口縁部内面には沈線が1条施され、図62~8~15の口唇部には沈線が施されている。図62~1~3~5~8~14は波状口縁であるが、5~8~14の突起部には刻みが施されている。

図65~10は波状口縁で、口縁部外面に4条の、内面には1条の沈線が施されている。図65~11

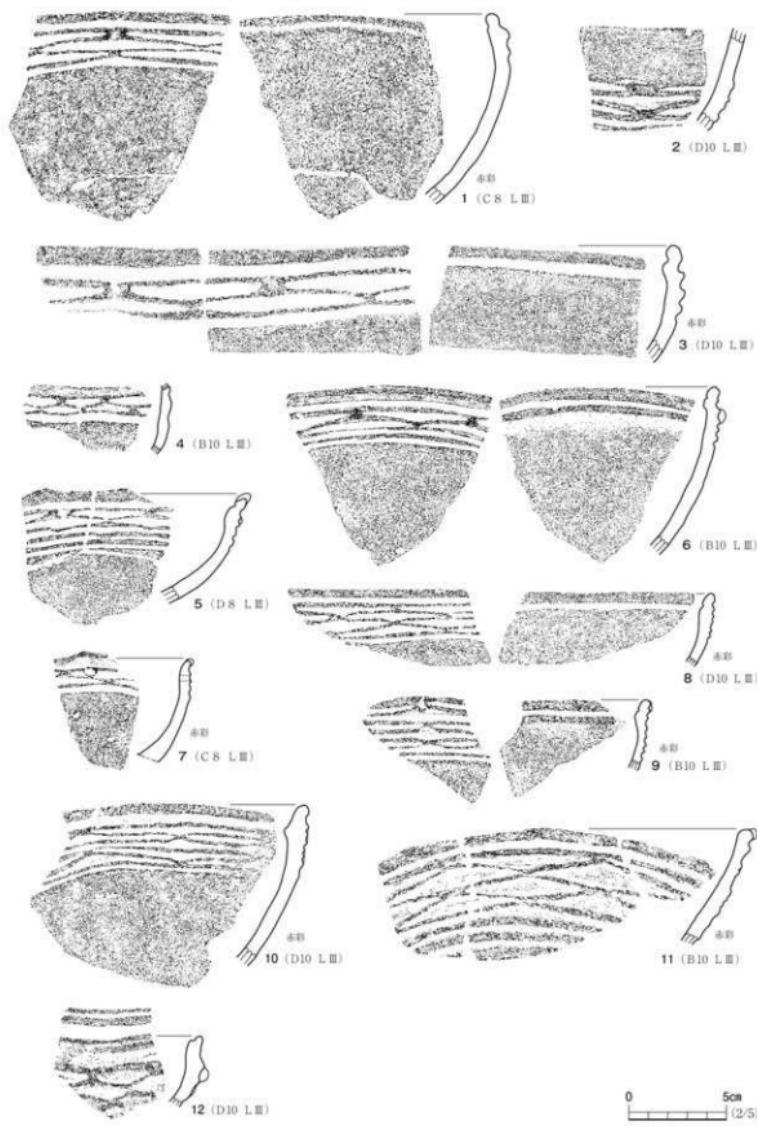


図56 遺物包含層出土土器 (28)

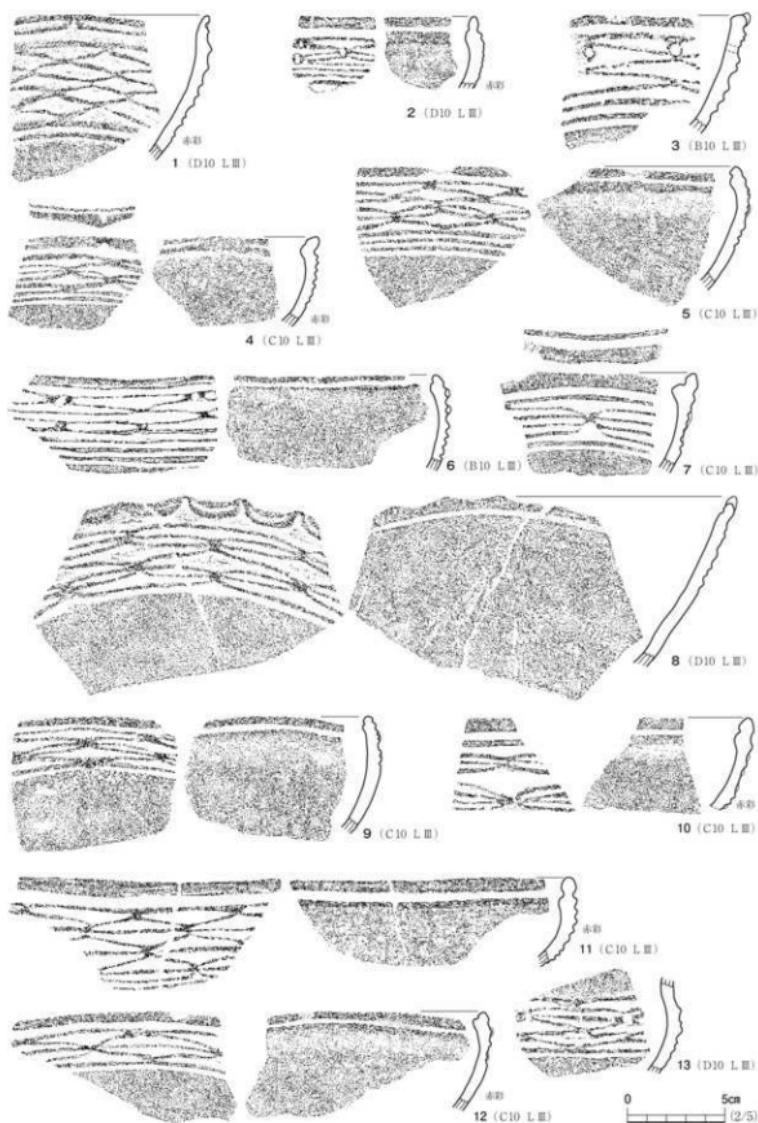


図57 遺物包含層出土土器 (29)

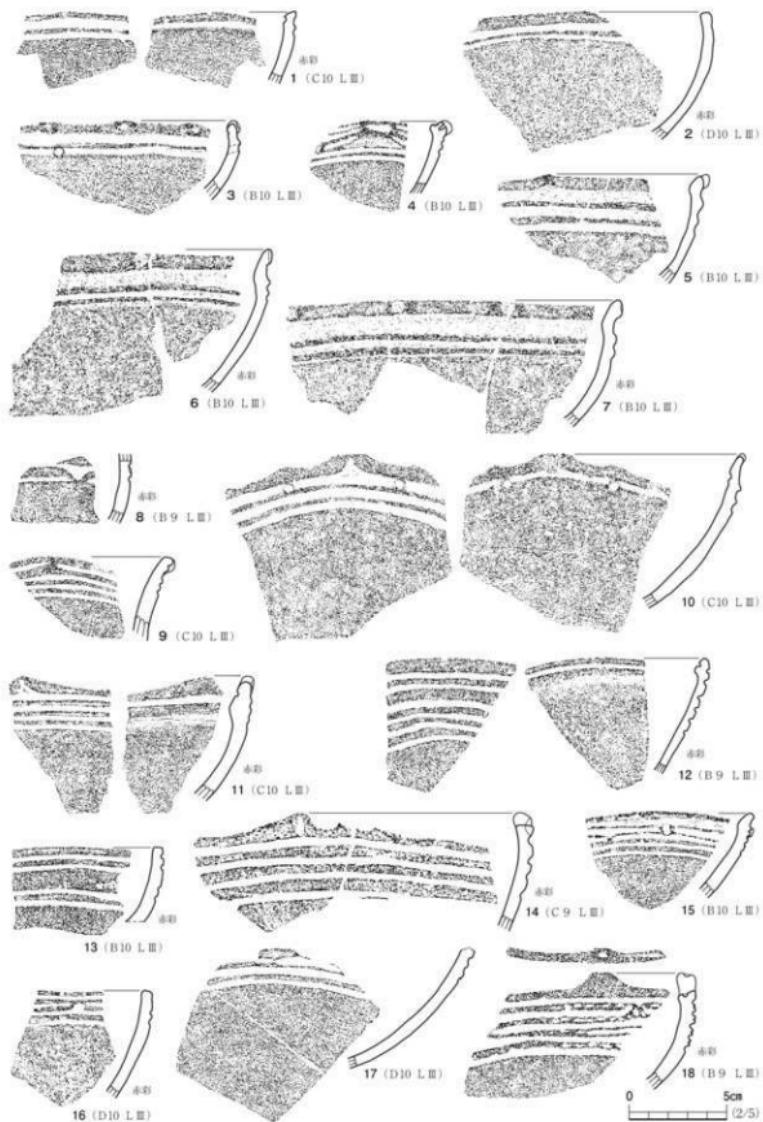


図58 遺物包含層出土土器 (30)

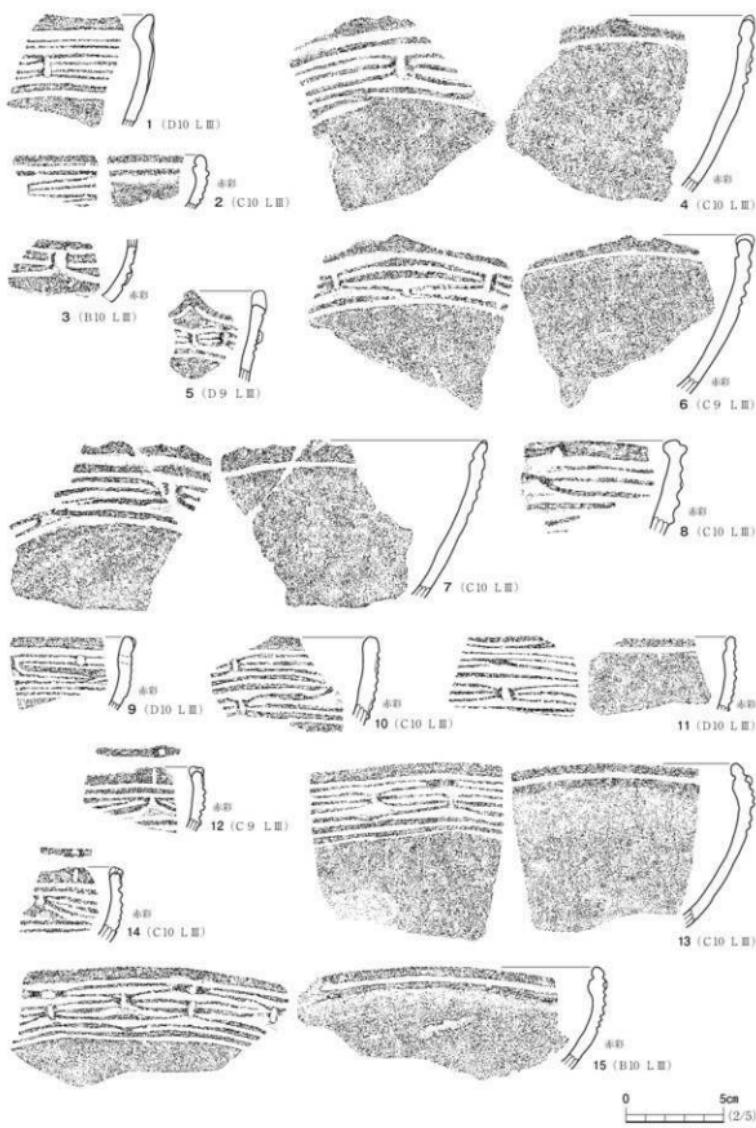


図59 遺物包含層出土土器 (31)

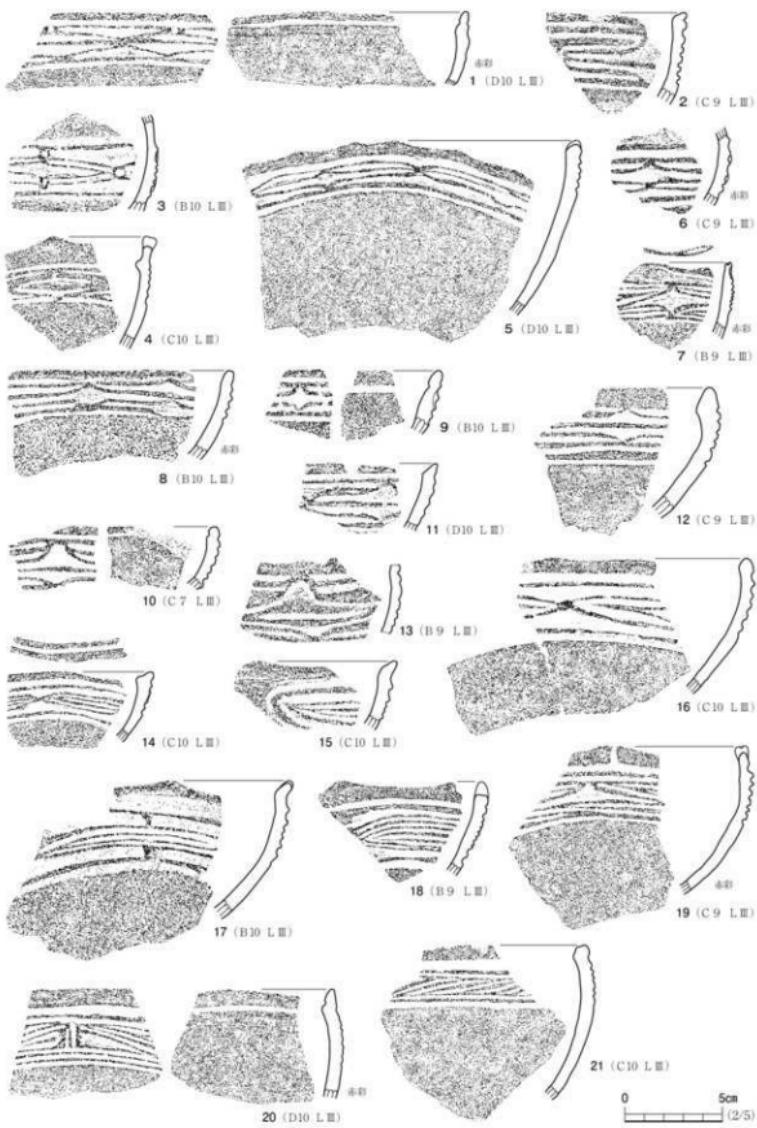


図60 遺物包含層出土土器 (32)

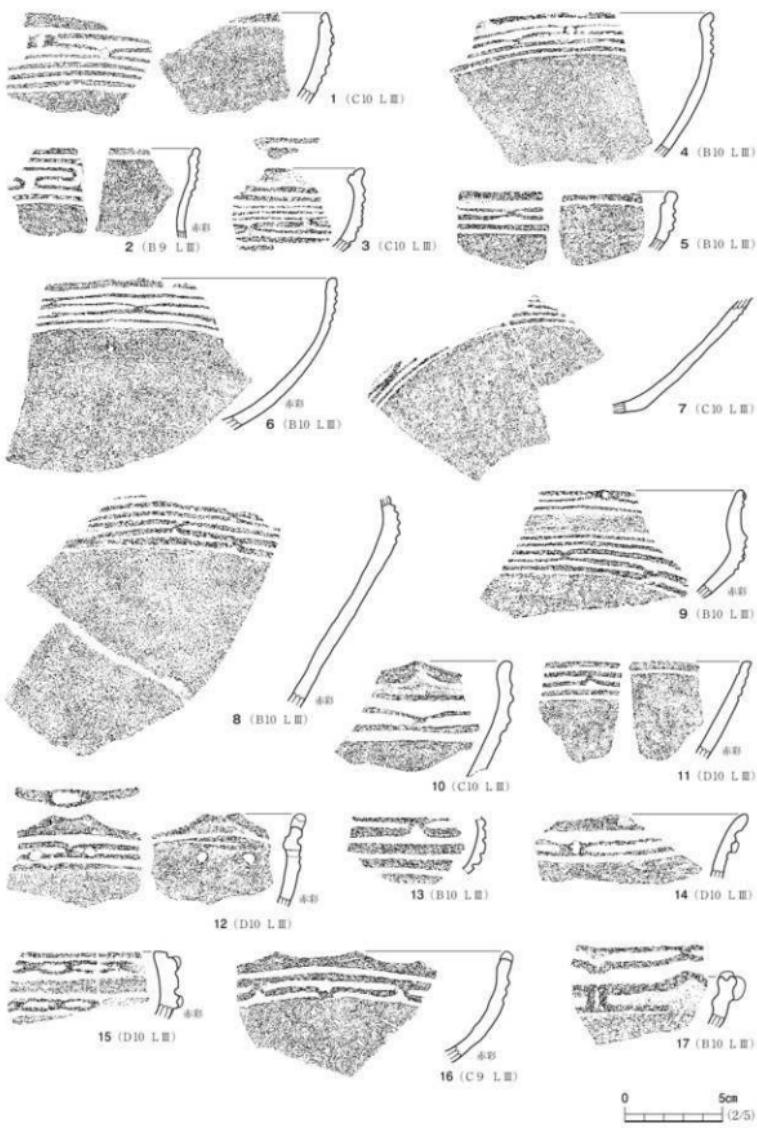


図61 遺物包含層出土土器 (33)

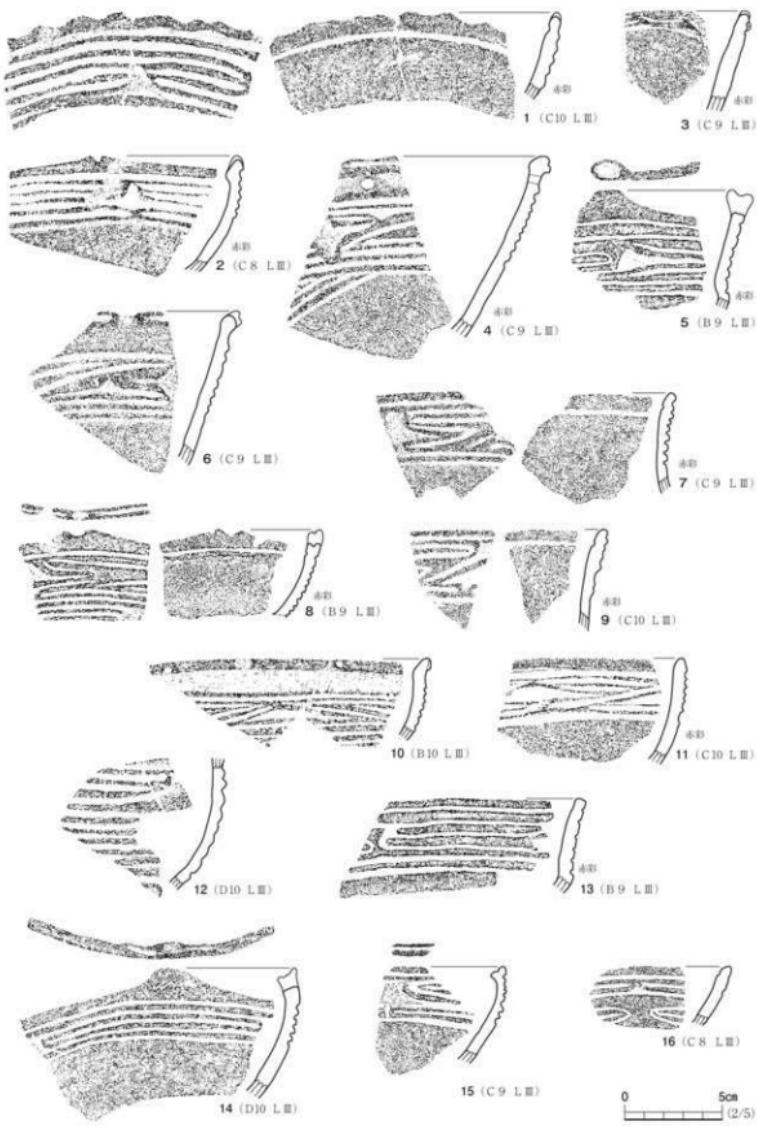


図62 遺物包含層出土土器 (34)

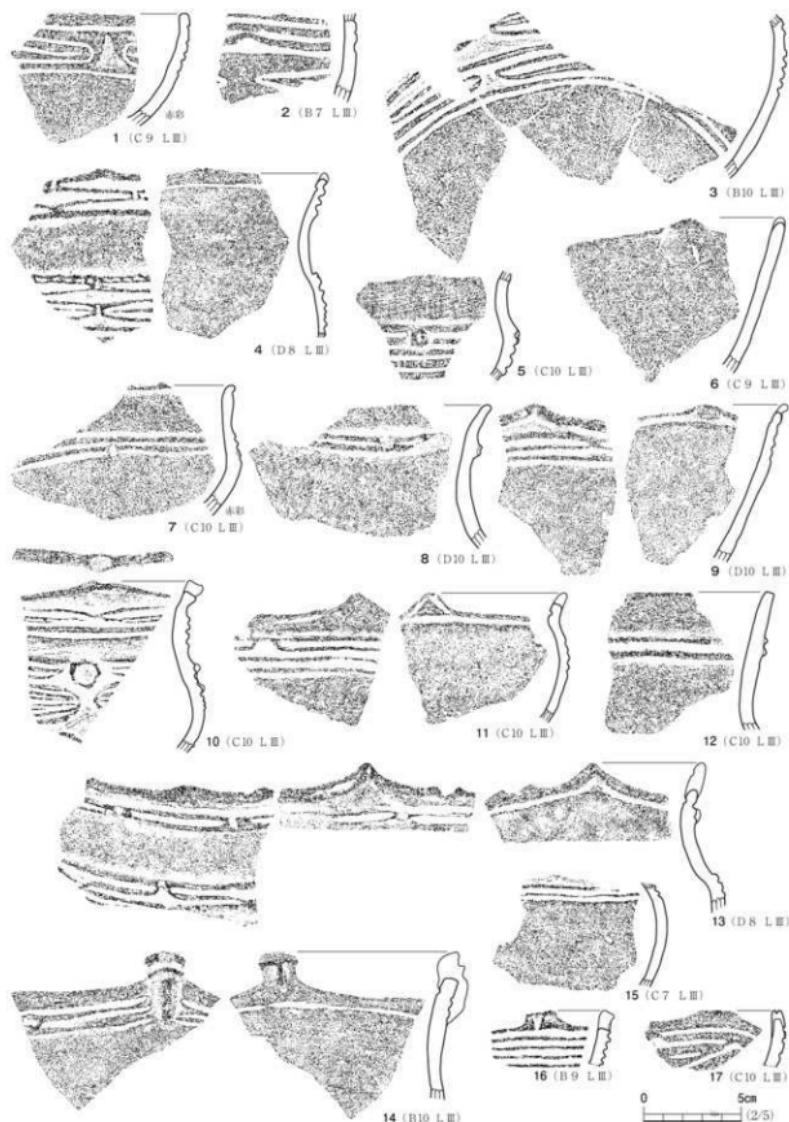


図63 遺物包含層出土土器 (35)

は波状口縁で、匹字文が2段施されている。図65-12は変形工字文が施され、12は口縁部内面に沈線が1条施されている。

図63-4～14・16・17、図64-1～11、図65-13・14は鉢である。図63-4・9・10は波状口縁である。4には浮線枠状文・連続刺突文などが施され、口縁部内面に沈線が1条施されている。9には匹字文が施され、口縁部内面に沈線が1条施されている。10には匹字文・多重横円形文・ボタン状の貼付文などが施され、突起部に窪みがみられる。図63-5・16、図64-1・5・9・11には平行沈線文が施され、このうち図63-5、図64-9には、刻みのある貼瘤が施されている。図63-8・12では浮線直線文が施されている。

図63-11・13・16・17、図64-5・6は波状口縁で、図63-14には把手状突起が施されている。図63-7・11・13・14には匹字文が、図63-17、図65-13・14には変形工字文が、図64-2には浮線横円形文が施されている。図63-11・13・14、図64-2には口縁部内面に沈線が1条施され、11の突起部では三角形状に沈線が施されている。なお、図64-3の文様は細片のため不明である。

図64-4には入組文が、口縁部内面に沈線が1条施されている。図63-6、図64-6～8・10は無文である。7・8は屈曲した器形で、10は底部である。図64-12は高杯の脚部で、平行沈線文が施されている。図63-15、図64-13～24、図65-1～9は壹である。図63-15は体部上半、図64-13～15、図65-1・8・9は頸部、それ以外は口縁部である。図64-13には浮線網状文が、図64-14・15には匹字文が、図63-15、図64-16・22・23、図65-1には平行沈線文が、65-5～7には隆線による三角形文が施されている。図64-17～21、図65-2～4は、無文である。図65-9は方形状沈線文が施されている。

図64-16・17・19～21、図65-2～5は波状口縁である。これらのうち、図64-16・17・20、図65-2の突起部には、刻みが施されている。図64-16・19の口縁部内面には沈線が1条施され、16・17・21の口唇部にも沈線が施されている。図64-24には注口のような突起があり、突起には沈線が施されている。

② 半精製土器(図65-15～21、図66～71、写真35・36)

図65-15～21は浅鉢で、図66・67、図68-1～13は鉢である。図65-15は雲形文が、図65-16に簡略化した雲形文、図65-17・18には連続刺突文が施され、15～17の地文にはR L 繩文が施される。図65-19・21には匹字文が施され、19の口縁部と21の体部上半にR L 繩文が施される。図65-20・21の器形は直線的に大きく開く。20の頸部には、刻みを有する突起部がある。撲糸文を地文とし突起部の左右と下方に沈線を施している。

図66-1・2には匹字文が施され、さらにR L 繩文が1では地文として、2では体部下半に施される。図66-3の体部上半には条痕が施される。図66-4・5・9は匹字文と多条の平行沈線文が施されるが、4は器面の磨滅により地文の有無は不明である。図66-6・8・10・12、図67-5・8・9が浮線網状文と多条の平行沈線文が施されている。6～11は波状口縁で、6～11の口

縁部内面には沈線が1条施されている。さらに、9の突起部には三角形状の陰刻が施されている。5~11の地文はR L繩文で、12がL R繩文である。

図66-7・11、図67-1~9には浮線網状文が施されている。そのなかでも図66-7・11、図67-1・3・4には浮線楕円形文が、図67-7には矢羽根状沈線文が加わっている。地文は図67-2がL R繩文、図67-1・3~5がR L繩文、図67-7が撲糸文、図67-8・9が条痕である。図67-1・5・8が波状口縁で、1・3~5の口縁部内面には沈線が1条施されている。

図67-11・12、図68-6には浮線楕円形文が施され、図67-11は2段に、図67-12、図68-6は1段に配置されている。図67-10、図68-1~5には沈線文、図67-13、図68-8~10には匹字文が、図68-7には浮線網状文が施されている。図68-3は口唇部にR L繩文、口縁部に沈線文が施されている。判別できた地文は図67-10・12、図68-1がR L繩文、図68-4が撲糸文、図68-6・10が条痕である。図67-10・11、図68-1・2・5・9は波状口縁で、図67-11~13、図68-1・3・7は口縁部内面に沈線が1条施されている。

図68-11~15、図69-71は深鉢である。図68-11・12は同一個体で、口唇部にR L繩文、口縁部に浮線網状文、体部に条痕が施されている。図69-4は口唇部にR L繩文、口縁部に浮線楕円形文が施されている。図69-1~3・5・11は浮線網状文が、図68-13~15、図69-6・8~10は匹字文が、図69-7は細長い浮線楕円形文が施されている。判別できた地文は図68-13・14、図69-3・7がR L繩文、図69-2・6・8・9が撲糸文で、図69-5には条痕が施されている。図68-13~15、図69-3~8・11は波状口縁で、図68-11・13~15、図69-3・6・7・11の口縁部内面には沈線が1条施されている。

図69-12・図70-1・4は条痕を地文に多条の平行沈線文が施され、図69-12には浮線長方形文が加えられている。図69-13・15・17・18には細長い浮線楕円形文が施されているが、15には多条の平行沈線文が、17・18には条痕が施されている。図69-16は匹字文・条痕が、図69-19には2段の匹字文・条痕が、図70-5には2段の浮線楕円形文・R L繩文が施されている。図69-13・19、図70-4は波状口縁で、図69-14・19の口縁部内面に沈線が1条施されている。

図70-6にはR L繩文を地文として多条の平行沈線文が施されている。さらに、外面には炭化物の付着がみられる。図70-2・7・12には平行沈線文と条痕が、図70-10には条痕を地文として、多条の平行沈線文が施されている。図70-9は内溝ある口縁部で、平行沈線文が施されている。図70-11はR L繩文を地文として、沈線文と突起が、図70-13には匹字文が施されている。図70-6・7・10・11・13は波状口縁であるが、13の突起部には内外面と先端に刻みが施されている。10・13の口縁部内面には、沈線が1条施されている。

図71-3・13は匹字文・矢羽根状沈線文が施されている。図71-1・2・4・7・16・17・24・25・27は、条痕を地文としているもので、4には多条の平行沈線文、1・7・17は矢羽根状沈線文、16には平行沈線文・矢羽根状沈線文、24には平行沈線文、25にはユニオンジャック状沈線文が、27には平行沈線文と連続刺突文が施されている。

図71-5・6・8~11・12・15には矢羽根状沈線文が、図71-18にはL R 繩文を地文とし四字文・多条の平行沈線文が施されている。図71-19には多条の平行沈線文が、図71-20には平行沈線と沈線間を斜行する沈線が沈線間に充填されている。図71-21の体部には条痕が、図71-22には口縁部に沈線が巡り、体部には条痕が施されている。図71-23には把手状突起がみられるが、突起の内外面には隆線が、先端には窪みが施されている。図71-26には浮線網状文と撚糸文が施されている。

図71-1・2・4・5・15・19・21・22・24は波状口縁であるが、1・2・4・24には突起部に刻みが施されている。3・5の口縁部内面に沈線が1条施されている。

③ 粗製土器(図72~74、写真36・37)

図72-1~11の口縁部は折り返されている。口縁部の形状は、1・7・8・10・11は直立、2~6は内湾、9は内傾しながら立ち上がる。1~3・6~11には条痕が施されている。4・5にはL R 繩文が施されている。

図73-1・2の口縁部は折り返され、1は外傾しながら立ち上がる。2の口唇部には、R L 繩文が施されている。図73-3・5・13には条痕が、図73-7には結節のあるR L 繩文が施されている。図73-6・8・9は無文であるが、9の口唇部には圧痕が施されている。図73-4・18~20、図74-1~5の口唇部には指頭圧痕が施され、図73-19・20、図74-5の口縁部は折り返され、図73-4・19・20、図74-1・2・5には条痕が施されている。図73-10・14~17は磨消繩文が施される。図73-11には平行沈線文が、図73-12には条痕と沈線文が施されている。図73-5~8は波状口縁で、6・8の突起部には圧痕がみられる。

図74-6~15は、球形をなす体部から口縁部は外反しながら立ち上がる。図74-7・8・9・15・16は条痕、12は撚糸文、10・11・13にはR L 繩文が施されている。

図74-18・19には網状撚糸文が、17・28には多条の沈線文が、20・21には格子状沈線文が、23~27には、沈線もしくは平行沈線で波状文が施されている。なお、28の破断面には黒色の付着物がみられる。

(2) 弥生土器(図75~80)

図75-1~13・15・16、図76-1~11は変形工字文が施される土器である。いずれも沈線の太さは3~4mmほどである。図75-1~8・10・12・14は鉢と思われる。6・10の口縁部内面には沈線が1条施されている。8には内面にも、変形工字文が施されている。12は口縁部が内湾している。図75-9・11・13は壺で、11・13は頸部から口縁部の立ち上がりが短い。図75-4は不規則な沈線文が施されている。図75-15・16・18~21は深鉢と思われる。15・16には体部上半に変形工字文が、体部下半にR L 繩文が施されている。なお、15・16は同一個体である。17・18・19・22は磨消繩文が、21はR L 繩文を地文として沈線文が施される。17は底部資料である。20は条痕を地文として沈線文が施されている。

図76-1は深鉢と思われる。口縁端部直下の工字文はやや立体的で、外面の一部に炭化物が付

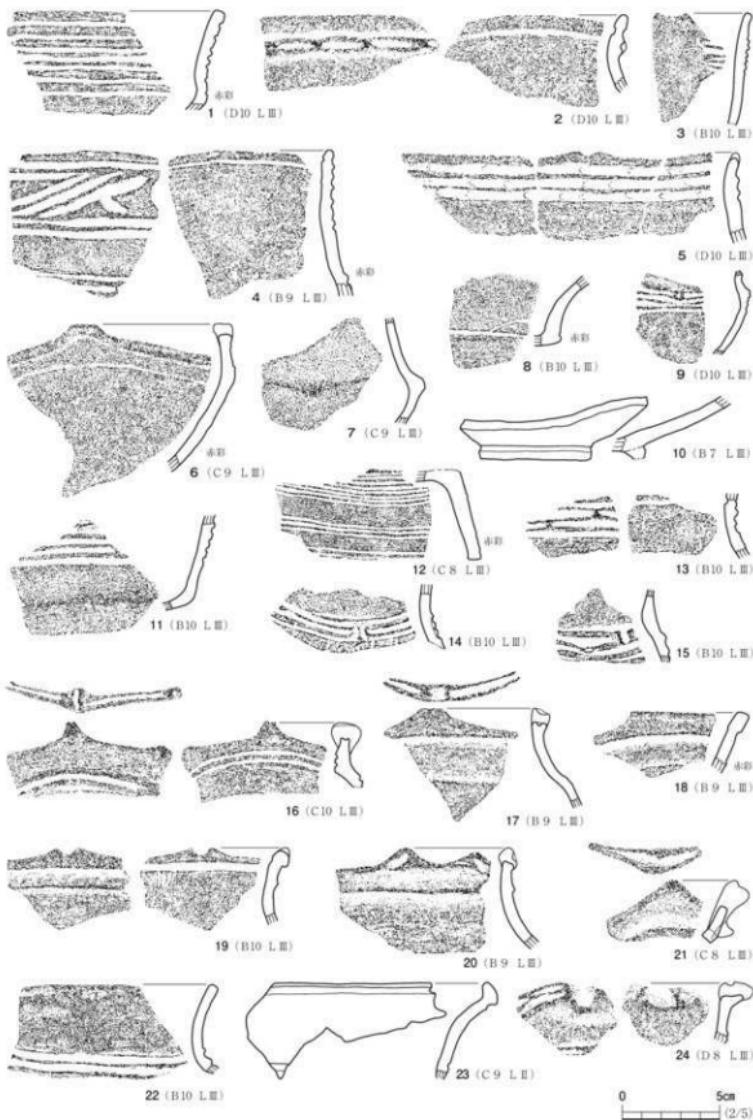
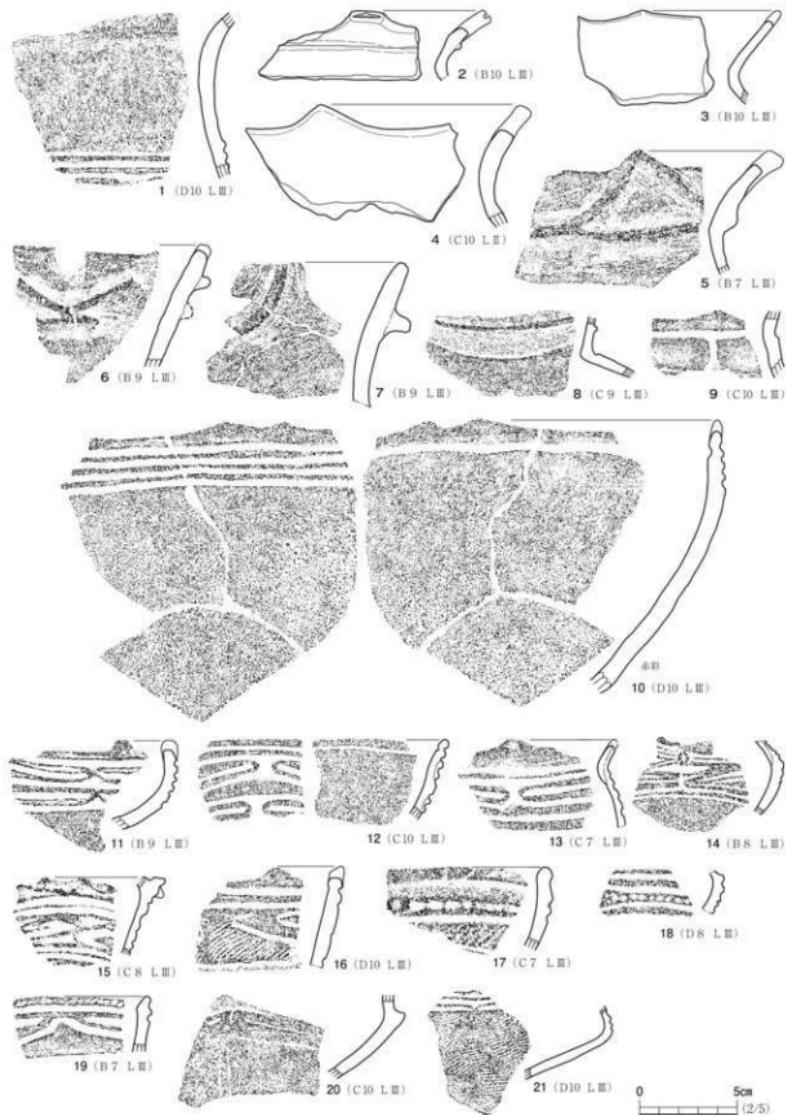


図64 遺物包含層出土土器 (36)



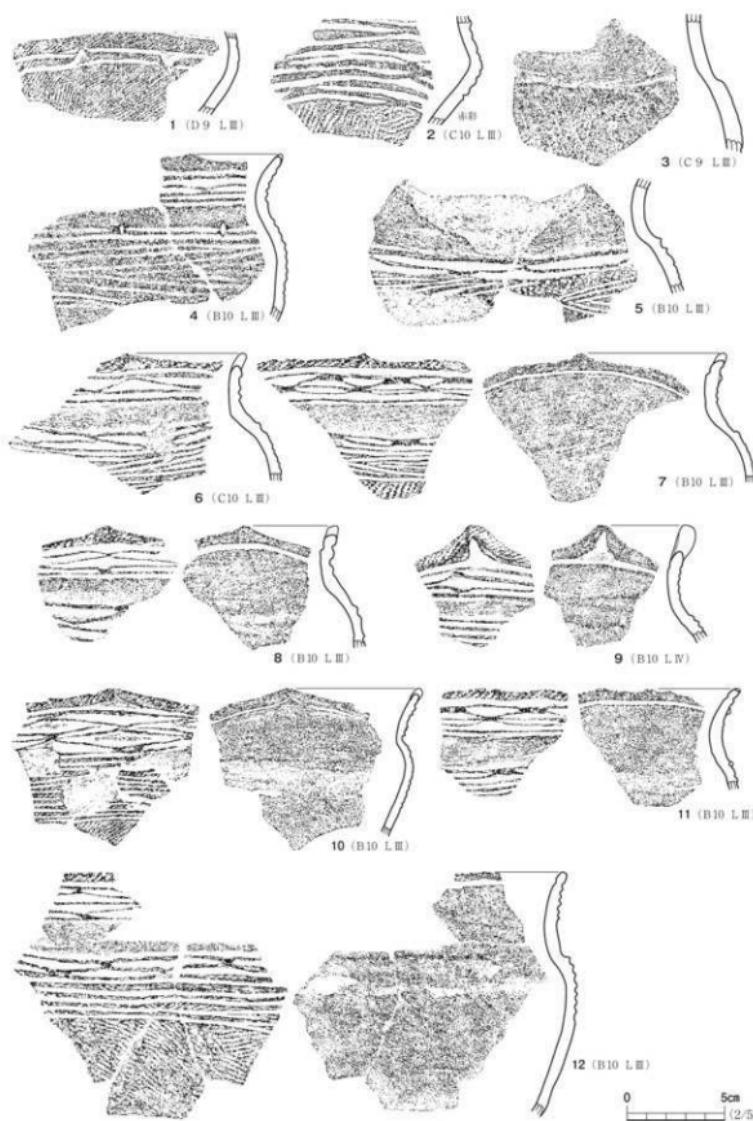


図66 遺物包含層出土土器 (38)

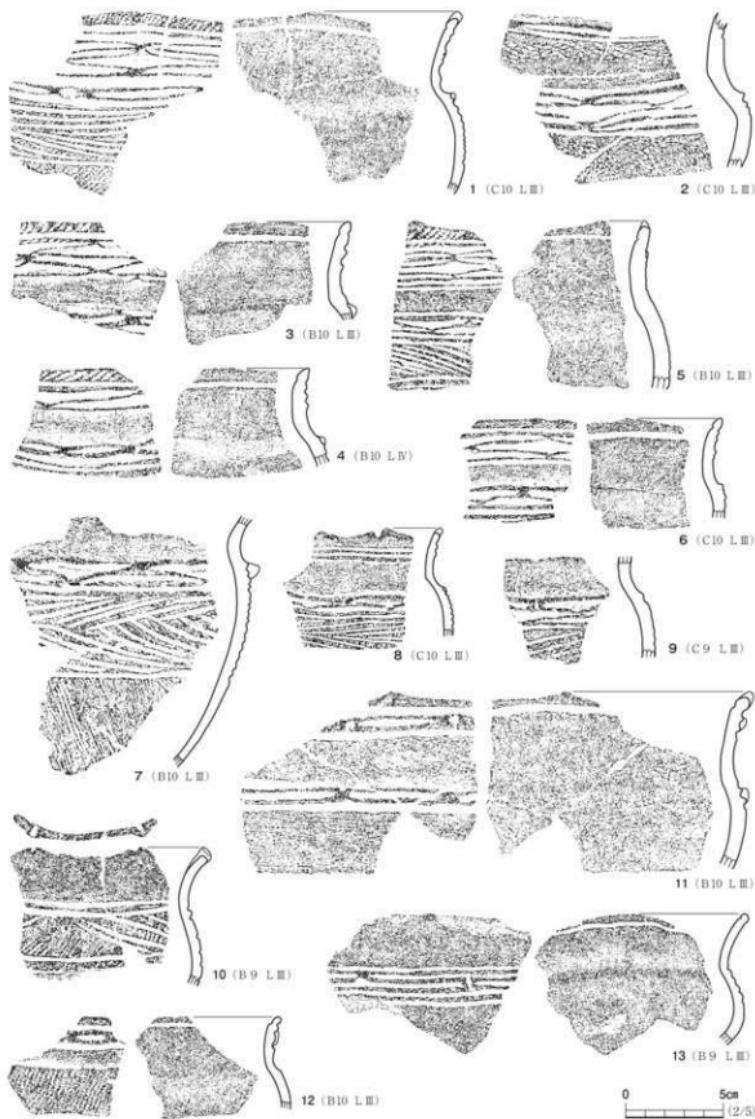


図67 遺物包含層出土土器 (39)

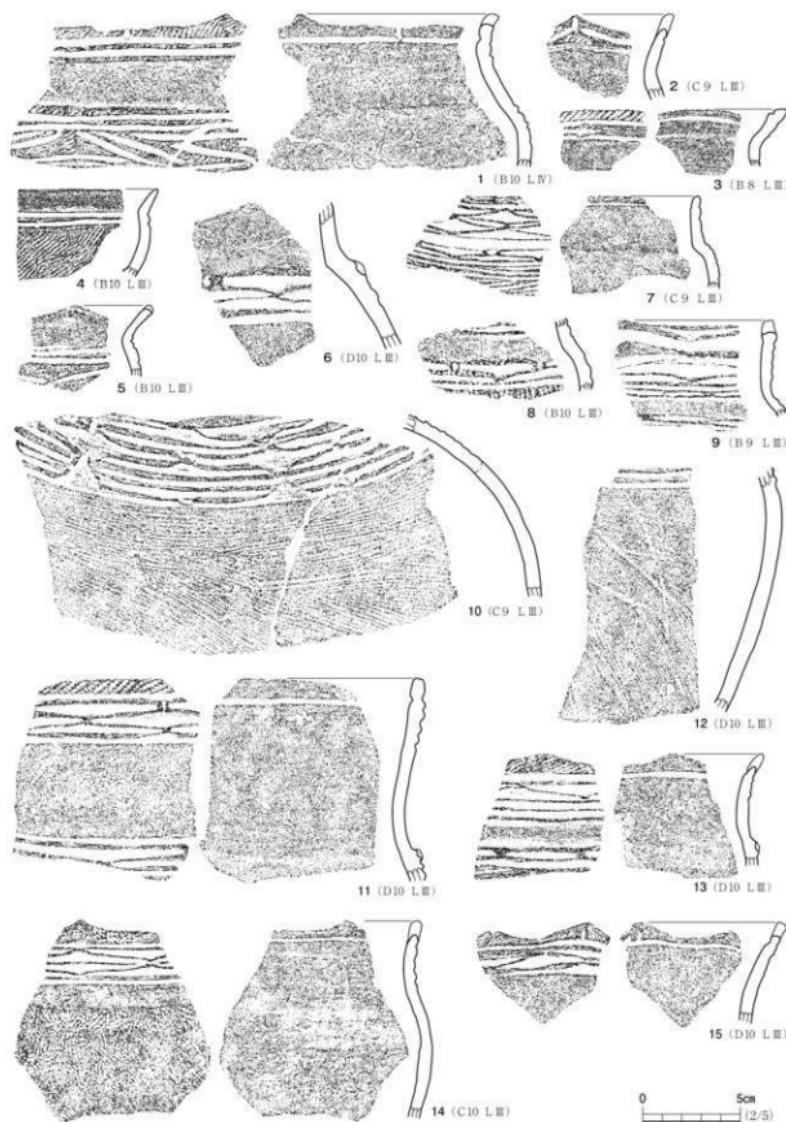


図68 遺物包含層出土土器 (40)

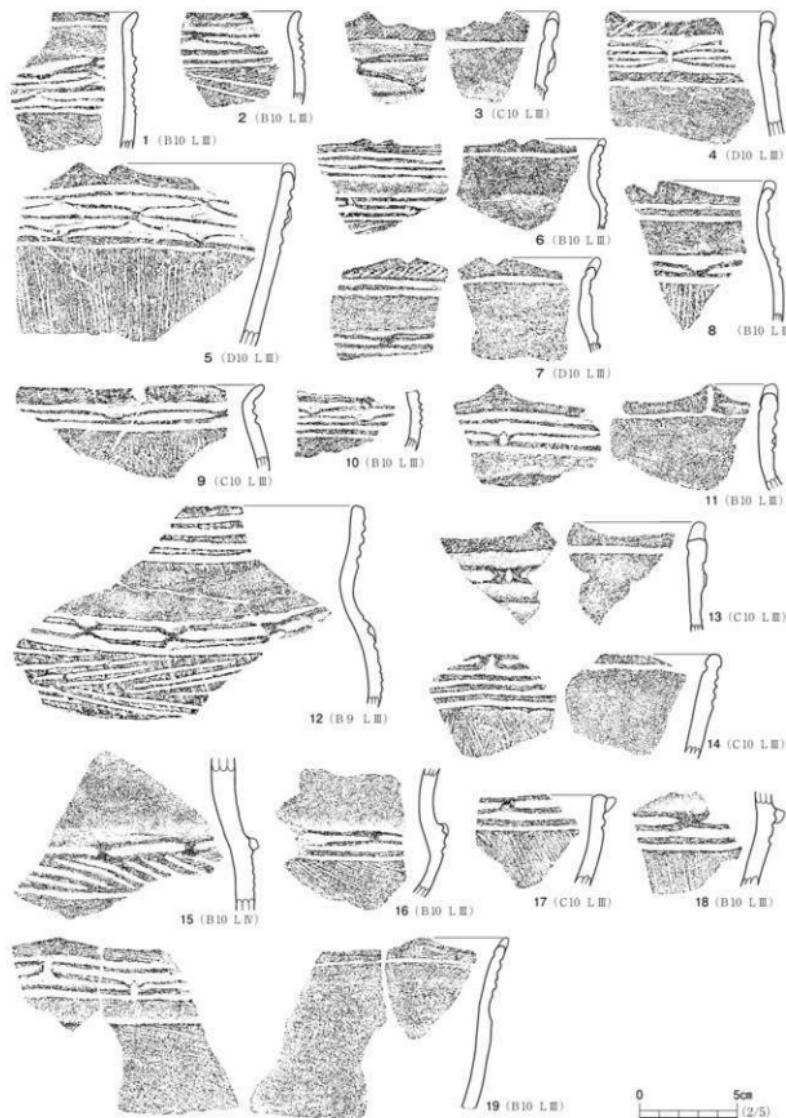


図69 遺物包含層出土土器 (41)

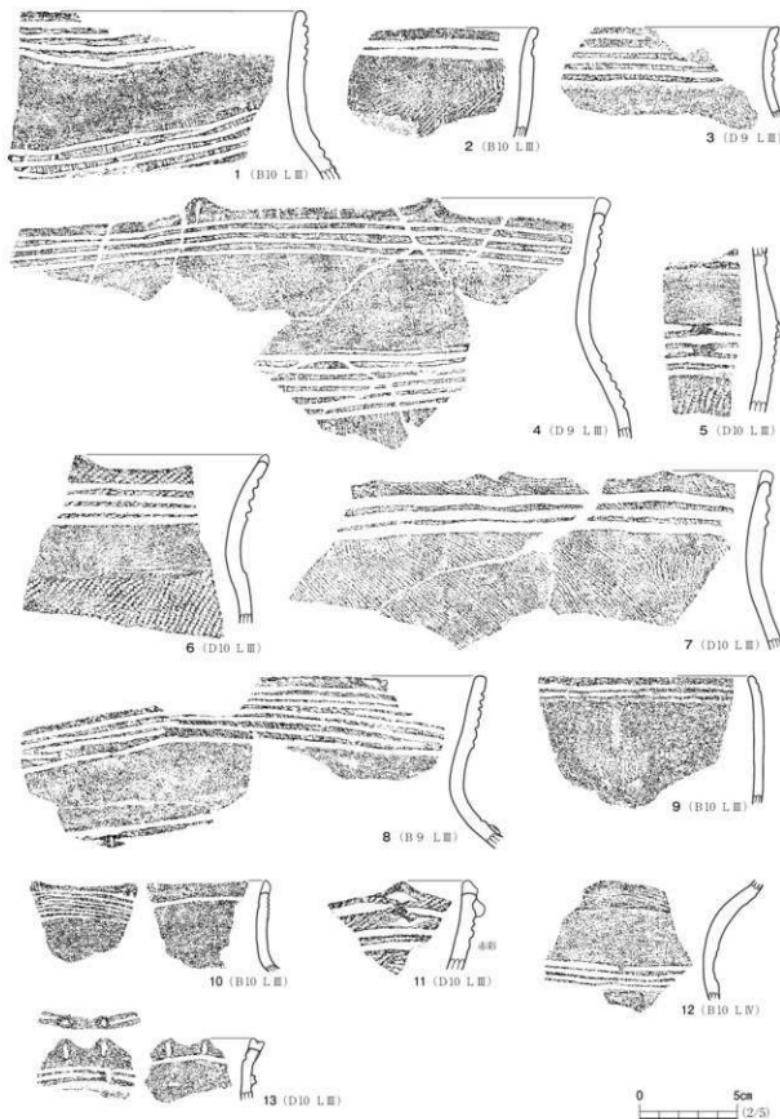


図70 遺物包含層出土土器 (42)

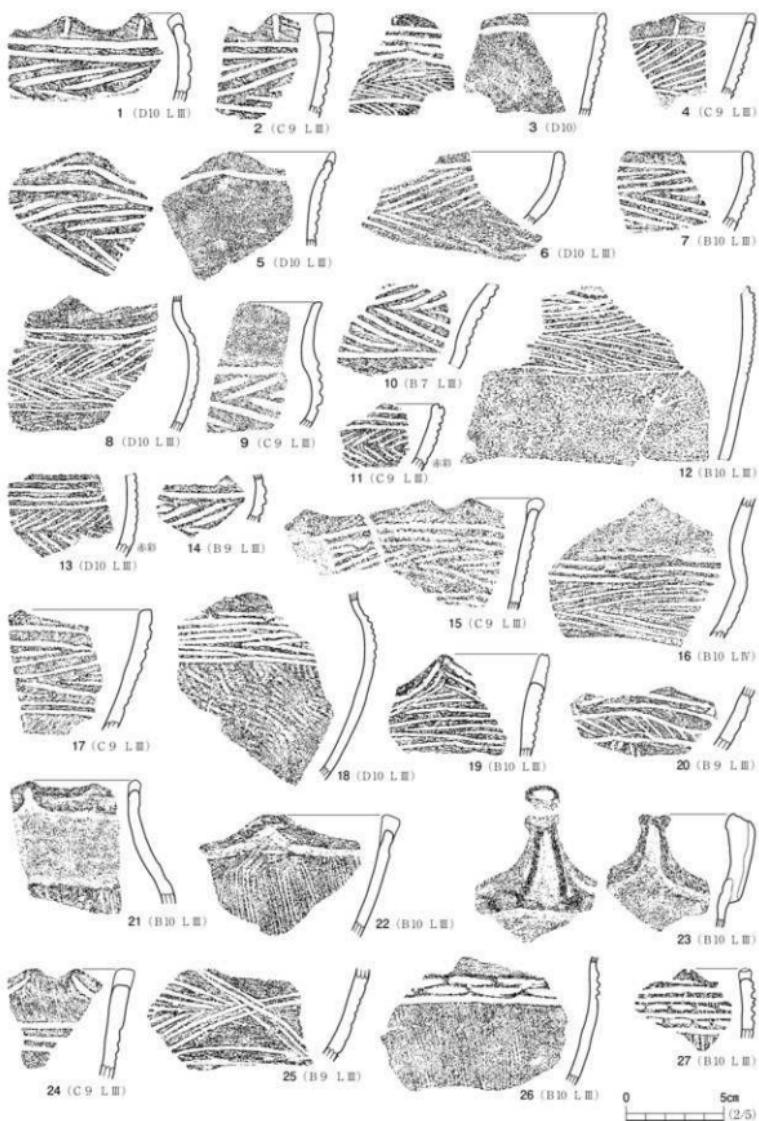


図71 遺物包含層出土土器 (43)

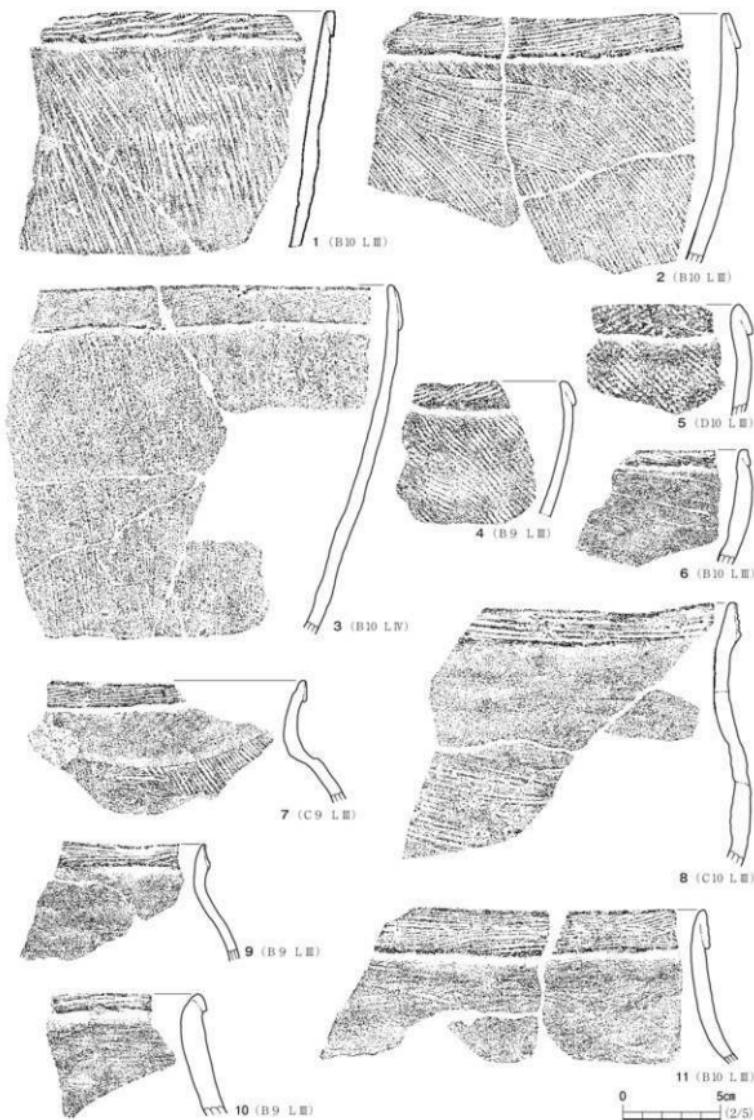


図72 遺物包含層出土土器 (44)

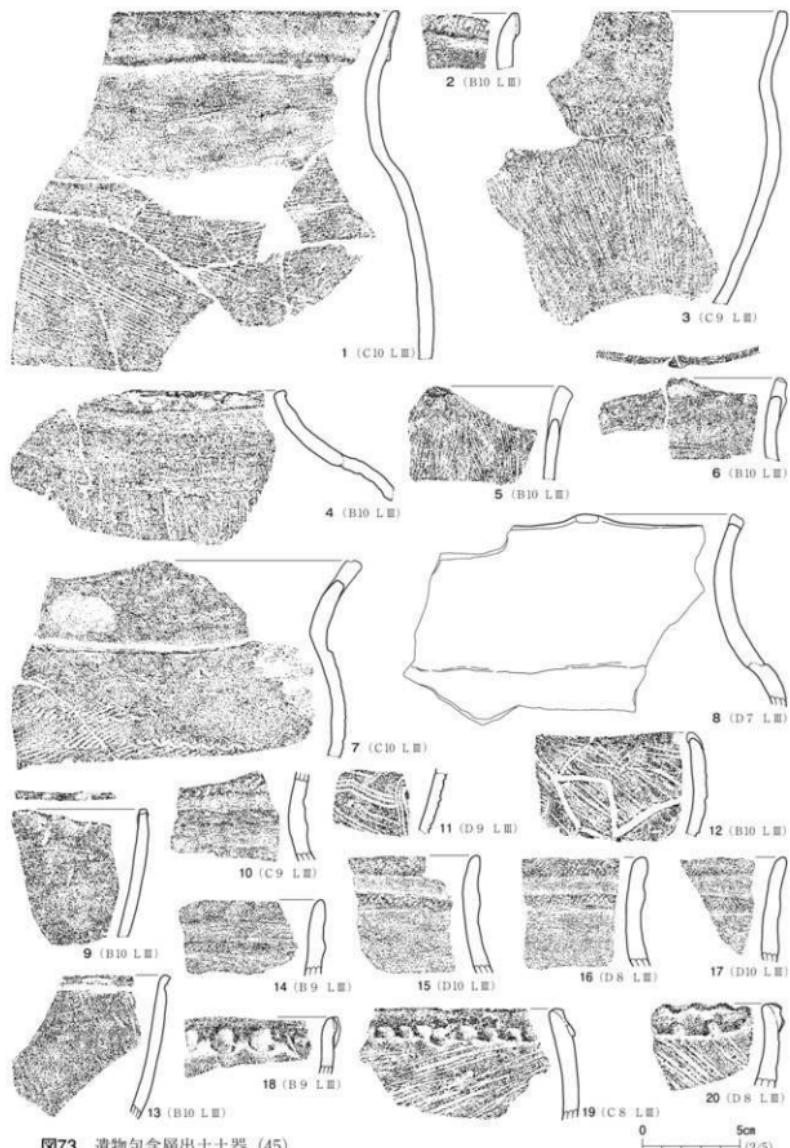


図73 遺物包含層出土土器 (45)

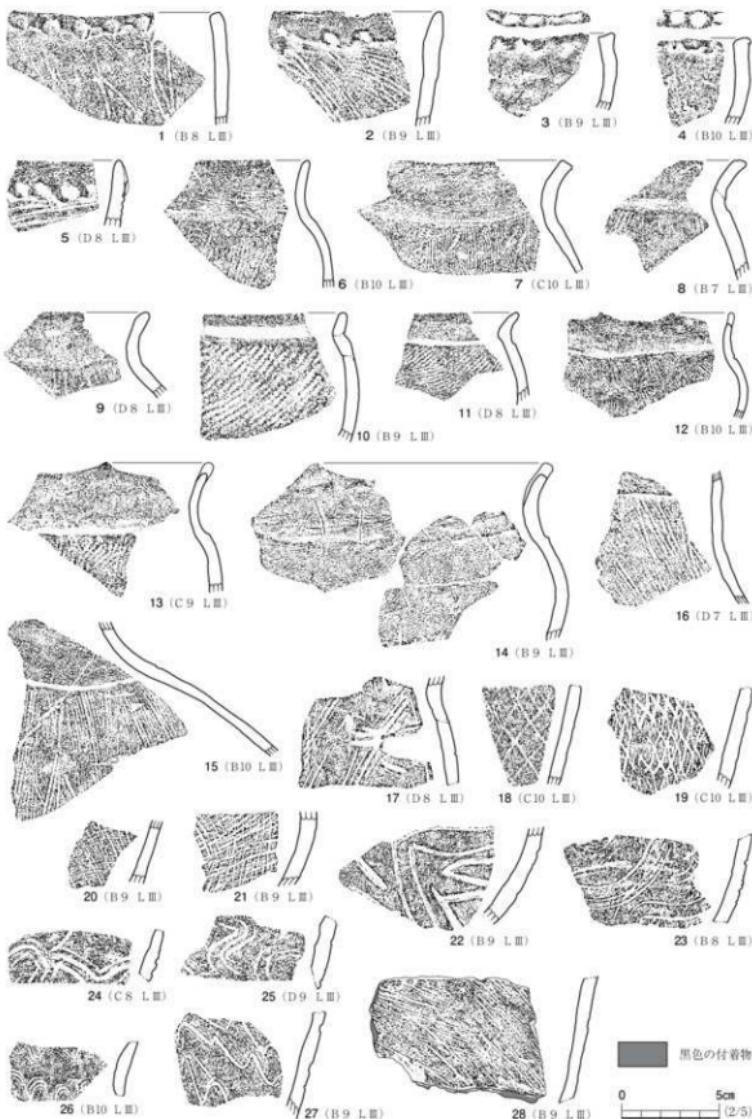


図74 遺物包含層出土土器 (46)

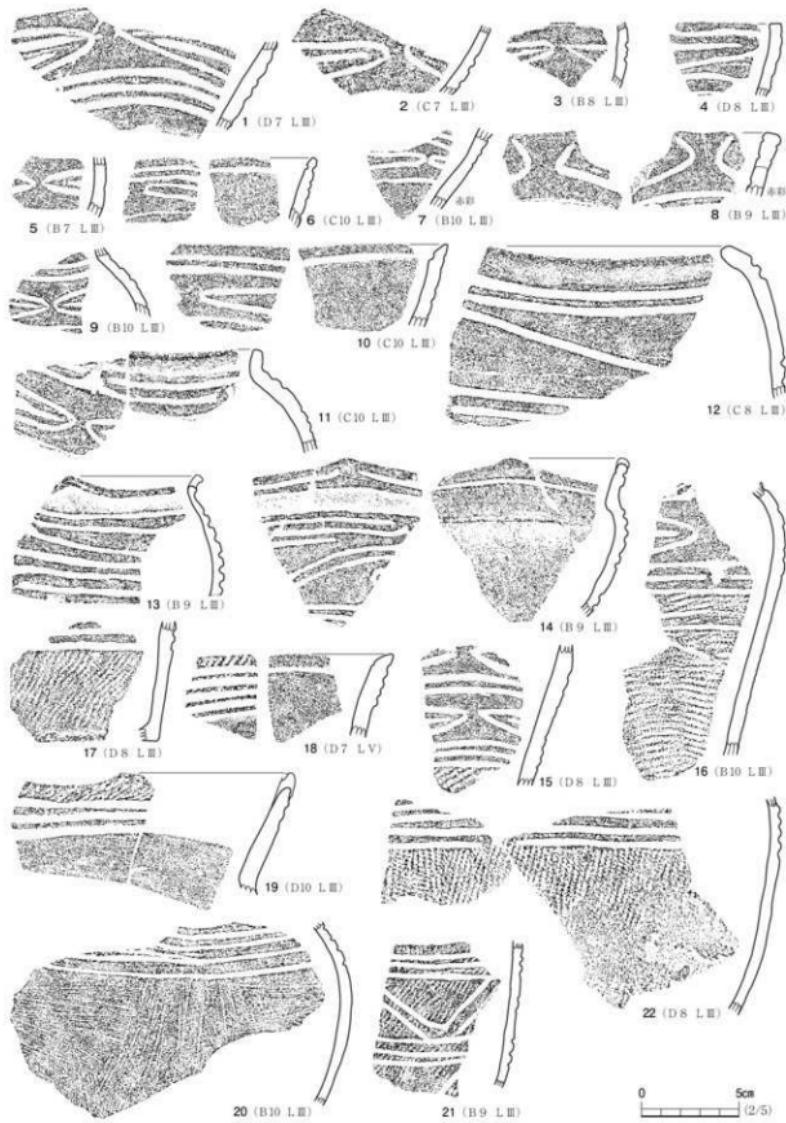


図75 遺物包含層出土土器 (47)

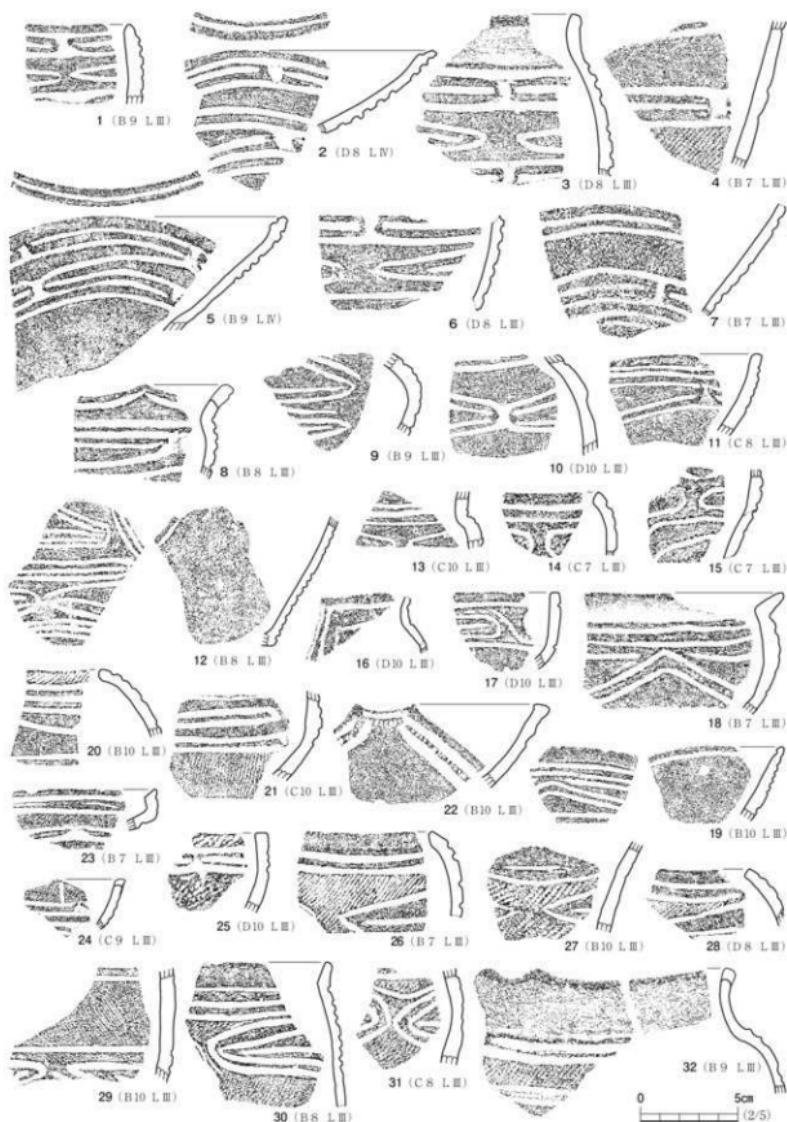


図76 遺物包含層出土土器 (48)

着する。図 76-2・5 は鉢である。器形は浅く、口縁端部の内面にも 1 条の沈線を巡らせる。5 の内面の沈線内には 1 cm ほどの間隔の結節がみられる。いずれも、外面の沈線付近に、2 は内面の沈線にも赤色顔料が部分的に付着する。図 76-3・6 は深鉢で、胎土・色調・焼成などの特徴から同一個体と思われる。3 の口縁端部がやや肥厚し、口縁端部と文様帶の間が一段掘り下げられている。図 76-4 は深鉢と思われる。文様帶下に繩文が施されている。図 76-7 は鉢である。上下の文様帶間に地文帯をはさむ。外面の一部に炭化物が付着する。図 76-8 は、鉢もしくは深鉢である。「く」字に外傾する波状口縁で、口縁端部直下の外面にも口縁に沿って沈線を引く。

図 76-10 は深鉢である。工字文内に 2 本の副線が引かれる。図 76-11 もその可能性がある鉢と思われる。沈線幅は 2 mm ほどである。

図 76-12 は鉢である。底部と波状の口縁部が一部のみ遺存する。外面には口縁部から底部まで施文され、内面は波状口縁に沿って 1 条の沈線が引かれている。図 76-13~15 はいずれも深鉢と思われる。図 76-16 は、器形、モチーフとも不明である。図 76-17 は、鉢と思われる。モチーフ間に右肩下がりの沈線が配置される。図 76-18・19 は、深鉢もしくは鉢である。工字文が 2 本の沈線による波状文に変化している。図 76-20 は、深鉢である。口縁端部と平行する最上段の沈線との間に繩文が施される。図 76-21 は、体部下半に地文が施される。図 76-22 は、口縁の波頂部に二つの突起を配し、口縁部に沿って 2 本の沈線が引かれる。沈線間に刺突列が施され、沈線と刺突内には赤色顔料がわずかに残る。器形は不明である。図 76-23・24 は、胎土・色調・調整などから同一個体と思われる。24 は口縁部に山形突起を有し、頂部から 1 本の沈線を継に引く。図 76-25 は、鉢と思われる。口縁部の破片である。文様帶の上下に地文が施される。図 76-26~32 は、磨消繩文手法によって施文された深鉢である。25~29 は 1 本の沈線で区画され、30・31 は 2 本の沈線で区画される。32 は、口縁部に二山の口縁部突起を有する。

図 77-1~4 は深鉢で、磨消繩文手法によって菱形を描き、内部に相似のモチーフを配置する。

図 77-5 は、鉢と思われる。磨消繩文による区画内に二重の菱形文が配置される。

図 77-7~15 は、磨消繩文により菱形のモチーフを描き、このうち 7・8・12・15 は継に連結して配置する。器形は、7 が鉢で、そのほかは深鉢である。8 と 9、10 と 11 は、それぞれ地文・胎土・色調・焼成などの特徴から同一個体と思われる。7・13 は繩文施文部と無文部が反転している。また、7 の外面には赤色顔料がわずかに付着している。

図 77-16・17 は深鉢の口縁部で、口縁部直下に二本の沈線、さらにその下に三角形を組み合せたモチーフが描かれる。16 は磨消繩文が施されず、17 は磨消繩文が施される。

図 77-18 は、深鉢の体部上半と思われる。帯状の無文部をもつ磨消繩文によって文様が描かれる。図 77-19 は、深鉢の体部である。沈線と三叉形の掘り去り部の間に刺突列と細繩文が充填される。

図 77-20 は鉢、図 77-21 は深鉢の口縁部で、三角形を組み合せた文様と帯状の無文部をもつ。20 は無文部に 1 条の沈線が引かれ、地文は無節の附加条文か撚糸文のようである。

図 77-22・23 は、深鉢の口縁部である。口縁端部下に数条の沈線を巡らせ、23 には帯状の無文

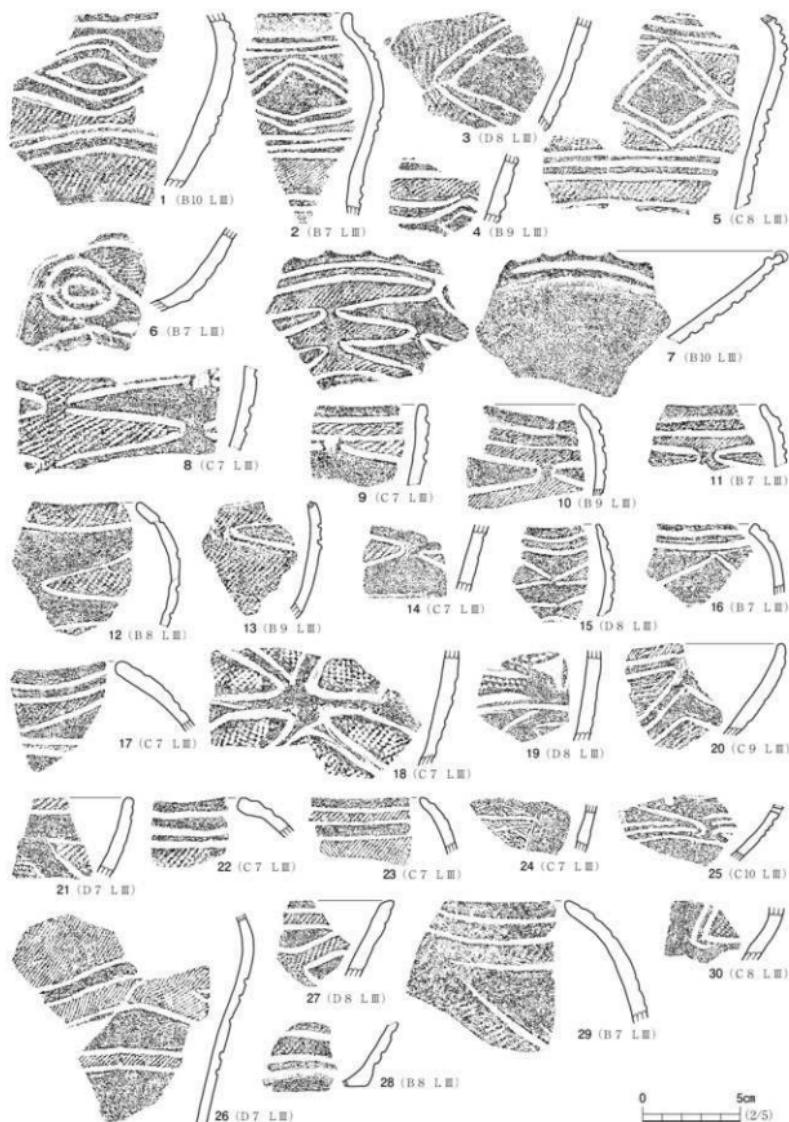


図77 遺物包含層出土土器 (49)

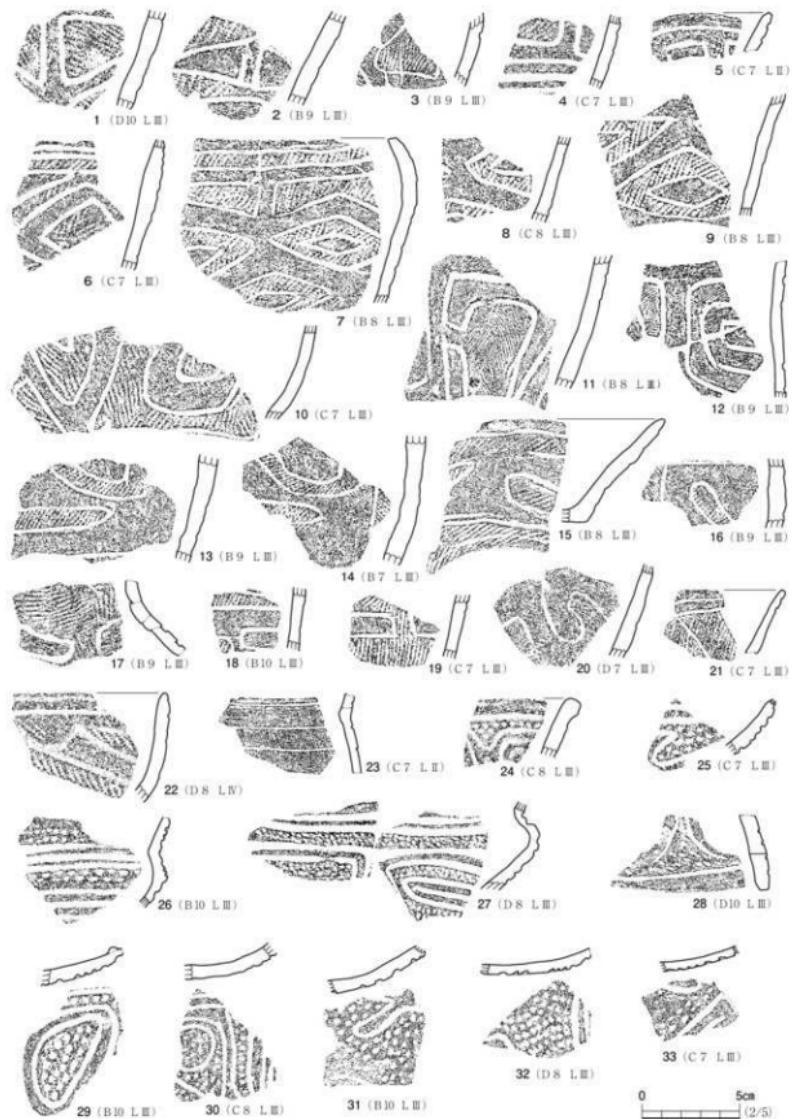


図78 遺物包含層出土土器 (50)

部がみられる。23の縄文は無節で、外面に炭化物が部分的に付着する。

図77-24は器形不明である、沈線区画内が不規則で乱雜な条線によって充填される。図77-25は、鉢と思われる。焼成前に小孔が穿たれ、二条の副線をもつ変形工字文が描かれる。図77-26は、深鉢である。帯状の無文部をもつ磨消縄文によって波状のモチーフが描かれる。図77-27・29は、菱形と三角形を組み合わせたモチーフを無文とし、帯状に磨消縄文が施されている。図77-28・30深鉢である。28は底部で、底部付近まで沈線と磨消縄文が施されている。30は沈線区画内に縄文が施され、区画に1条の沈線が添えられている。

図78-1~4は深鉢、図78-5は鉢で、いずれも菱形もしくは三角形を左右に分割したモチーフが描かれる。2・5は縄文施文部と無文部が反転している。

図78-6~9は、深鉢である。いずれも磨消縄文により、菱形の内部に相似形の菱形を配置する。このうち7~9は、胎土、色調、縄文の特徴がよく似ていることから同一個体と考えられる。

図78-10は深鉢で、磨消縄文により、無文帶で渦文と思われるモチーフが描かれる。図78-11・12は深鉢である。磨消縄文により、方形のモチーフが多重に描かれる。11は無文の帯を切る橋によってモチーフの内外が結ばれC字形になっている。12は渦文の可能性もある。

図78-13・14・16は、深鉢である。胎土・色調などが似ていることから同一個体と考えられる。ヒトデ文と呼ばれる磨消縄文を施した帯によって何らかのモチーフが描かれる。

図78-15は、鉢である。平底で、体部は外傾し口縁部に至る。磨消縄文により文様が描かれる。図78-17は壺、図78-18・19は深鉢で、いずれも磨消縄文による帯とこれを切る橋によってモチーフが描かれる。モチーフの全体は不明である。18は、無文部と縄文施文部が反転している。図78-20は、深鉢と思われる。J字形のヒトデ文が描かれる。図78-21・22は、深鉢もしくは鉢で、いずれも口縁部の破片である。磨消縄文によって文様が描かれるが、無文部と縄文施文部の区分が截然としない。21は同じ沈線区画内に縄文施文と無文部が共存し、22は沈線区画をまたいで縄文が施文されている。文様モチーフはいずれも不明である。図78-23は、深鉢と思われる。沈線幅が約1mmと細く、沈線区画帯の中に疑縄文が充填される。

図78-24~33は、28を除いていずれも鉢である。28は、高杯の脚部で、橢円形もしくは隅丸方形と思われる透かし孔が2箇所遺存する。いずれも沈線区画内が刺突文によって充填されている。

図79-1は、深鉢の口縁部である。磨消縄文により文様が描かれるが、同じ沈線区画内に無文部と縄文施文部が共存する部分がある。図79-2~8は深鉢で、磨消縄文手法による矩形のモチーフが描かれる。3・8の縄文は細かい。

図79-9~11は深鉢である。10・11は胎土・色調などの特徴から同一個体と思われる。いずれも口縁部で、10には頂部の平らな口縁部突起が1箇所あり、11の口縁部にも口縁部突起の破断面が残る。いずれも口縁端部に溝がめぐる。いずれも文様帶の上下を二条ずつめぐらせる沈線で区画し、内部に多重の沈線で菱形が描かれる。11は菱形の上下の対角線に三個の列点が配置される。

図79-12~18は壺で、胎土・色調などの特徴から同一個体と考えられる。直線と「く」字を組み

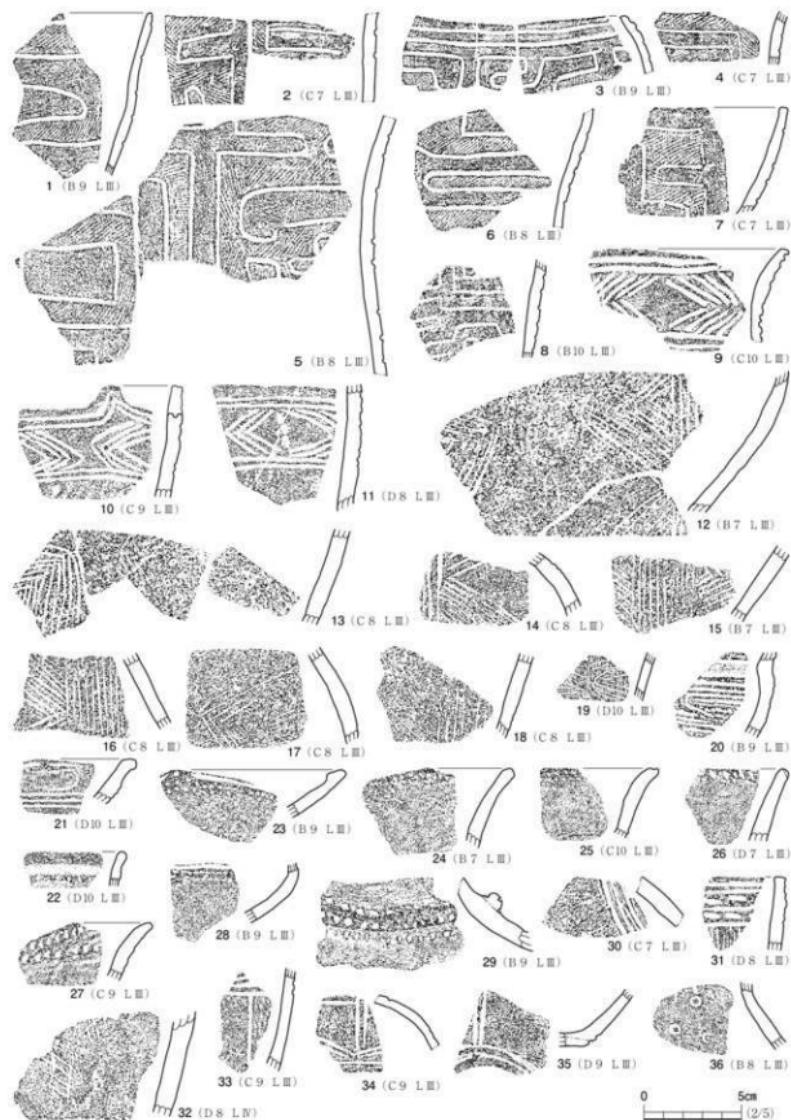


図79 遺物包含層出土土器 (51)

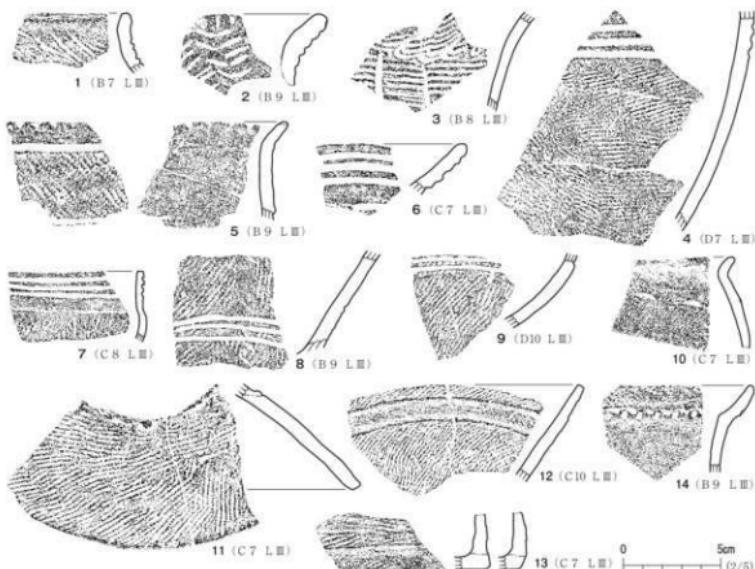


図80 遺物包含層出土土器 (52)

合わせたモチーフが集合沈線によって描かれる。図79-19も同様の手法でモチーフが描かれる。器形は不明である。

図79-20・21は深鉢と思われる。頭部を一段低く掘り下げる無文帯とし、体部に集合沈線による文様を書き、内部に刺突文が密に充填される。20は口縁部にも刺突が密に施される。21は口縁端部直下の外面に一箇所の低い突起を基点に沈線をめぐらせる。図79-22は、鉢と思われる。口縁端部を外側に肥厚させ、直下に列点文がめぐる。

図79-23~25は、鉢と思われる。いずれも口縁部で、23・24はそれぞれ突起を一箇所有する。23の突起の頂部には刻みが入れられ、口縁端部には溝がめぐらされる。いずれも口縁部直下の外面に刺突列が二列めぐらされている。内面の口縁部直下にも緩やかな稜がめぐらされている。

図79-26は深鉢である。口縁端部外面に刺突列もしくは刻み目が施されている。図79-27は深鉢である。口縁端部直下に二列の刺突列がめぐらされる。刺突は三角形である。図79-28は鉢である。一条の沈線下に二列の刺突列がめぐらされている。図79-29は壺である。頭部で、断面が方形の隆帯がめぐらされている。隆帯の上面、端面、下面にそれぞれ一条ずつ刺突列がめぐらされている。

図79-30は壺である。条痕と条痕の間に刺突が密に充填されている。図79-31は深鉢である。口縁部直下に四条の沈線がめぐらされ、この間に横長の刺突の列が二列めぐらされている。体

部には縦方向の条痕が施されている。図79-32は壺である。斜め格子に沈線を交差させた文様が描かれている。

図79-33～35は鉢である。35は平底である。沈線による区画内に、33は刺突を密に充填し、34・35は目の細かな繩文が充填されている。図79-36は壺と思われる。竹管の押捺によるものと思われる円文がまばらに施されている。

図80-1は、壺の口縁部と思われる。外面に条痕が施されている。図80-2・3は、壺である。2は口縁部で、端部に刻み目、外面に沈線による綾杉文が、同じ原体を用いて施されている。3は頭部で、条痕文と波状文と同じ原体を用いて施されている。そのほかは繩文の下に縦の沈線が1条みられるが、意図的に施されたものかは判断がつかない。

図80-4は、鉢もしくは深鉢である。頭部あるいは体部上半に三条の沈線をめぐらせ、体部に無節の地文が施される。外面のごく一部に炭化物が付着する。図80-5は、壺の口縁部である。口縁端部は面取りされ、外面側と内面側からそれぞれ刻み目が施されている。口縁部は無文で頭部にめぐらされた二条の沈線間に地文が施される。

図80-6・7は、鉢の口縁部である。6は外傾し、端部は面取りされ、内面の口縁端部直下に稜線がめぐる。外面に三条の沈線がめぐり、その下に沈線による文様が描かれている。7は口縁部が直立し、体部上半はやや膨らむ。口縁端部直下に三条の沈線をめぐらせ、口縁部下半を無文帯とし、体部に地文が施される。

図80-8は深鉢、図80-9は鉢である。8は体下部、9は体部で、いずれも地文上に沈線がめぐらされている。8の内面には炭化物が薄く付着している。図80-10は壺である。「く」字口縁で、肩部に列点文がめぐる。外面の一部に炭化物が付着する。

図80-11は笠形の蓋である。端部付近の内外面に炭化物が付着することから壺蓋と思われる。摘みみを剥離により欠失する。体部上端に太く深い沈線がめぐるようであるが、一部しか遺存していない。外面全体に地文が施されている。

図80-12は鉢である。体部上半から口縁部にかけて直線的に外傾し、口縁端部は面取りされる。口縁部直下の外面に幅約1cmの無文の掘り下げがめぐり、これ以外の部分に無節の地文が施される。

図80-13は、鉢である。底部の縁辺に水平に張り出す張り出しが一箇所認められる。底部が一部のみしか遺存していないため判断がつかないが、あるいは方形底の可能性がある。外面に沈線区画をもたない手法による磨消繩文帯がめぐらされている。外面にわずかに赤色顔料が付着している。

図80-14は壺である。頭部と受け口状の口縁部の破片で、口縁部の下端に交互刺突文がめぐらされている。口縁部と頭部は無文で、摩滅により明瞭ではないが、口縁部に一条の沈線が弧状に描かれているようである。

3 土 製 品(図81、写真40)

土製品は土偶・多頭土製品・不明土製品などがある。

1・3は土偶で、1が頭部、3が腹部から脚部である。1の目と口は沈線で表現されている。鼻

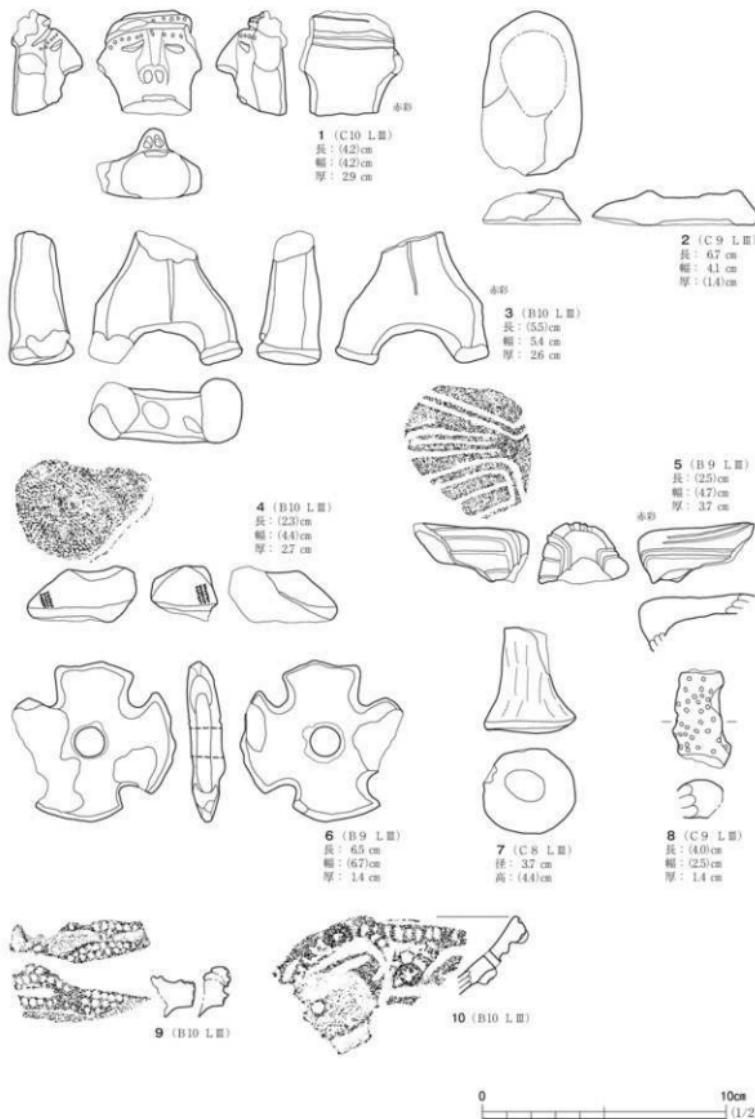


図81 遺物包含層出土土製品

梁の高い鼻が単独で付され、鼻孔も表現されている。さらに、眉及び額には連続刺文が施されている。3の腹部と背部には沈線が施されている。腹部の膨らみなどは表現されていない。

2は足を模した土製品と考えている。足の裏や足の甲などの部分は剥離し、足首の部分は窪んでいる。4・5とも不明土製品の破片資料である。4にはR L 繩文と沈線が施され、5は中空で、平行沈線文と方形区画文が施されている。6は多頭土製品で、多頭石斧を土製品で模倣したものである。中央部に円孔が貫通する。本来は4頭であったものが、現状で1頭が欠損している。7はスタンプ状土製品の可能性があるので、先端部が欠損している。8～10は刺突文や貼瘤などが施されたものであるが、土製品の一部である。

4 石器・石製品(図82～96、写真41～43)

石器は石鎌・石錐・石匙・打製石斧・磨製石斧・砥石・凹石・敲石・不定型石器・加工礫・石核・剥片などがある。

(1)石鎌・石錐・石匙(図82－1～18、写真41)

1～9は石鎌である。ほぼ有茎鎌で占められ、9のみが無茎鎌である。7は、有茎鎌を製作する途中で断念したものと考えている。

10～16は石錐である。石錐の断面形は菱形で、形状は石鎌と類似するものが多い。10・11にはつまみ状の頭部がある。17・18は石匙である。いずれも縦型で、18の先端が欠損している。

(2)剥片・不定型石器・石核(図82－19～22、図83、図84、図85－1～2、写真41)

図82－19～22、図83は二次加工のある剥片である。図82－19は上下からの剥離痕がみられるもので、図82－20～22、図83－1・2・5は縦長の剥片で、図83－6は横長の剥片である。

図84－1～3は不定型石器である。1は下端部に、2では側縁部に調整剥離を施し、刃部を形成している。3は自然面が残る縦長の礫を使用している。当初は、打製石斧とも考えたが、縦断面の形状から不定型石器とした。

図84－4・5、図85－1・2は石核である。図84－4は転礫を素材とし、数回の剥離を行っている。図84－5、図85－1は打面転移を行い、素材の礫には脈石が介在している。図85－2は大型の石核で、打面転移を繰り返しているが有効な打撃がうまくゆかず廃棄されたものであろう。

(3)打製石斧(図85－3～7、図86～91、写真42)

打製石斧は、石器のなかでも最も多く出土したものである。自然面を残す縦長の礫を素材として、主に側縁部と刃部に剥離を施している。

打製石斧の長さをみてみると、最短のものが図85－3の7.4cm、最長のものは図88－3の18.2cmである。資料の多くは、長さ12～15cmの範囲に入るようである。

打製石斧の形状で分類してみると、全体の形状が長方形となるもの(図85－3～7、図86－1)、刃部の片側が広がるもの(図86－2～7、図87－1、図90－5)、刃部の両側が広がるもの(図87－2～8、図88、図89－1、図90－3・4)、全体の形状が柱状形となるもの(図89－2～6、図90－1)などがある。

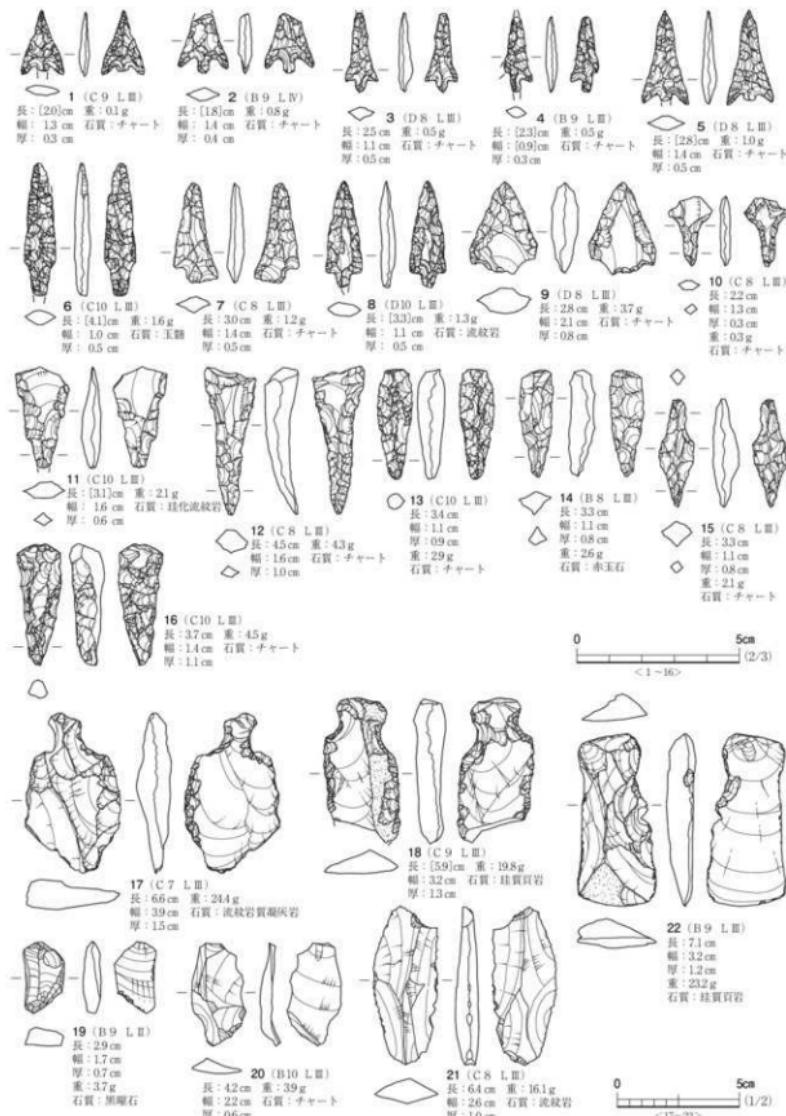


図82 遺物包含層出土石器（1）

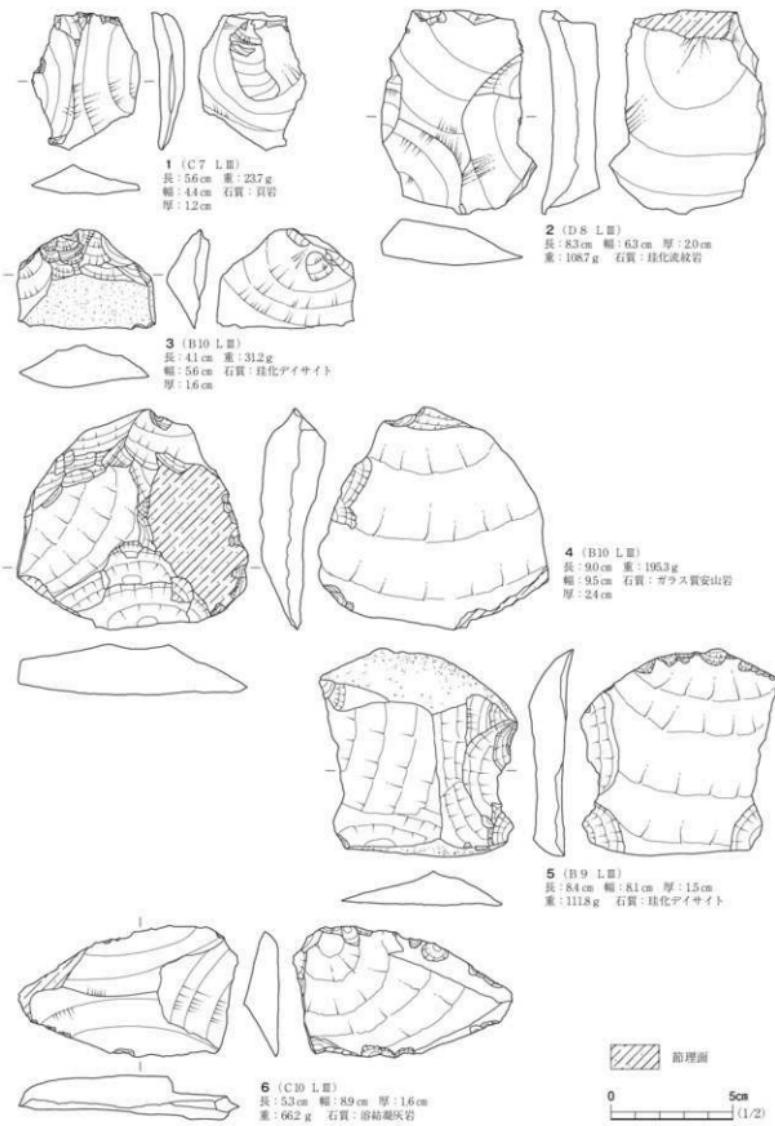


図83 遺物包含層出土石器（2）

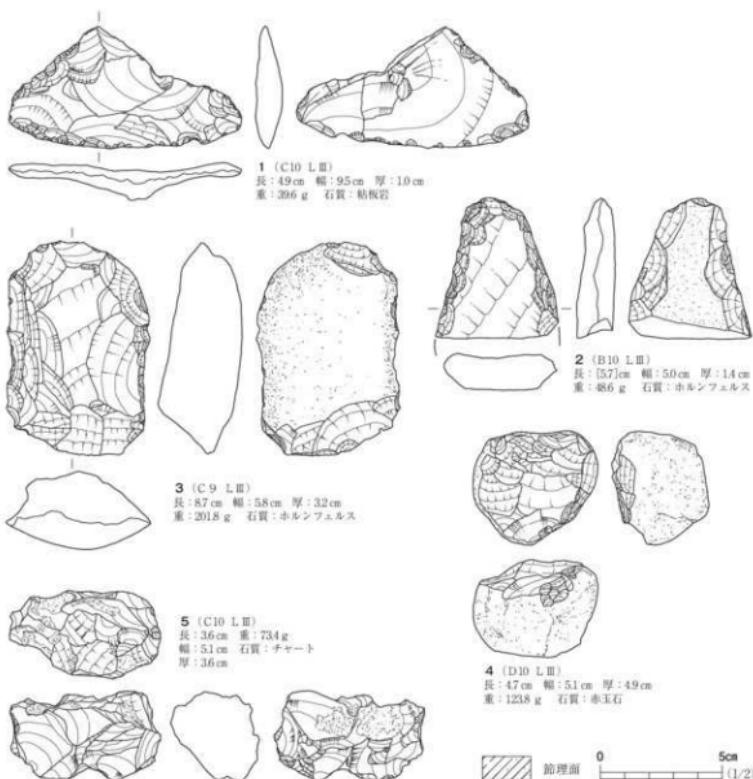


図84 遺物包含層出土石器（3）

図85-5～7、図86-5・6、図87-1・2・5・7、図88-2・3・5・6、図90-4・5は刃部に使用痕がみられるものである。さらに、図85-5では着柄痕がみられる。図90-1は刃先に対して斜めに装着されていたようである。

図90-2～4、図91-1・2は基部が、図91-3～6は刃部が欠損している資料である。

(4) 磨製石斧・環状石斧・砥石(図92、写真43)

磨製石斧は打製石斧に比べて出土数は少なく、小型品である。さらに、欠損していない資料は1・2だけである。2～6では研磨が全面になされているが、敲打痕が部分的にみられる。3・4・7・8は基部が、5・6・9は刃部が欠損している。7・8は磨製石斧としたが、剥離痕がみられるものである。10は環状石斧の破片資料である。刃部は鋭い両刃で、両面にベンガラ？が付着していた。11は砥石である。使用している面は三面で、かなり使い込まれていたとみられる。

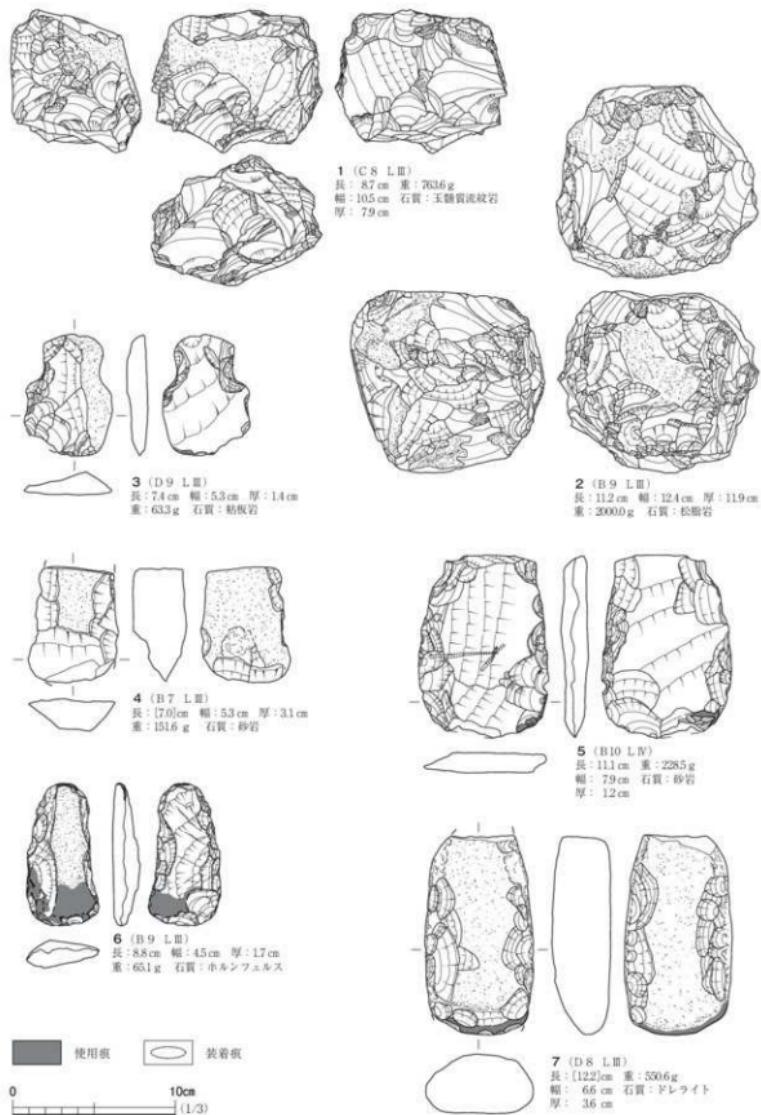


図85 遺物包含層出土石器 (4)

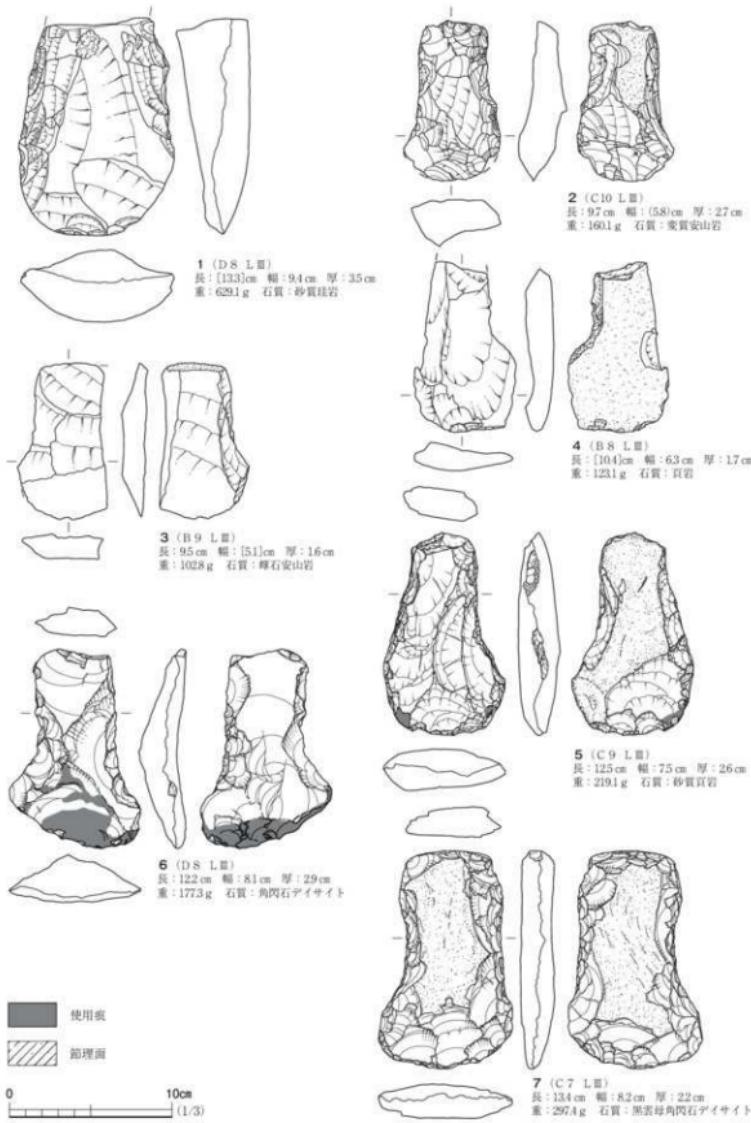


図86 遺物包含層出土石器（5）

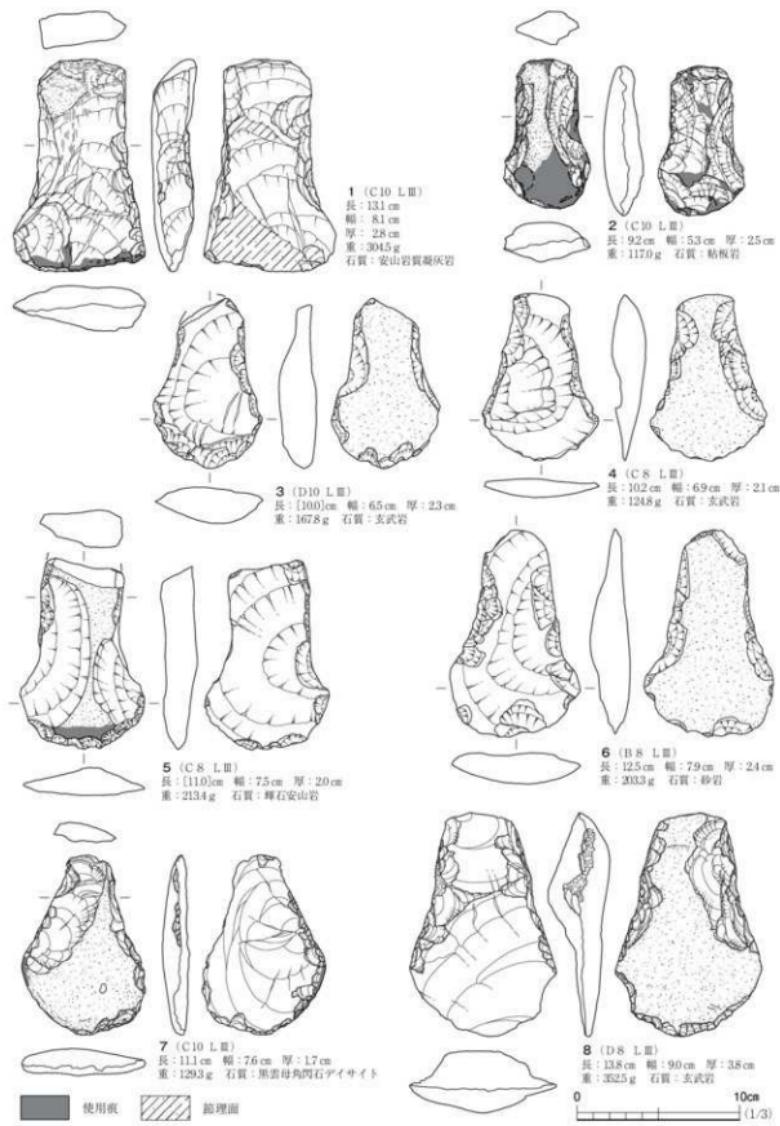


図87 遺物包含層出土石器（6）

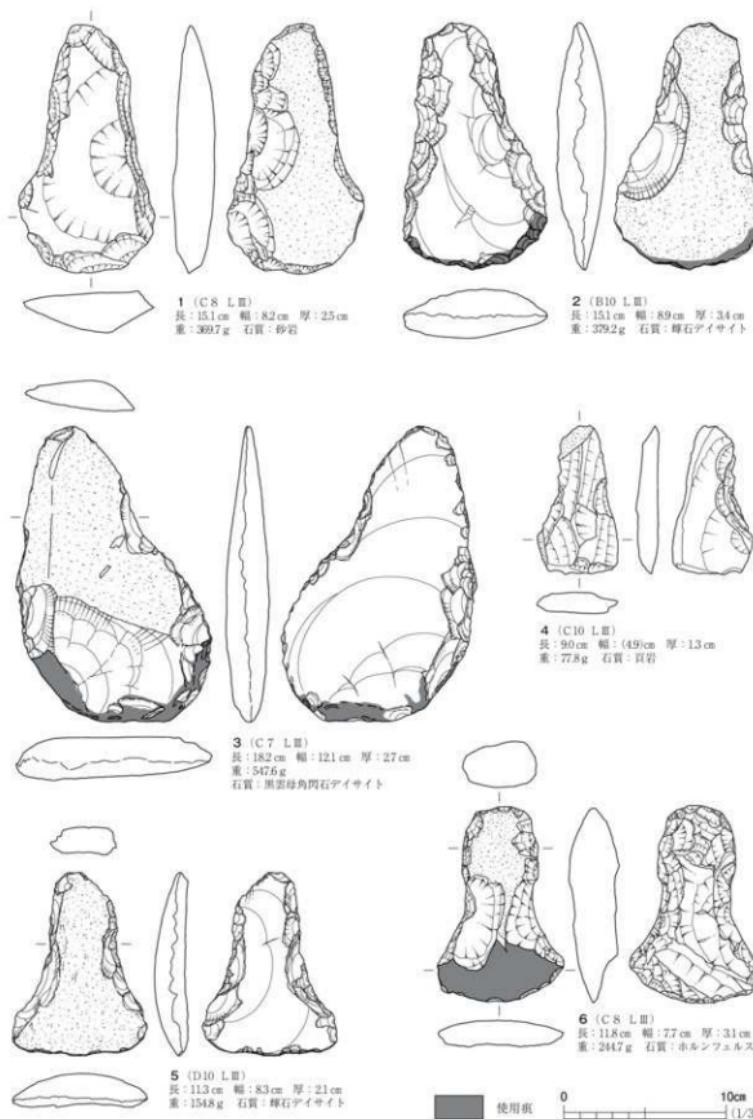


図88 遺物包含層出土石器（7）

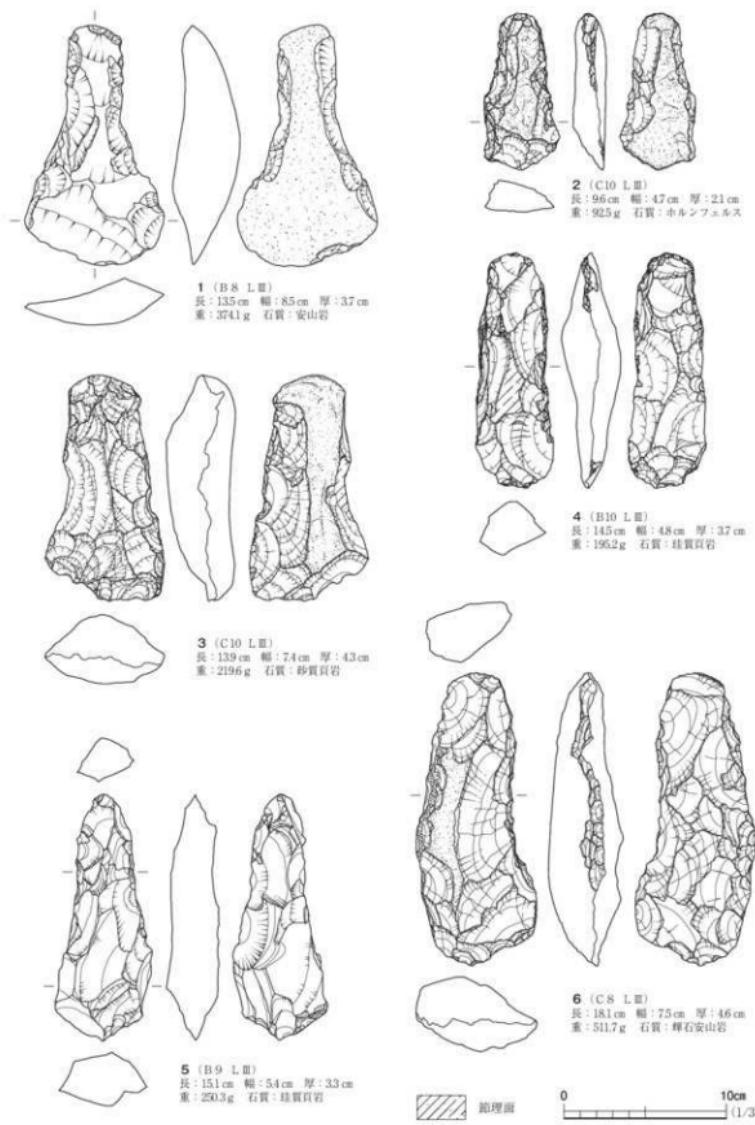


図89 遺物包含層出土石器（8）

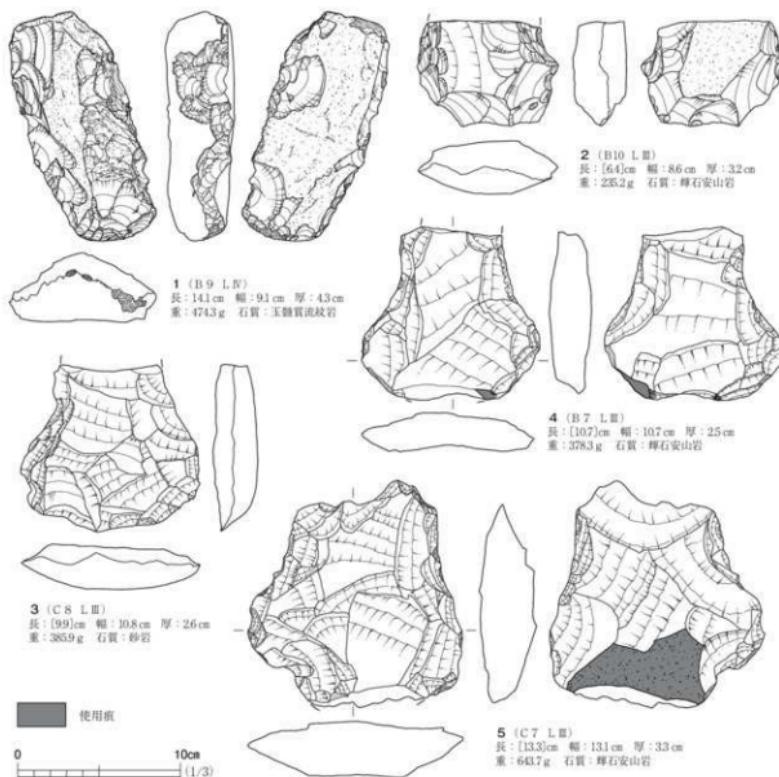


図90 遺物包含層出土石器（9）

(5) 凹石・敲石(図93-1~8、写真43)

1は凹石と敲石として両方の機能を果たしていたものである。片面に凹みが、側面に敲打痕がみられる。2・4は凹石で、2は片面に、4は両面及び、2箇所に凹みがみられる。

3・5~8は敲石で、丸みを帯びた礫を素材として使用している。5は両面と両側面、6は両面、7が下端に敲打痕がみられる。8は両端に敲打痕がみられるが、下端にベンガラ？が付着していることから、ベンガラの製造に関わる道具の可能性がある。

(6) 加工礫(図93-9~13、図94、図95-1・2、写真43)

ここでは部分的に剥離痕・敲打痕などがみられた礫をまとめた。図93-9~13は、長方形状の礫を素材としているが、11・13のように特定の形状の礫を選んでいるものもある。いずれも、部分的に敲打痕がみられるものであるが、敲石の素材として利用している礫とは明らかに異なって

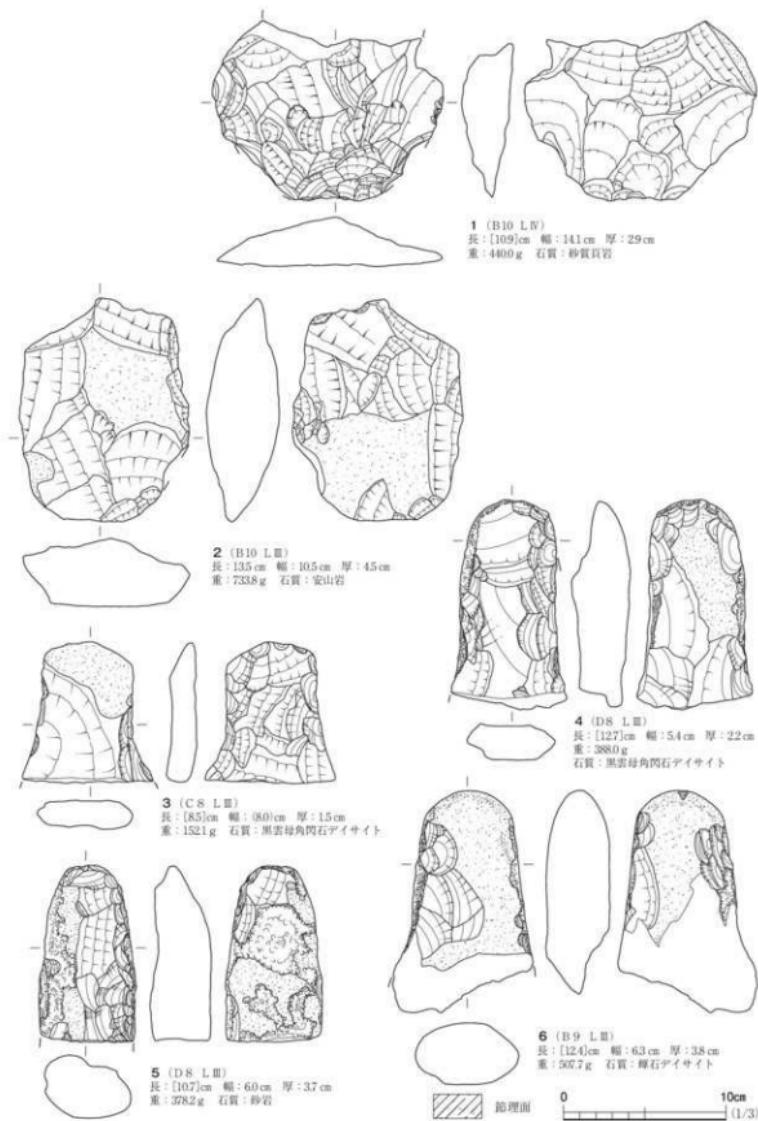


図91 遺物包含層出土石器 (10)

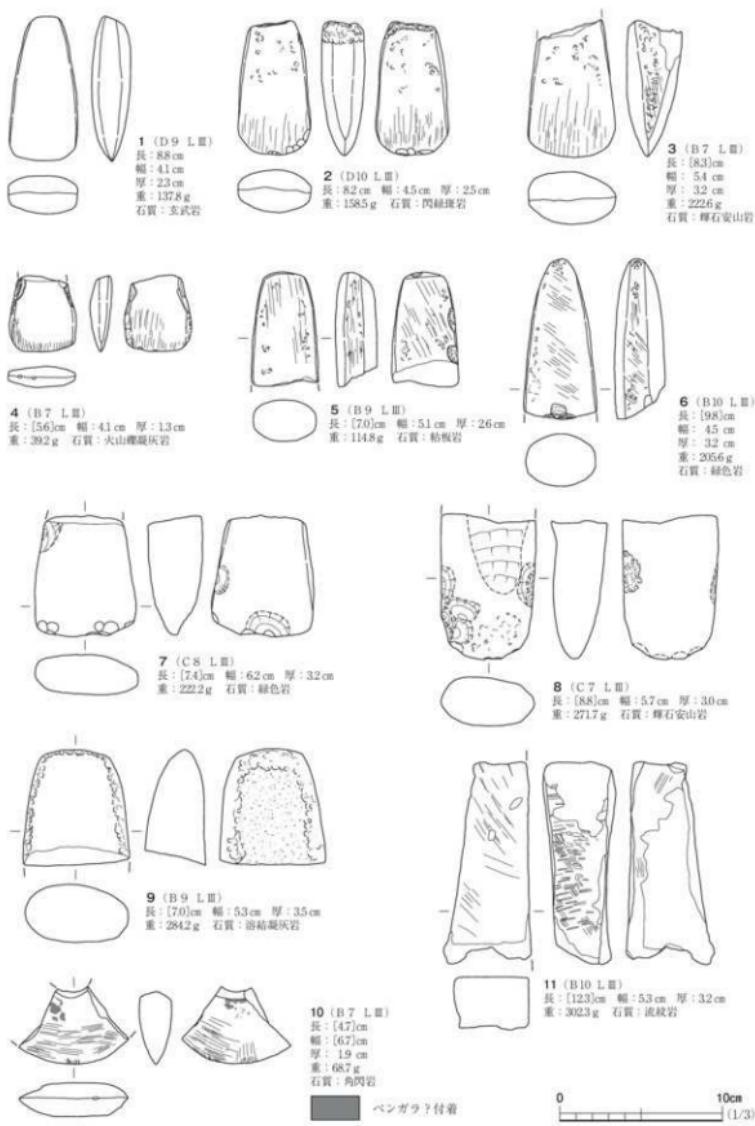


図92 遺物包含層出土石器 (11)

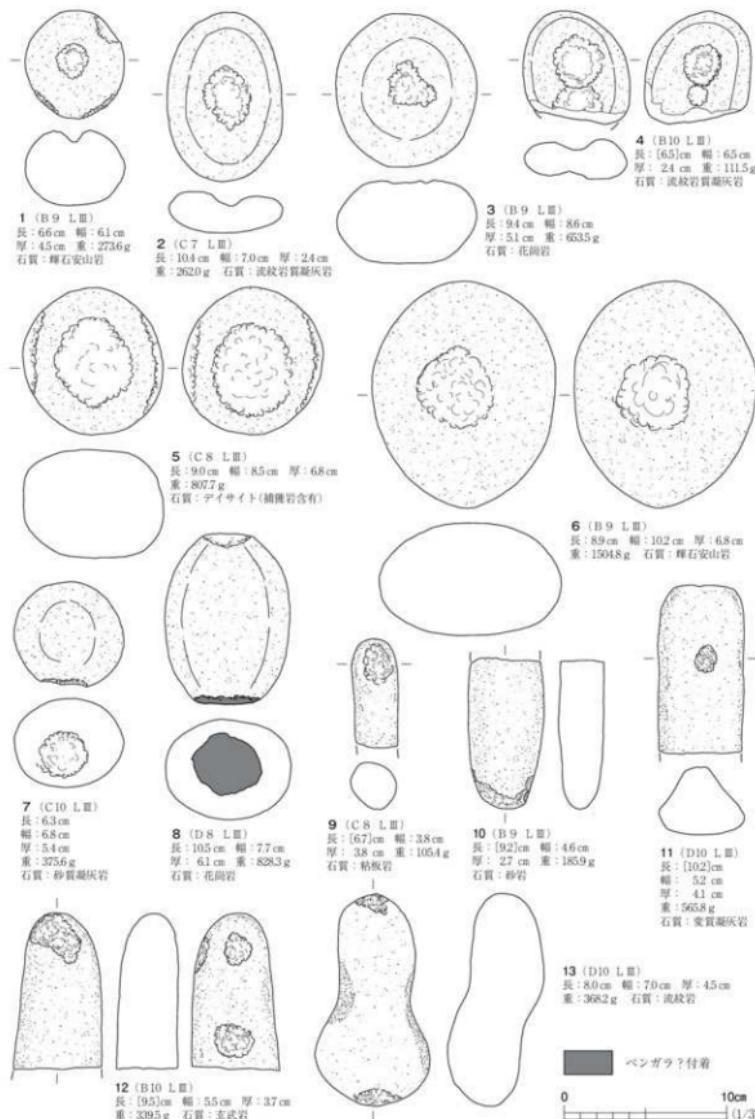


図93 遺物包含層出土石器 (12)

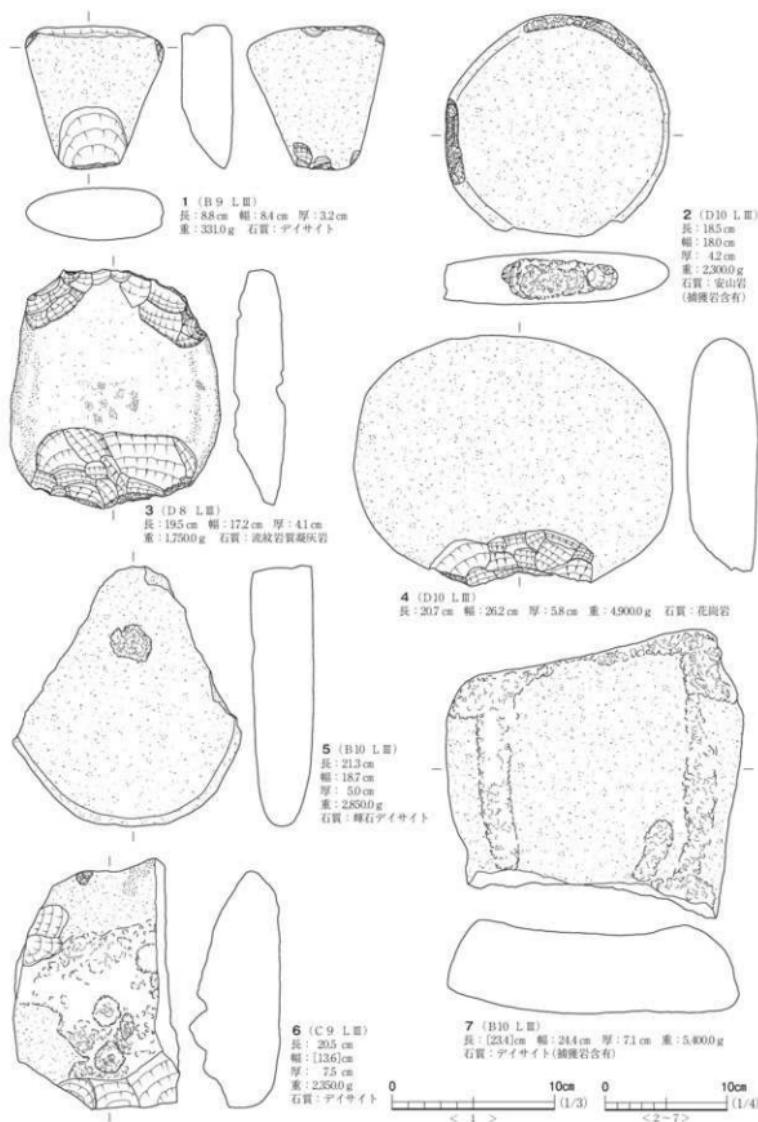


図94 遺物包含層出土石器 (13)

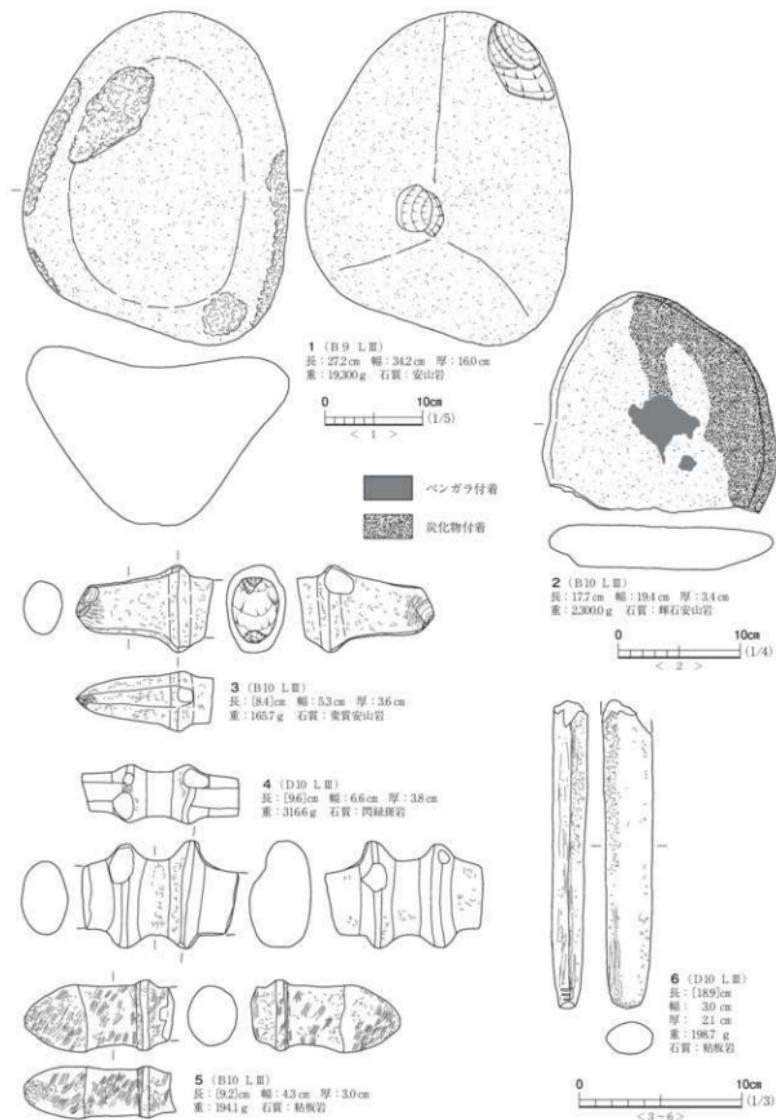


図95 遺物包含層出土石器・石製品



図96 遺物包含層出土石製品

いる。図94-1は、扁平な礫の両端部に剥離痕がみられるものである。図94-2～7は扁平な礫を、図95-1は断面が三角形状の礫を利用している。図95-2の礫には、ベンガラと炭化物の付着がみられる。ベンガラについては付章1第3節のとおり分析に基づいている。この礫は、ベンガラに関連する道具と考えている。

(7) 石製品(図95-3～6、図96、写真43)

石製品は独鉛石・石刀・石棒・スタンプ状石製品、線刻礫、不明石製品などがある。図95-3～5は独鉛石で、すべて欠損している。いずれも細かい敲打によって仕上げられている。3・4にはリング状に発達した節がある。5の節はあまり発達していないが、丁寧に研磨が施されている。

図95-6は石刀で、柄の部分は欠損している。一側縁が刃部で、反りはみられない。背刃の部分には3条のキザミが施されている。敲打痕を残しているので、あまり研磨はなされていない。

図96-1～3は石棒で、すべて欠損している。1以外、頭部の成形は明確ではない。3の欠損部に接して剥離痕がみられる。図96-4はスタンプ状石製品である。表面の磨減が著しく、研磨痕が部分的に確認できるのみである。図96-6は線刻礫である。礫の一部に、線刻を縱・横方向に施している。図96-5は不明石製品としたものである。形状は長方形で、端部近くに円孔を穿っている。両面と左側面に沈線が施されている。

遺構外出土遺物

1 繩文土器(図97～99、図100-1～3、図101-10～13、写真44・45)

図97～99、図100-1～3、図101-10～13は縄文土器である。

図97-1～3は、浅鉢である。1は、口縁部と体部の一部が遺存する。やや偏平な半球形で、平口縁である。口縁部は内面側にやや肥厚する。口縁部直下には、外面に浮線文が施文された文様帯がめぐらされ、内面には1条の沈線がめぐらされている。浮線文の最上段には二個一对の突起がモチーフの頂部に配置されている。文様帯のごく一部には赤色顔料が付着する。焼成後の補修孔が文様帯内に一箇所穿たれている。2は底部から口縁部にかけてそれぞれ一部が遺存する。器形はやや偏平な半球形である。底面は浅くくぼむ。口縁部の遺存した範囲には山形突起が一箇所のみみられる。口縁部は内面側にやや肥厚する。口縁部直下には、外面に浮線文が施文される文様帯がめぐらされ、内面には1条の沈線がめぐらされている。文様帯の一部には赤色顔料が付着している。3は、底部から口縁部にかけてそれぞれ一部が遺存する。器形はやや偏平な半球形である。底面は大部分が剥離している。口縁端部には平坦面が設けられ、1条の沈線がめぐらされている。口縁端部の外面側に緩やかな突起が等間隔に配されている。遺存した範囲には6箇所が認められ、ここから推定すると突起は全部で16箇所付されているものと思われる。口縁部直下の外面には浮線文が施文される文様帯がめぐらされている。文様帯の一部には赤色顔料が付着しているほか、外面の一部に炭化物が薄く付着している。

図97-4は、鉢である。口縁部を欠失する。平底から直立する寸胴の体部に、二本一組の沈線をめぐらせて無文帯とし、それ以外に繩文を充填する。上端部にわずかに沈線が遺存していることから無文帯はもう1条めぐる可能性がある。

図97-5は、高杯である。脚部の一部が遺存する。裾部から直線的に急な角度で立ち上がり、天井は平坦である。据端部の直上に2条の沈線がめぐらされている。

図97-6・7は鉢である。平底の底部から急な角度で体部が立ち上がり、最大径を上部にもつて体部、長く外反する口縁部をもつ。体部と口縁部の高さはほぼ同じである。6は口縁部に二山一对の突起を有し、7は波状口縁で、いずれも口縁部径が体部最大径を凌駕する。6は摩滅により一部判然としないが、口縁端部直下に5条の沈線、頸部に綾杉文、体上部にめぐらされた2条の沈線間に連鎖文が描かれる。体部最大径以下には条痕は満たされている。体部内面に炭化物が薄く付着する。底部の中央は焼成後穿孔されているようである。7は、口縁端部直下の内外面に波状口縁をなぞる1条の沈線、その下に2条の沈線がめぐり、外面にはさらに刺突列が、口縁端部と沈線間、2条の沈線間にめぐらされている。体上部には二個一对の突起をモチーフ間に配した浮線文、その下に2条の沈線がめぐらされている。頸部と体下部は無文である。底面にはとびござ目編みの圧痕が付されている。

図97-8は、壺の口縁部である。緩やかに湾曲しながら急な角度で立ち上がり、口縁端部に山形突起を有する。口縁部の突起は遺存する範囲に1箇所が認められる。内外面とも無文である。

図98-1～3は、深鉢である。1は体上部以下を、2・3は体下部以下をそれぞれ欠失する。1は、体上部がやや張り、頸部はややくびれ、口縁部は緩やかに外反し、口縁端部に山形突起が等間隔に配される。突起は、遺存した範囲の個数から推測すると12単位が配されているようであ

る。口縁端部の直下には2条の沈線間の連繋文、体上部には連繋文とその下の1条の沈線からなる文様帯がめぐらされ、体部文様帯以下には条痕が施されている。頭部は無文である。内面の口縁部直下には1条の沈線がめぐらされている。外面には炭化物が薄く付着する。2の器形は1と同様で、口縁部に山形突起が1箇所のみ遺存する。外面の口縁部に突起の頂部から垂下する短い沈線が引かれているようであるが、遺存状態が悪く判然としない。頭部は一段掘り下げられ、中ほどに3条の浮線文がめぐらされている。口縁部、頭部の浮線文の上面、体部には条痕が施され、体上部には3条の沈線、綾杉文と綫の沈線、3条の沈線がめぐらされた文様帯が条痕の上に重ねて描かれている。体部の内外面の一部に炭化物が付着している。3は、体上部に最大径をもち、径から口縁部がやや内傾し、口縁部に山形突起を有する。山形突起の頂部には刻みが1箇所入れられている。口縁端部直下に2条の沈線がめぐらされ、頭部を無文とし、体部最大径以下に条痕が施されている。

図98-4は、壺と思われる。体上部以上を欠失する。平底で、体部最大径を体上部に有する。無文で、内面に横方向のナデが施されている。図98-5・6は、底部の破片で、器形は不明である。いずれも、外面に条痕が施され、6にはとびござ目編みの圧痕が付されている。

図99-1は、円孔を穿つ環状の口縁部突起にさらに突起を有する。外面には地文が施される。

図99-2は、口縁部に頂部の平坦な突起をもち、外面に沈線と刺突による文様が施される。

図99-3は、浅鉢である。体部はやや偏平な半球形に復元される。口縁部に二山一対の低い山形突起を有する。外面の口縁部直下の文様帶に浮線文が施されている。口縁部内面は肥厚し、1条の沈線がめぐらされている。図99-4は、浅鉢である。平口縁で、遺存した範囲には突起はない。外面の口縁部直下に浮線文が施され、赤色顔料が付着する。

図99-5・6は、深鉢である。5は波状口縁、6は縁部に山形突起を1箇所もつ。5は口縁端部の平坦面にも沈線がめぐらされる。5・6は外面の口縁部直下に文様帯をもち、5の内面には波状口縁部をなぞる波状の沈線がめぐらされている。

図99-7は、浅鉢と思われる。口縁部に山形突起が2箇所認められる、外面に浮線文が施され、内面の口縁部直下に1条の沈線がめぐらされている。図99-8は浅鉢で、口縁端部直下の外面に浮線文による文様帯がめぐらされている。文様帯には補修孔が1箇所穿たれている。

図99-9は鉢である。屈曲する短い口縁部に2条の沈線が巡らされ、体部には地文が施される。

図99-10は浅鉢である。口縁部に山形突起を1箇所有する。突起の頂部に刻みが1箇所あり、内外面に頂部から短い沈線を垂下させる。外面は、口縁端部直下に一段掘り下げた帯をめぐらせ、その下に4条の沈線による文様帯がめぐらされている。文様帯の一部には赤色顔料が付着している。口縁部内面は肥厚し、1条の沈線がめぐらされている。内外面の一部にやや光沢のある炭化物が薄く付着している。

図99-11・12は深鉢である。胎土・色調などの特徴から同一個体と考えられる。体部は張り、頭部はややくびれ、口縁部はやや外傾する。口縁端部直下に2条の、体上部に3条の沈線がそれぞれめぐらされている。外面の一部に炭化物が付着している。

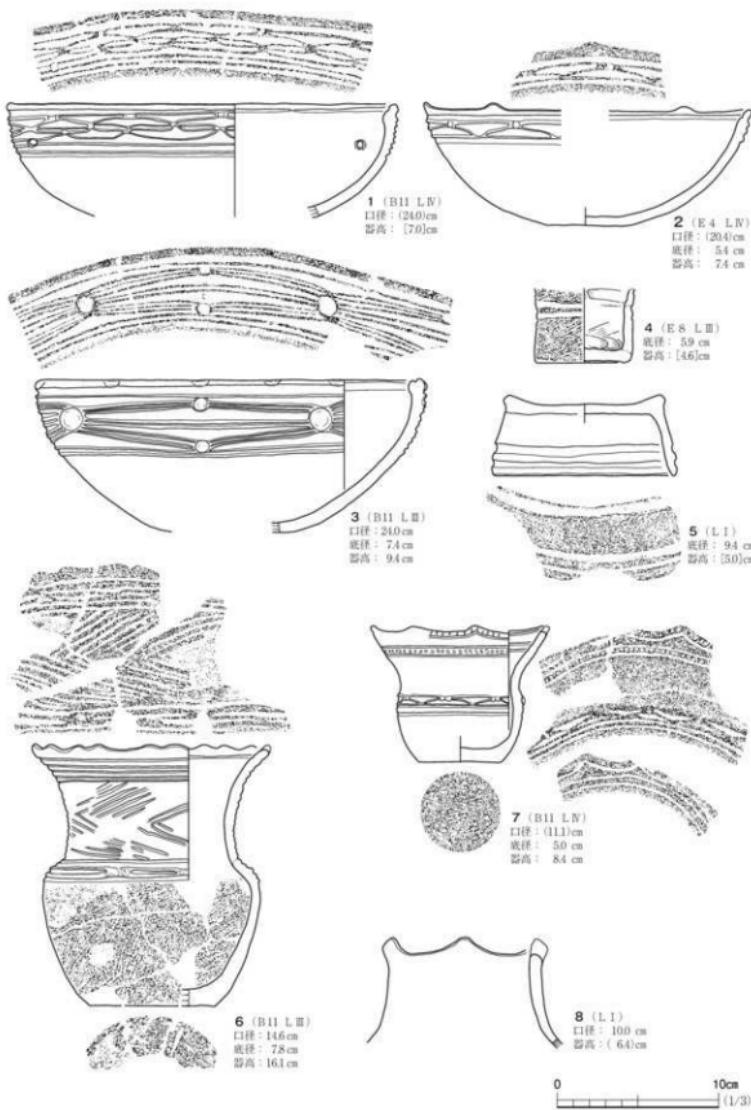


図97 遺構外出土土器（1）

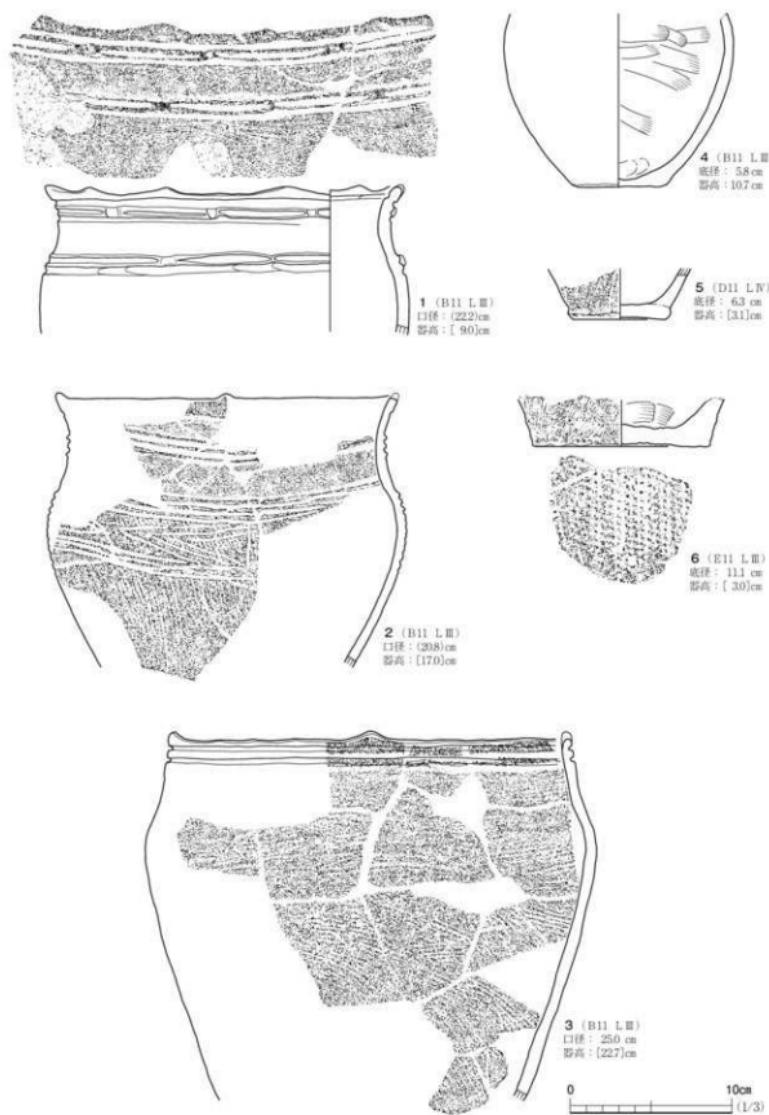


図98 遺構外出土土器（2）



図99 遺構外出土土器（3）

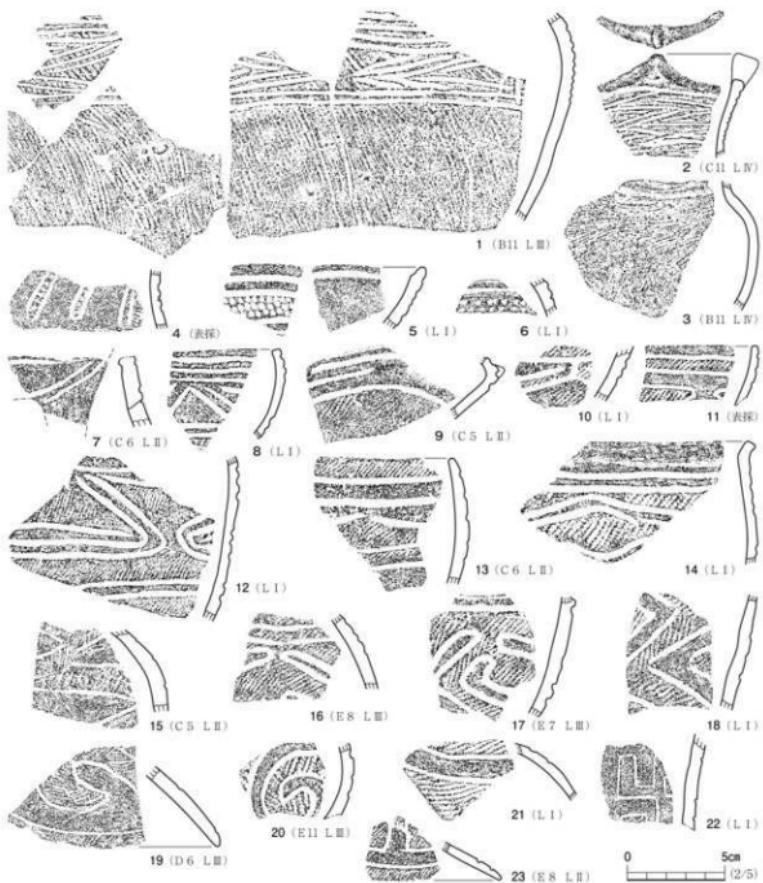


図100 遺構外出土土器（4）

図99-13は深鉢である。欠損により詳らかではないが、口縁部突起が1箇所認められる。口縁部直下に繩文帯、その直下に1条の沈線をめぐらせ、頸部を無文帯とし、体上部は速繁文と3条の沈線からなる文様帯がめぐらされている。文様帯下には条痕が施されている。内面の口縁端部直下に1条の沈線がめぐらされている。外面の一部に炭化物が付着している。

図99-14・15は深鉢と思われる。いずれも口縁部に山形突起を有する。山形突起は高く先端は尖り、外面に口縁部をなぞる沈線が2条引かれ、15は沈線以下が一段掘り下げられている。14はさらにその下に1条の沈線がめぐらされ、体部には目の細かな条痕が施されている。15は一段掘

り下げられた頭部に1条の浮線がめぐらされ、体部との境には1条の沈線がめぐらされている。内面にはいずれも山形突起の頂部から沈線が短く垂下し、同口縁部直下には1条の沈線が巡らされている。図99-16は深鉢と思われる。円文と浮線文により、図97-3と同じ構図の文様が施されている。図99-17は深鉢もしくは鉢である。口縁部直下には外面に匹字文が、内面に1条の沈線がそれぞれ施されている。外面にはわずかに赤色顔料が付着している。

図99-18は浅鉢である。口縁端部は遺存しない。文様帶の上半に工字文、下半に地文の上に重ねた綾杉文を配する。体部下半には地文が施される。地文は無節のようである。図99-19は浅鉢と思われる。口縁部に山形突起を1箇所有し、このほかに口縁端部直下の外面に突起を有する。山形突起の外面には、頂部から短い沈線が垂下し、口縁部直下には5条の沈線がめぐらされている。口縁部は内面に肥厚しその上面に1条の沈線がめぐらされている。

図100-1は、図98-2と同一個体である。図100-2は深鉢である。波状口縁で、波頂部の上面に楕円形の匙面を有する。口縁部直下には数段の綾杉文が施され、内面には丁寧な磨きが施されている。外面の一部には炭化物が付着する。図100-3は、深鉢と思われる。頭部は無文で、体部に条痕が施されている。図101-10・11はいずれも細い沈線で、10は綾杉文が描かれ、11は斜位の線が引かれている。

図101-12・13は粗製の深鉢である。12は口縁部を無文帯とし、体部に網目状捻糸文が施されている。13は条痕の他、条痕に沿う縄文側面圧痕が1条施されている。

2 弥生土器(図100-4~23、図101-1~9)

図100-4は、深鉢と思われる。太い沈線で細長い舌状のモチーフを縦に3単位ほぼ等間隔に描き、その内部には列点が充填されている。

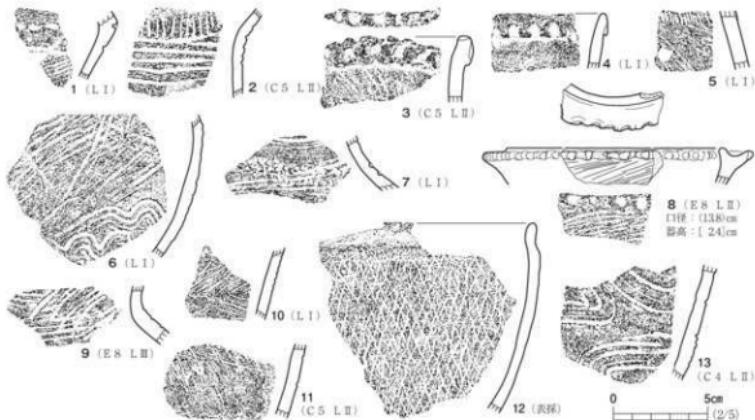


図101 遺構出土土器(5)

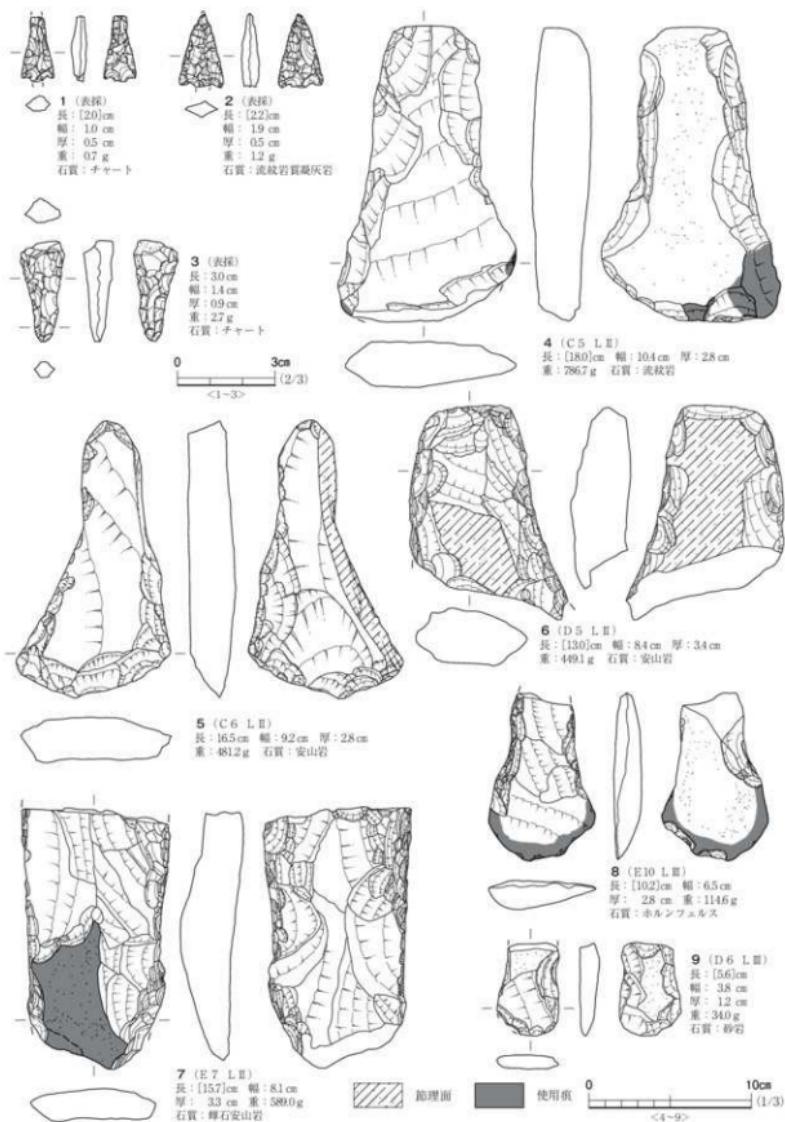


図102 遺構外出土石器（1）

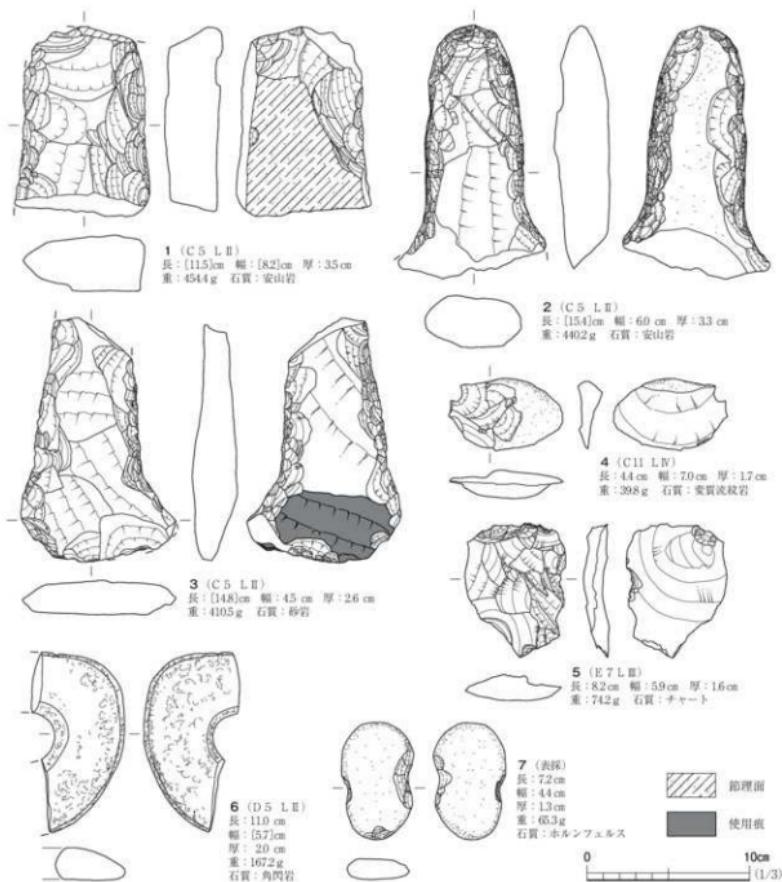


図103 遺構外出土石器（2）

図100-5・6は鉢もしくは深鉢である。5は口縁部直下の外面に3条の沈線をめぐらせ、その間が密な刺突文によって充填されている。内面の口縁部直下には1条の沈線がめぐらされている。6も同様の文様が描かれている。

図100-7は器形不明である。輪積み痕で剥離した破断面に直交する方向に延びる直線的な縁と円弧を描く縁があり、これが透かし孔とすれば高杯の脚部の可能性があるが断定できない。外面に二本一組の沈線文が描かれている。内面は整形が難で凹凸がみられる。

図100-8は鉢である。口縁部直下に数条の沈線で上下が区画された文様帯がめぐらされ、内部

に三角形のモチーフが描かれる。文様は地文の上に重ねて描かれ、三角形の内部は磨り消されている。

図100-9は浅鉢である。体部最大径の位置で屈曲し2条の沈線間の連繫文が配される。体下部には地文が施されている。図100-10は深鉢と思われる。変形工字文が磨消繩文技法によって描かれている。図100-11~14は深鉢、15は壺、16~18は深鉢である。いずれも磨消繩文技法で三角形、菱形、両者を組み合わせたモチーフが描かれている。18の地文部に薄い赤彩が施されている。図100-19は蓋、20は壺である。磨消繩文技法で、渦文が描かれている。図100-21は器形不明である。磨消繩文技法が用いられる。モチーフは不明である。無文部に薄い赤彩が施されている。図100-22は深鉢である。磨消繩文技法で矩形のモチーフが描かれる。繩文は目が細かい。図100-23は蓋である。磨消繩文技法で文様が描かれているがモチーフは不明である。

図101-1は鉢と思われる。体部と頸部の境の稜線に列点がめぐらされている。体部には列点からやや間隔をあけて徐文が施されている。

図101-2は壺である。沈線を密に引いて文様としている。図101-3・4は壺の口縁部である。外面に粘土帯を貼りつけて複合口縁とし、3は複合部の中ほど、4は複合部の下端に連続する指頭圧痕がめぐらされている。3は口縁端部にも指頭圧痕がめぐらされている。指頭圧痕にはいずれも爪形がみられる。3の頭部には粗い条痕が施され、4の頭部には太さ1mm未満の沈線が斜位に引かれている。

図101-5は器形不明である。5は条痕と刻み目がめぐらされている。刻み目は爪先によるようである。

図101-6・7・9は壺である。いずれも外面に条痕が施され、7はその上に重ねて2・3段の刺突列がめぐらされている。

図101-8は器形不明で、内湾する口縁部の破片である。外面に受け部がめぐらされ、受け部の端部には連続する指頭圧痕が爪形を交えてめぐらされている。受け部の下面から体部へはなだらかに湾曲し、条痕が施されている。

3 石 器(図102・103、写真43)

図102-1・2は石鎌である。有茎鎌であるが、中茎が欠損している。図102-3は石錐で、断面形が菱形で、先端部が丸みを帯びている。図102-4~9、図103-1~3は打製石斧である。図102-5・8・9など刃部が遺存する資料をみてみると、刃部の片側が広がる形状となっている。図102-4・7・8、図103-3には使用痕がみられる。図102-6、図103-1・2は刃部が、図102-7~9、図103-3は基部が欠損している。

図103-4・5は剥片である。4は横長の、5は縦長の素材を利用している。図103-6は環状石斧で、半分が欠損している。刃部は丸みを帯びている。図103-7は石錐で、扁平な礫の両側縁と下端に剥離を加えている。